

事



真・自分

壹部

みきあり

かきけり

弐部

参部

壹部

みきあり

[illegible]

生まれつき、そういう環境だった。
それが普通だとの自覚もないほど、普通の日々だと思っている。

ここは辺境の島国、
手付かずの地域。

それゆえ常識という意識が、
その地方だけの独自の文化を形成していることもある。

四辺の三方を山に囲まれ、残る一方は海岸。

地方を分別した、さらに一部の単位、地域。四辺ノ町。

陸の孤島というほど断絶されてはいないものの、風通しは閉じられた地域。

人は自ら、「輪」の中にいようとする。

都会に暮らし、便利さに慣れ、そこに「輪」の意識もなかったり、
田舎に暮らし、どこか不便さはわかっていても、「輪」から出られなかったり、

そういう、「輪」

今から漫画は描けない。

描きたい内容が、仮に単行本の2〜3冊だとしても、発売までに何年かかるだとかの時間的な問題、

それに絵心的な問題、

子供の絵にもならない画力から画力向上の練習、作者のキャラモデル絵の確立、これら前提だけを解決するために、どれほど時間がかかることか。

いつか漫画やアニメとして表現できたとしても、まずは土台となる脚本を仕上げようか。ストーリーは曖昧だけれども、明確な「敵」はハッキリしている。

「敵」

この「敵」の絵を描く？

作者のこだわりを込めて、作者なりに心を込めて、この「敵」を、キャラクターとして描く？

その気にはなれないね。

作者本人がその「敵」を嫌いすぎている。

「敵」を描く気になれなかった元々漫画志望者。

それでも曖昧なストーリーは、ぼんやりある。

まずはこのストーリーを脚本として仕上げてみよう。

小説であれば文字だけのぶん、

作成難易度としては、漫画やアニメよりも、EASYだ。

文字であれば、現せられるかもしれない。

だからこうして小説という表現を選んだ。

作者は小説が苦手だ。
文字しかないからだ。

難しい漢字がこれでもか、と並んでいる、文字ギツシリ感も苦手だ。

例えばゲームなどが先で、

後から小説が出たのであれば、文章の奥に、キャラクターや場面が視える。

そうじゃない場合は、あまり視えない。

小説初作は、ほとんど見向かない。

でも小説であれば、書けちゃうよ？

小説であれば、文字だけで済む。

さて、小説を書くにあたって。

作者は小説が苦手であり、文字が詰まりすぎている本を見ていると目眩がするから、作成の段階から文字間を所々、空けている。

そのほうが作者本人も、あとから読み直すときに、読みやすい。見やすい。

そのため読者にとって普通の小説、一般的な小説と比べると、文字間が空いているスカスカの文章に感じるかもしれない。

まあ、それでも？

作成時点、書いている時点では、読者は作者だけだ。

自称範囲においては、おもしろいの自画自賛で十分だ。

の割には、手応えがあるな。

けっこうおもしろい。

このストーリーは、作者にしか書けない。

仕上げて、ある種の使命感にも似た活性感にも、作成モチベーションの後押しをもらう。
次から次へと文章がヲリてくる。

だから作者の、やりたいようにやった。

○ 高校3年 教室 杪夏

浮き足立つ、誰からともなく怪訝な雰囲気を感じる。

高校3年生の先、いよいよ進路の先へ、大事な時期となると、当然か。

初めての感覚に、子供が戸惑うのも無理はない。

無難に就職して給料を貰うのか、大学へ進学し見識を深めるか。

ここ四辺ノ町、のさらに末端高校でも、一大イベント「進路の会」が開かれていた。

何も言わなくともお互いの顔色を観察伺い、自らの手札を数枚こしらえようとすると、そこはまだ無知の学生。

自らの進路を自らの裁量だけで携えようにも、

自ら整えることができるほどの、ロクな材料は持ち合わせていない。

高校は、ずいぶん学費の安い高校だったらしいけど、お金のことは、よくわからない。

○ 高校3年 客室 杪秋

数枚のトランプカードの背を見せ、扇状に広げてみせた。

中年太り大柄男の先生、の肥えた手指に挟まれてトランプが並んでいる。
一枚とれ。ということだ。

「初期工場」

これは会社名らしい。

会社は世にいくつかあるらしいが、その名前、種類などはほとんど知らない。
そのため特別な印象はない。ああこういう会社があるんだな。というだけ。
初期工場。どうやらこれが私の就職先となるらしい。

トランプに書かれていたのは、ランダムな会社名だったようだ。
訳もわからず、一瞬で就職先が決まった。

学校の先生の役割のひとつとして、卒業後の進路の段取り。

18歳、高校生、学生、進路、就職、進学、

これらを工面するのは、本人も大変だし、その周りの関係者連名々も大変だ。
大変なのは先生も同じだった。

進路を迷って動けないくらいなら、
とりあえずトランプで、気軽に、1枚選ばせる。

○ かつてない変化

学生から社会に勤める変化に生じる、

相談、悩み、選別、試用、苦勞、苦心、適正の有無、

これらに向ける生産性のない活動エネルギーをすべて省略できる。

実に合理的だ。

生徒は大勢おり、その一人一人の進路を見届けるのも、結構な作業量だ。

ランダム配布で解決。

作業力を格段に減らせる。活動エネルギーも節約。実に合理的だ。

いわば、クジ引き就活。

仕事先との相性適正もクソもない。

手っ取り早い合理的なクジ引き就活。

例えばそのクジ箱の中に、ハズレがあらうと、アタリが無かろうと、関係ない。

さつさと数いる生徒を、出荷する。

手っ取り早く、進路先へバラ撒くこと自体が重要なこと。

○ インターンシップ

四辺ノ町、末端高校ではこの当時、学生のアルバイトが禁止されていた。

今では社会の学び、仕事の学び、

社会体験としてインターンシップ、職業体験などもあるが、

この当時は、わずかな仕事体験の入口となるアルバイトさえ、禁止されていた。

禁止の理由は不明だが、

「学生が仕事に來ても役に立たないから」

みたいな雰囲気はあった。

私が高校3年の途中くらいか、突然のように、校内全体アルバイト解禁。となったが、私は真面目な生徒。学生業を主軸にしていたこともある。

校則をそのまま信じてアルバイトも不要と思っていたし、

アルバイト自体、不良連中のやることであり、変に怖い印象があった。

禁止が解禁になったとて、突然じゃあやります。とはならなかった。

○ 時代 地域 閉じられた「輪」

この「輪」の中。

この地域では、これが常識という認識とも思わないほど、当たり前のことだった。普通の日常の中。

クジで引いた、初期工場。

マジックでキュツと赤丸。

我らが末端高校の、今年度優等生印。

これに推薦という色を付けて、私を送り出してくれたようだ。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード ークジ引き就活ー

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『こちらでよろしいでしょうか』
黒社 『オウ』

話手『

』

当記載の小説構成においては、各セリフに発言者名を付与している。

小説において、話手を書かれている本をあまり見ない。

タブーなのだろうか？

それでも敢えて、この手法を取り入れている。

『 声優のセリフ、はつきりと発声を想定したこの括弧も、普通の「」ではなく、わかりやすくするために、太めの『 』

では「」に入る文章のニュアンスは、読み進めていただくと、わかるかな？

本屋。

中古本屋でもいい。

何気なく手に取る、初見の小説。パツと開いた途中ページ。

「ほにやららと待ち合わせ、ここだよね」

誰のセリフか、わからないでしょ。

そもそも小説は1ページ目を絶対の読書スタートとして、話の理解と登場人物の理解、順に紡がれる媒体？

いやいや本なんて読者の自由に読ませろ。

それでも、1ページ目から順に読んでくれてる貴方、ありがとう。

○ この丸

作者本人が漫画におこすにしても、

各セリフの話しと登場人物を一致させておくと、あとからの見直しもわかりやすい。
いわば台本のようなもの。

台本の書き方も少し取り入れている。

この「○」は「柱書き」といって、台本ではその場所がどこであるかを示している。

作者が書く小説においては、使い勝手の良い「○」として活用している。

必ずしも場所を示すわけではなく、

場面の切り替わりや雰囲気をわかりやすくする意味においても、

目印として「○」を使用している。

ともあれ、これが原作。

いずれ漫画になるにしても、実写ドラマになるにしても、脚本は必要だ。

小学、中学、高校くらいまでだろうか、漫画家への成り方もわからないのに、漫画家になろうとしていた。

ノートに手癖だけのラクガキを描いていた。

当時の流行のキャラクターだったり、空想の主人公だったり、

最初から、コミック2、3冊の漫画を描こうか、とも考えていた時期がある。

4、5ページくらいは、描いたかな？、そこまで。挫折した。

絵もそうだし、

まずストーリーがまとまらなかった。

そのまま無理して漫画を描き続けたとしても、

世に出すのは？、何十年後になるの？、私、生きてるうちに、仕上がる？

であれば文字だけだとしても、ストーリーに集中して、さらに早めに仕上がる。小説のほうがいいんじゃないの？

絵も好きだよ。見る専かもしれないけどね。

漫画家志望の名残りもあるためか、

書かれている表現のほとんどは文字でありながらも、

これまで漫画を見ていれば見ているほど、その場面が、シーンが、視えるように。

映像が視える小説。

各場面場面、ラフや絵コンテなども、文章を作成しながらも、

妄想の絵は、視える。妄想の映像は、視える。

作者が視えている漫画っぽい表現も想定して、取り入れているつもりだ。

伝わるかなあ？

○ 初期工場

工場員『ペラをバラにするんだよ』

工場員『片乙くこれビアナにあるく？』

どれも初めて聞く単語だった。

ーペレコチチャーー これの意味を説明してください。

意味不明と思ったはずだ。

説明？ 出来ないだろう。

あまりに唐突な言葉が交わされている。あまり日本語のようにも聞こえなかった。私が知っているはずがないのは、わかっているだろうに。

昨日今日、学生から工場員と環境が変わったばかり、右と左さえアヤフヤなのに、なぜわざわざ私に聞いてくるのか、少し疑問だった。

初期工場に就職してから、

半年く1年は、こんな感じのやり取りが時々あった。

まあクジ引きの初期工場とはいえ、高校からの推薦も付与されている。

推薦という優等生限定への贈り先として、就職した仕事だ。
問題ない。問題ない。

それにしても、

半年〜1年周期だとしても、調子のノらない日も数日はあるだろう。

不調だったとしても、出勤となれば問答無用で「働くかあ」、としないといけない。
社会人とは、結構不憫な宿命だ。

問題こそないが、工場勤務とは、こうまで変わり映えのない日々なのだろうか。

毎日、まったく同じ、作業内容。

毎日。8時間。含み時間9時間。同じ。内容。繰り返し。同じ。内容。繰り返し。

別に「繰り返し作業」自体は得意というか、

それほど苦もなくできるタイプだと自負していた。

ゲームなどでは延々レベルアップの作業を続けていられる。

言葉にすると同じ「繰り返し作業」なのに、

事が工場の仕事となると、妙に大変に感じることに、妙な違和感もあった。

○ 私は真面目だ

私が真面目なのは自分でも自覚しているつもりだ。が、60歳まで真面目にひとつの仕事を続けるとしたら、

私はあと40年程、延々とこの作業を、延々延々と続けることになるのか？
クジ引きで、引いただけの？

両親は、その片親は、最初に勤めたひとつの仕事を60歳程まで、40年ほど続けられた真面目な人であり、

この我子も当然、最初に勤めたひとつの仕事を半ば永遠に続けるものだと言って疑わず、おっと雑念が入っちゃった。

とにかく今の仕事、初期工場の仕事だ。

今でさえ、変に大変に感じ、妙な違和感を感じているこの仕事を？

これから40年も？

本当に、何事もなく？ 日々通学して続けられるの？

通学、通学？

あれ？ 学生の学校通いは通学だけど、会社に通うのはなんて言うんだろう？
正しくは「通勤」

普通に生活していれば、知ってて当たり前かと思える単語。

それすらわからなかったということは、普通ではない気配もある。

そんなこともわからないほど、なんの準備も出来ていない状態での、
クジ引き就活だった。

○ メンテナンス

工場内に並ぶ、大きめの機械、そのメンテナンスをしている工場員を見ていた。

・・・・何もすることがない片乙。

そういえば、私はなんで知らないんだ？

工場に勤めることになったところで、

稼働する機械のメンテナンス技術を、何ひとつとして、知らない。

それだけじゃない。

事務室にはパソコンが並んでいるけど、何をしているのか、まったく知らない。

パソコンの起動のスイッチひとつ、押すボタンのどれかとか、まったく知らない。

正直パソコンが目映ったとて、

難しそうなボタンがたくさんある機械、がデスクにいくつか並んでいる。

くらいしか感想がない。

工場で扱う機械のメンテナンスの仕方、何かひとつの手順とて、まったく知らない。

潤滑油を持つのも初めてだし、

何この怪しいスプレー？、液体？、

潤滑油を機械に振り掛けると、錆びると思っていたくらいだ。

もう、まったく知らない。

工場員『誰も教えてくれなかったの？』

何を知らないのかもわからないほど、知らない。

なぜこんなに知っていることがないのか、ということも知らない。

こういう技術や知識？ 操作？ は、

自ら勝手に、半自動的に知れるものなのか？

それとも、誰かに教えてもらうものなのか？

もし両方なかったら、どうすればいいんだ？

片乙『私わかりません』

今日の私のこの一言も、

工場員『ワタシ、ワカリマセン』

などと、モノマネ言葉、からかわれたが、

思い返してみれば、わからないのも当然の背景があった。

なんのスキルも、技術も、知識も、感覚も、学ぶことがなかった。

では、なにを学んだかと思いつくと？

方程式あたりが真っ先に思いつく。

もちろん、仕事では、方程式など一切使用しない。方程式など、クソの役にも立たない。

これは私が学ばなかったのか？

それとも、何者かの意図により、学ばされなかったのか？

○ エスカレーター階級位

順に、上位クラスになるものだと思っていた。

ゲームという基礎クラスから、自然と上位クラスへ進むように。

小学級クラスから、中学級クラスへ、から高校級クラスへ、から大学級クラスへ、から社会級クラスへ、といった具合。

私の場合、大学級クラスは通らなかったわけだが、

こうして仕事している様子を客観的に見ていると、

社会級クラスが、高校級クラスよりも上位だとは、とても思えない。

初期工場で毎日8時間の仕事をする相方は、足し算引き算もできないオバンだった。

上位である社会級クラスが、小学級クラスの算数もできないとは、どういうことだ？

学生として必要な技術を学んで社会に進むのであれば、学生級クラスと社会級クラスでは、社会級クラスの方が上位の存在。となる立ち位置のはずだ。

どうにもしつくりこない。

あきらかに学生の頃の、まわりの同世代のほうが能力が高かった。

基本的な算数、足し算引き算すら、まともにできない社会人も珍しくない。

学生の同級生では、方程式はできなくても、足し算引き算はみんな出来るぞ。

社会には、算数ひとつできないオジソオバンが、ごまんという。

上位の社会人が、下位学生人の基本的知技すらないとは、どういうことだ？

思い出し、

学生の頃を振り返ってみる。

学生としての同世代の者達、社会人としての先生達。

上位の存在である先生から指示があり、下位の学生が従う。

上位と思っていた大人、社会人は、実は、なにもできない人達の集まり？

であれば我が物顔で教諭を奮っていたあれば、誤魔化していただけ？

誤魔化しているだけの先生職。

に就いている者にとっては、私は素直に従う良い生徒、都合の良い生徒だった事だろう。

就いている者にとっては？

学校にいた先生職全員が、誤魔化すことしかできない先生職だったのではないか？

先生達に能力がない、団結も連携もできないとすると、私が中学から高校になったときの不自然な急注目具合は、なんだったのか？

○ 環境の変化

学生と社会人の環境の変化。

昨日まで陸で暮らしていた者が、今日から海中で暮らすことになるくらいの変化と比喻。それほどの外れな話でもないだろう。

なんの準備もなく陸から海中に放り込まれては、呼吸ひとつままならない。

高校卒業前の一大イベント「進路の会」つまり就職活動にて、

「もの作りがしたい」と言った。

ら、ダンボールとペンキが並んでいる工場での仕事に就くことになった。

違う。そうじゃない。

私は何を知らないのかも知らないほど、まったく何も知らない状態で、社会人として、工場員として、学生卒業後すぐに、仕事とすることになった。

これが仕事か。

酸素が足りない？

酸素はある。

小さい窓も開けっぱなしになっているし、トラックに搬入するシャッターは全開になっていることもある。いくらかは外の空気と交換しているはずだ。

酸素が足りない？

はずはないが、説明のつかない息苦しさを感じていた。

初期工場、とても面倒だった。

なんとも言えない面倒さを、誰かに話したかったのかも知れない。

初期工場に勤める日々、

1年ほど経ったある日、見越したように、

「ジリジリリン、ジリジリリン」

家の電話が、かかってきた。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード　―初期工場―

○ 何処とも不明な一室にて

黒社 『アレだ』

配下 『はい』

配下 『キレイどころに伝えときます』

配下 『さっさと巻き上げましょ』

黒社 『しばらくアソぶか』

5 | 別物への成長 |

学生人と社会人は、別物だ。

呼吸の仕方ひとつとっても別物だ。

例えるなら、海の生き物が、突然、陸で生きるようになる話だ。

海生物を学生人、陸生物を社会人と例えよう。

エラ呼吸の学生人のうちから、予め、肺呼吸を会得しておかないと、社会人になったとて呼吸ひとつ、ままならない。

すぐに死んでしまう。

海から出てすぐ冷凍され、陸で保管されているだけの荷物社会人も多くいることだろう。

- ・世を知り理解を尽くす親
- ・一緒にがんばっている信おく友達
- ・扉を開けるための鍵にもなる先生
- ・誰かと連携し、民々と己を紡ぐ仕事
- ・フォローという仲間、応援のある役目

すべて経験している人間がいるとしたらスーパースターと呼ばれているだろう。ひとつふたつ経験していれば、普通の一般人となれるだろう。

全部なかったら？

ひとつの出来事とて経験していない、ひとつも会わないことなんて、ありえない。あなたの知らない世界は、すぐ隣に。

ナゾナゾクイズではない。

想像もできないほどの、さまざまに閉じられた環境が、社会に潜んでいる。その発想を巡らせ、どこまで理解できる？

運だよね。

だってこれらの出来事、確約されてないもの。

「貴方は、何年何月何日に、最高の出会いがあります」
確約されてないでしょ。

ひとつの出来事もなかった者も、いる。

自分の意識が足りない？

意識による行動をしなかったのが悪い？

ではその意識の「元」はどこにあるんだ？

その意識は、なにを「元」に発生するんだ？

「元」があつた者は、本人も気付かないほどの「きっかけ」があつたんじゃないか？
「きっかけ」も運だ。稀に、無い者もいる。

本人の行動も大事だ。

行動を起こせるようにするための、「後押し」があつてもいい。

◇ 社会へ進むための装備

やっぱりこれも装備なんだよ。

スキル。防具。武器。ステータス。LV。

社会に出る前に、準備は必要だ。

ゲームに置き換えると、よく解かる。

高難易度のエリアに進むための、適正LVとか、適正装備とか、あるでしょ。
現実の場合、高難易度エリアとは、社会エリアだ。

学生の域でどんなに訓練したとしても、それでも社会的長者と比べては小物かもしれない。
それでも訓練して木の棒くらいの武器があれば、一応の、武器にはなる。
丸腰で高難易度エリアに進むとか、やるもんじゃない。

どうしても高難易度エリアをも丸腰で進むなら、「技術」という絶対条件がいる。
その場合社会に置き換えると、「技術」がある時点で丸腰でもない。

まして、クジ引きだけで社会に放り込むとか、もつてのほか。

◇ ゲームプレイ

ゲームはやるかな？

スマホ、TV据え置き、PC、機器は問わないが、デジタルゲームだ。

ゲームはおもしろい。

おもしろさの理由のひとつに、正直さがあると思う。

アイテムの1個は1個、100回集めると、100個になることも正直だ。
集める1回1個の行動が、必ず自分のためになる。

その動線も自然と繋がり、わかりやすい。

LV上げ周回も続けると続けるだけ、その労力はすべて自分のLVupへと繋がる。

ゲームは正直だ。

日々重ねたゲームは、
あの人、あの物語、あのキャラ、あのストーリー、あらゆる経験体験をとおして、
自分の細胞へと染み込む。

◇ 一方だよ 現実だよ

集めたアイテムの1個1個が、手元に残らない感覚、
せっかく自分で集めたアイテムを、誰かに掠め取られる感覚、
LV上げ周回した経験値が、誰かに掠め取られる感覚。

スキル資格にしても、周知させず隠蔽したり、取得しようにも難易度調整バグってるよ。
もつとこう、みんな扱いやすく、安全な方法があるんじゃない？

どれだけやつてもアイテムが増えない、
どれだけやつてもLVupにならない。

嘘が正直であり、嘘は悪いこと。

わからない。複雑。

自分以外の「自分」が、現実の「理」に介入しているためだ。

ゲームであれば、あんなにわかりやすく、あれだけおもしろい世界なのに。
現実の「理」も、ゲームになればいい。

現実の「理」が、ゲームの「理」へ変換されると、

誰かに、やらせて、「自分」のアイテムを増やす、自分以外の手元に残る。
そんな複雑な行為はできなくなる。

誰かに、やらせて、「自分」のLv upへ換算する、自分以外が強くなる。
そんな複雑な行為はできなくなる。

自分で地道にコツコツと、

一定間隔でアタリが来る、ゲームの「理」

これができない奴、現実で複雑を操っていた「自分奴」は滅ぶ。

現実の「理」も、ゲームに習うといい。

そのためには、
運の平等化だ。

どうすればいいだろうか？



○ フレンドリーな電話相手

電話相手 『元気？ 何してたの？』

電話相手 『へへへ おもしろいね〜』

電話相手 『そうなんだよね〜』

電話相手 『そんなわけだからさ、一度会えないかな〜』

電話越しだけど、フレンドリーに話しているのがわかる。

多分会ったことのない人だけど、良い人そうだな。

電話とはいえ久しぶりの若々しい話もできて、嬉しかった。

聞けば私にしか教えられない、とっておきのイイ話もあると言っていた。

私にイイ話を持ちかけられるということは、

私の学生の頃の功績の噂、それらが社会に拡まったことだろう。

私の噂も遠くまで届いているものだと、我ながらある種の関心も自負していた。

打ち合わせの通り、待ち合わせへと向かう。

○ 少し昔話 中学の私と、高校の私

私は高校の頃、先生達の言う事は素直に従い、

それはそれは、けっこう先生の希望に沿った活躍をしており、それなりの優等生だった。反面、

中学生の頃は、周りや先生との歯車というか互換も合わなかったせいか、

勉強は同学年の最下位をうろうろ、スポーツも同学年のビリッケツをうろうろ、劣等生だった。

学校の頃ひとつ題材にしても、

教育という概念における、当時のスタイルにも問題はあった。

暴力が正しい教育。

と信じていた者が、多くいた。

いつからか社会流行りも変わり、その習慣は薄くなったものの、

「膿」を被ったまま、補填や修正など無く進むことになった者も、存在していた。

○ 中学期

例えば真夏の炎天下、暑く、失われる、水分。

ダメダ。運動中に水分補給してはいけない謎の制限。

腹に水が溜まってチャポチャポしていると走れないから、という理由らしい。

中学先公『なに水飲んでんだガキドモオ、ヤル気ねエんか、止まるな走れエエ』

運動中に水を飲むな、水分補給するなという意味は、当時から推測した裏テーマとして、他人よりもより苦勞してこそその美学。

みたいなところがあつたかもしれない。

虚弱者も、強壯者も、美学に則り、同じメニューの走り込み。

誰かが数秒でも遅ければ、虚弱者も、強壯者も、まとめて連帯責任、か。

当時からなんか変だと思つた。アウトだ。

振り返ると、先生職という働き方、タイトじみた問題もあつたのだろうか？

スポーツが過激であれば、座学も過激だ。

寸胴ベタ塗り厚化粧オバンが、英語授業の担当者だった。

This is a pen ジスイズアペン。

My name is kataotu マイネームイズ片乙。みたいな授業内容。

寸胴『片乙、ここっ、読んでみて』

片乙『・・・、わかりません』

本当に英語が読めなくて、教科書の例文も意味不明の文字体に見えていたから、
「わからない」と答えた。

寸胴『わかりまっす、読んのっ、片乙』

寸胴は自分が担当して、ちゃんと教えているつもりの英語授業だから、
生徒は皆んな、英語を読み解き、理解できてると思っている。

だから「わからない」と言ってるんだから、わかるわけねえだろ。

英語以前に、日本語通じないぞこの寸胴。

田んぼの土いじりしかしてない寸胴を拾ってきて、突然突貫の学校教師にするから、
こういう事になる。

○ 高校期

高校進学、

私は、中学から高校に入ったタイミングで、先述の通り、なぜか急に優等生になっていた。方程式も解けるようになったし、

英語は嫌いになっていたから、選ぶ時点で授業ごとやらないことを選んだ。

末端高校とはいえ、

勉強もスポーツも、同学年の上位半分くらいには、安定して順位の席を保っていた。

先生方の言うことも素通り聞き入れる、素直な良い子。

高校先公『片乙、いいわお前さん』

高校先公『片乙、これだよ、見習えお前ら』

高校先公『片乙、なるほどね、ほおすげえんだな』

先生『片乙、お前には格がねえわ、お前は成れね』

高校先公『片乙、お前に俺が教えてやれることは無いわ』

高校先公『片乙、お前はそれでいい』

ところが度々、視界が急に狭くなり、何も見えなくなる感覚もあった。

劣等生だった中学生が、

末端高校では一転不思議と、優等生として、モテはやされる。

最下位から上位半分へ入る急成長。

ある意味、急激、劇的な、急成長劇。

モテはやされはいつしか、私という噂の高校生がいます、

全国にも噂が回っていることだろうと、私は根拠もなく自負していた。

知らない人から電話がかかってきたとしても、

疑う？

それどころか、私の噂が届いた人からの電話。

電話でも有名人をヨイショするかのような文言の数々。

学校内、少なくとも同学年の中では、ある程度の注目される生徒だった私。

その噂が社会にも流れていたのだろう、私も結構な有名人なのだと。

このときは、そう思い込んでいた。

これも、四辺ノ町。

陸の孤島というほど断絶されてはいないが、風通しは閉じられた地域。

という環境が生じる独特の、ひとつの思い違い。

ゆえの自負だ。

学生期では不良人種とされるタイプの方が、

案外、

社会に出てからは、なぜか一般的に活躍できる、有望な人材となるケースが多い。

学生では、

優等生にはなったほうがいいけど、

優等生にはならないほうがいい。

うーん、難しいな。



真



成功体験とか、大事だと思う。

例え、おんぶに抱っこ、八百長の姫プ、外堀りコテコテ固めたものだったとしても。

学業にしても、

学び、よかった、楽しめた、わかった、できた、理解できた成長。

どれか一部でいい、

少しでも手応えを感じられた余韻があれば、次に繋がる。

失敗。できなかった。

たまにはあるさ。

毎回そうだったら？

毎回、本人の努力して精一杯やって、それでも、

毎回、できなかったら？

授業についていけない、みたいな話とも似ている。

中学の片乙もそうだ。

別にわざと遅くしてるわけじゃない、

駆けっこで追いつけないものは、追いつけないぞ。

もつと足早く回せと言われても、限度なんだから。

しんどいわ、つてなるだろ。

「わからない」と言っているのを、

無理矢理「わかるから答えろ」と言われても、

「わからない」ものは、意味不明に「わからない」

なだこれ、つてなるだろ。

結果だけ見て、あいつできない奴、あいつ失敗する奴、あいつ足手纏いな奴。周囲の思い込みも加重となり、できたかもしれない成功も、反転失敗となる。手応えどころか、勉強とか練習が嫌いになるだけだ。

○ ファミレスの角の席

友好的な電話相手との待ち合わせの場所だ。

一目で美形とわかる人物がやってきた。

たぶん初対面だけど、電話の良い人そのままに、美形の積極性もあり、ドキツとする。すぐに惚れてしまいそうなほど、引き込まれる。

1人目の美形は、「助けて」と頼ってきた。

2人目の美形は、「買ってとおねだり」まあこれも頼られていた。

「助けて」と言われれば、そりゃあ「助ける」

「頼られ」れば、そりゃあ「応える」

なにしろ優等生だった高校生の時分から、さほど月日も経っていない。

高校の頃は周りと協調し、頼られれば任せると応える。

人助けは大事と思う真面目さその通り、周りをそこそこ助けていた、そこそこの優等生。ここファミレス席でしている会話のひとつも、真面目な優等生の使命。

協調のひとつ、人助けのひとつ。

単に人助けと思って、サイン。

印鑑は持ってないから、指紋のハンコ。

「よっしゃあ売り上げノルマ達成イエーイー」

「パンパカパーン」

何か物体を購入。したらしい？

ローンを購入したことは、ある意味、確かに、人助けにはなっているさ。

初対面の美形の、ノルマ達成のため、お金を贈呈している。

学校では算数方程式国語、といった単語しか習っていない者にとって、

営業だの、ローンだの、

詐欺だの、押し売りだの、

売らせるだの、買わせる話術だの、

その真意など、到底わからなかった。

高校3年後半の時期だったか、詐欺に気をつけるように、みたいな注意喚起はあった。実際に当事者として目の前で起きると、対処のしようがなかった。

まして、

目の前の人が、私に助けを求め頼ってきているのだ。

私は優等生。

人助けから逃げて断るだど？

そんなこと、だんじてできない。

私を頼り助けてと願ってきた相手、フレンドリーで友好的な美形の相手が、

詐欺屋だなんて、発想もなかった。

少しくらい怪しいと思ったとしても、

頼られれば断れない性格の人が遭う、一場面でもある。

詐欺屋というより、押し売り屋とか、営業屋が本来は表現として正しいかもしれないが、小説の物語としてわかりやすく、美形の詐欺屋とする。

クーリングオフしなかった理由は3つ。

「1」クーリングオフという言葉自体、意味不明の言葉に見えて、無視したから。

「2」せっかく私を頼りにしてもらい、叶えてあげた願いを反故にはできなかったから。

「3」

購入後も「その商品を大切にしているよ」とか、電話でやり取りがしばらく続いていた。美形のあの人が、

ひょっとしたら人生のパートナー、恋人になるかも？ といった淡い期待があったから。

特に「2」と「3」は、自分への約束にも似ていた。

せめてこの約束は守らないと、

またあの時みたいに、約束を破ってしまうのは、いけないと思った。

○ 借金を買った後話

しかしなぜピンポイントで、私も含め私の一家が世間知らずだと、なぜ詐欺グループに知れていたのだろうか？

詐欺屋と連絡を取っていたのは、誰だ？

いくら詐欺屋とて、この民家が世間知らずだと、知る方法はどうしたのだろうか？

卒業アルバムには、たしかに電話番号一覧こそ載っているけど、

同級生の誰かが、詐欺グループと繋がっていた？

学校の組織？ 先生？ 同級生？ 蒸発した男？

何かしら、誰かしらから明確な情報がないと、

こんなに世間知らずの家目掛けて、ピンポイントで電話して来られないはず。

疑心暗鬼になると心当たりのある対象がありすぎて、というかそれを言っと、私を知る人物すべてに疑惑となってしまう。

でもとても特定できない。

○ 大金の重量

ともあれ手元に残ったのは、合計480万円というローン借金。

260万円の、MY車の、借金。

MY車は詐欺ではなく、その時の流行に流され、MY車購入。

これも率先して行動してなんぼの、優等生の名残りもあり。

車検とか税金とかも高額費用がかかるなら、最初に、買う前とか、そう言えよ。

90万円の、教育商材というガラクタ。の借金。

130万円の、アクセサリーというガラクタ。の借金。

給料は、ひと月に、12万円ほど。

各内訳、

車の返済月々5万円、教育商材の返済月々1万5千円、アクセサリーの返済月々2万円。
借金返済には、ひと月に、9万円ほどとなった。

○ 金銭ショック

社会に出て、まともに給料を貰っていたのは、最初の約1年だけ。
お金を使う楽しみがなくなった。

給料としてのお金を使う楽しみがなくなった。

仕事、給料、お金のバランスが、崩れたのだ。すぐに。

仕事をするのと、給料のバランスが、社会に出て、すぐくらいに崩された。

自分でも人生的に、「まずい」と思った。

社会に出たと思ったら、出足にローン借金を買わされ、

人生の初っ端も初っ端から、崩れてきているのが自分でもわかる人生設計、

なんとか軌道修正しなければ、

でもその手段の見当もつかない。

社会に出て1年で死亡。

この時点で人生が終了していたと語っても、決して誇張表現が過ぎる話ではなかった。

社会に出て1年で死亡。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード ―美形詐欺屋とローン借金―

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『なんやあれ』

配下 『ちよろすぎ』

配下 『デバフ貼れました』

黒社 『おう』

2、600、000円分割の50、000円 ≡ 52回。

52回とは、4年と端数含め4ヶ月。

900、000円分割の15、000円 ≡ 60回。

60回とは、5年。

1、300、000円分割の20、000円 ≡ 65回。

65回とは、5年と端数含め5ヶ月。

お金の学びが必要という意味である。

学生のお小遣いが、

5、000のつい先日、から急に、

4、800、000という借金を背負うのだ。

まともではいられない。

縁。

円と縁。

人と人の縁があるように、

人と金の縁もある。

金と縁が無い素質、これは実際証拠もある。

書類を用意するのは大変だが、揃えて示すことは不可能ではないだろう。

ツラいぜ、

人が生きる際の必須アイテムと、縁がない素質の状態というのは。

◇ 夢

印象のある夢を視たことはあるだろうか？

目標的な夢ではなく、

睡眠、寝ているときに視る夢だ。

作者は、ジェットコースターから放り出される夢を視たことがある。

コースター、レーンの頂点、逆さまになったあたり、スピードやら慣性やらで、身ひとつ、放り出される。

空中。無防備。自由落下。

ストーーーーーンと落ちていつて、地面などに激突、は覚えていない。
どこまでもストーーーーーンと落ちていつて、

いつの間にか夢は、
おわり。

この夢は、小学生くらいの時分に視た夢だ。

少なくとも成人と呼ばれる年齢くらいになると、この夢を視た記憶はない。

この夢の内容自体、覚えてはいなかった。

夢とは、

未来予知の観点として、片隅に記憶しておく、なにかしら予防になるかもしれない。

◇ 落ちた先

アクシデント。

落ちて、底へ。底辺へ。

底、地面に叩きつけたボールって、跳ね返るんですよ。
底へ落とされた威力に比例してね。

跳ね返ったボールは、
テメエに向かって、リバウンド。するかもしれないぜ。

ボールは、な。

人間は？

○ 雑誌掲載の高額転職？

ローンの借金もあったので、実家の町近辺からは遠い勤務地になるとしても、市街にあるような、なるべく高い給料の仕事、を探そうとしていた。

初期工場の給料では、借金を払い、自らの趣味などに払う金額には、切り詰めても心許ない。

足りない。

冷静に思えば、自分の失敗を認め、悪徳の押し売り詐欺屋だったと諦めて、焦りをジツと抑えながら約5年ほど、そのまま初期工場に勤め続け、

借金の返済のため、沈黙と辛抱に耐えながら暮らせばよかったのかもしれない。でもこのときは、多額への焦りもあり、

私は冷静ではいらなかった。

私は雑誌媒体にて、転職を考えた。

調子良くいくと、ジヨブマスターになれちゃったりして？

ページをめくれば、

「月に100万も可能」とか、「50万の給料」とかの仕事求人も目に付いた。

良い話なのではないか？

毎月100万50万あれば、ローン借金など屁でもない。ものの数ヶ月で返済完了だ。仕事の内容は？、よくわからないけど、

営業屋？、など、私にできるのか？、とも思ったが、皮算用としては魅力だった。

高めの給料。

例えば営業屋の面接に行ったこともあったけど、私は口が回らない人。

営業として勤めたところで、寄生されるだけと見抜いた営業屋の面接官。

見抜かれた私は何も言えなくなる。

「舐めているのか」の一言で門前払いもあった。

パソコン？ なにそれ？

結局のところ、手っ取り早く仕事に就けるところ、雑誌のページをめくり、

求めるパズルは、

高卒、無資格、不問。

警備員が脇役ながら、味のあったゲームを思い出す。

○ 遠足警備

マンションの一階にある、一般住居部屋と変わらない間取りの、小さな事務所。

結局就けたのは、市街に事務所を構える道路警備の会社。

それが遠足警備だった。

初期工場のオバンのコピペ色変えのようなオバン、

ひとつ加えるとドラム缶を被ったような寸胴オバンが取り仕切り、主任を勤める、警備会社。

給料は時給制、加入時は時給1000円、高いか安いかは、どちらとも云えないライン。私の職歴は工場ひとつ。

社会の仕事といえば、私は工場の経験を唯一のアテにするしかない。

だが道路警備の仕事は、工場の仕事とは、まるで別物だった。

例えば建物の中か外か、

機械があるかないか、同じ場所に居るか居ないか、

分秒時間ごとに前例なく変化するかしないか、など。

警備の制服は、

警察の服に似ているけど、警察とは偽物のような制服を着て、道路に立つ仕事だ。片手には白旗、片手には赤旗を持っている。

警備の身支度を知らない人からすれば、警察と見紛うのも已むない。

道路の轢かれる位置で立ち、工事安全、交通安全の名目で、赤旗で車を停める。しばらく停めてやると、まだかという不機嫌そうな顔をする。

まだかも何も、お前らは止められなくてもノ口いだろ。

この道路警備という仕事は、道路上に突っ立っている現場である以上、自動車そのものを相手にしたかのような、自動車自体とも濃い関係が見えた。

○ 大事な給料

仕事内容どうこうよりも、

日給と時給ということもあり、仕事がない日もあり、当然その日はゼロ円だ。

結局のところ、初期工場の給料よりも、さらに下がってしまったこともストレスだった。

さらには当初の時給1000円から、

『アンタは時給900円ね』『アンタは時給800円ね』と、下がっていったことも、ストレスだけはさらに高くなっていった。

体感で、初期工場からは、給料が半減。

1ヶ月で仕事日配布の割り当てが、1日だけということもあった。

働いた給料明細、

金額が、マイナス表記だったことがあるか？

給料明細を開くと、13782円。なんだこの端の「1」マークは？
マイナス？

仕事をした給料が、マイナス？

そんなバカな。

借金の、ローンの焦りをさらに加速させる。

○ こいつはイヤな奴

完全に、顔が台形。

エラの幅がそのまま肩幅くらいになっている。

エラ張り、これもオバンと同位置の主任。

オバンから見て？、エラ張りから見て？

片乙には一人で現場に行かせるのは、心許ないという印象だったようだ。

同僚の警備員はそれぞれ一人で現場担当することも多いなか、

私には常に監視役が配置され、その監視役こそエラ張りが多く出張っていた。

日毎顔を合わせる度、私の挙手立ち位置姿勢をこと細かに、おありがたい、お小言。

お小言と呼吸ひとつさえ、監視される窮屈感。

立ち位置に、お小言、

姿勢に、お小言、

声が小さいと、お小言、

ラジカセに録音して、私の声を私に聞かせる、なんて、お教育を受けたこともあった。

服のシワひとつに、お小言、

エラ張りは監視という、真っ当なお仕事にかこつけて、私を苛めている。

私物ひとつに、お小言、

同配置になるたびに、お小言、

手の角度にお小言、

足の角度にお小言、

お辞儀の角度にお小言、

エラ張りは、私を苛めている快感を感じている。

エラ張り自身のストレスを、私という扱い易い八つ当たり対象を使い、発散している。
なにかと因つけて、因縁、因縁、お小言、

私は内心、鬱陶しいゲージが順調に溜まっていつている。「超必」、発動目前だ。

あまりに日々続いて鬱陶しさが頂点ゲージに達した私は、
あらかじめ条件スイッチを仕込んでおいた私。

その日も、お小言、スイッチ起動、エラ張りの襟元をジユツと掴む。

片乙『じゃあかしい、鬱陶しいわ』

一応、道路上、工事現場にいる土木作業員は、お客だ。

叫んだので、何を言ったかは聞き取れなくても、揉めてる声は聞こえたはずだ。

エラ張りにとっては、隠しておきたい失態、

ついでに私が大声で反抗してくると思っていなかったんだろう。

エラ張『くそ生意気な、帰れ』

その日から私とエラ張りには、微妙な距離感を挟むようになった。

お小言は、多少？、控えめに？、なったかな？

私にとってエラ張りは、邪魔な嫌な奴でしかなかったから、ある程度離れることになる。その点はよかった。

私への監視自体は、別の者が変わる代わる担当している様子はあった。

窮屈な感覚は、多少マシになった。

エラ張りのねっとりお小言監視よりかは、淡泊だ。

○ 毎日長距離ドライブ

目立ったのは、早朝5時くらいに車と家を出て、帰りは夜7時になる。

つまりは毎日通う現場が遠かったのだ。

往復路で、100kmから150kmくらいだろうか。

そりゃ遠いさ。

市街地への転職を考えていたときから、ある程度遠い勤務地は想定していたけど、こういうことじゃない。

家に帰ってきたら帰ってきたで、電話で長電話、口頭だけで明日の現場の摺り合わせをする。

仕事の連絡手段が電話しかないから、他の警備員メンバーと通話中であれば、ツーツーツーだ。

不明の待ち時間。

これも家時間が、貴重な家時間が、ジワジワ削られる。

遠い現場が続いている場合は、3〜4ヶ月くらい、同じ現場が続くことが多い。

これだけ毎日長距離を運転すると、自然と運転技術も鍛えられる。

とにかく、周りの車が邪魔だった。

人が仕事のために秒分をマキ、貢献を示す、そして1分1秒でも早く家に帰りたい。車を速く走らせることも、仕事を速くできる、デキる奴の行動と考え、

周りのノロい車は、仕事もノロまな奴ら。

周りのノロま、遅っそい、遅っぞえ、車の数々が邪魔だった。

車社会の現代、なんでこいつらこんな遅っせえノロまなんだ？

ノロい、遅い、邪魔、ノロい、遅い、邪魔、ノロい、遅い、邪魔、

邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔、

邪魔で邪魔で、えええええいいい、もだえそうだ。

ミサイル、バズーカを撃ち込んででも、

前方にいるノロい遅い邪魔な、車々々車々々を、排除したかった。

銃火器は持っていないので、出来ることはクラクションとパッシングだけ。

クラクションとパッシングから、前方を爆破するビームが発射されないかと考えてもいた。

信号、テメエもだ。

それができれば視界クリアー、ストレスもなく快適にトバせる。

だいたい長いよ。

早朝5時に家の玄関開ける出発。から、夜7時に家の玄関開ける帰宅。とすると、14時間。

バカじゃないの？

車を理論値でトバすことができれば、家時間が数分だとしても稼げる。

その数分で、どれだけゲームができると思ってるんだ。

お前らは不要なローン借金もなければ、無駄に長い通勤路でもないんだろ、

私には金も時間もない、

どけー

邪魔と追い越した先にいるのは、決まってネズミ取り。

私の車には警察を引き付ける磁石でも付いているのか？

と思えるほど、

私の行く先々に、ネズミ取りは現れた。

生活費に予定のない、突然消える金、カツアゲ罰金。
紙切れ一枚にもならない、不明の出費。

意味無い遠回りにガソリン費用もスリップ、

金払いに悪態つき誰のためにもならない余計な時間、

これも税金のヘソクリ補充なのだろうが、払うべきは私ではない。

不定期出費3万5万という、強制徴収、弱者から巻き上げる、カツアゲ罰金。

ひよっとしたら、

多額のローン借金よりも、

ネズミ取りに払う金額のほうが、頭にくる。

急に出てきて、

『お前の金をよこせ』 誰だお前、クズか、頭にくるだろ。

そうだ。

ノ口ま車の他に邪魔がいるとしたら、もうひと種類、

警察だ。

○ 遠距離車通勤ネズミ取り

スピード超過取り締まり。定置式速度取締。ネズミ取り。

誰がネズミか、税金給料共め。

人が快適に車をトバしていると、急に車道に出てくる国家権力。

邪魔と車で轢きトバすと、警察が目撃証言の、目の前での犯罪容疑者。

鬱陶しくて仕方がない。

私は仕事の現場に素早く辿り着くために、周りのノ口い車を、事故リスクを避けながら、追い越し、追い越し、トバしているのだ。

社会に、世間に貢献する、仕事の、

仕事で稼いだお金の一部は、警察の給料になっているのに、なぜにさらに罰金ウンナンなどと言って取られているのか？

まして警察の給料なんて、私の2倍3倍は裕にあるのだろう。

お前らは、「マイナスの給料明細」を見たことがあるのか？

私はいらぬローン借金もあつてストレスもあつて、その上安くなった給料のストレスもあり、

鬱憤しかないんだ。

イライラしているんだ。

せめて車くらいトバさせろ。

つゆ知らず、警察は止めにくる。

罰金だか知らないが金を巻き上げたいならネズミでなく、金持つてる悪党から巻き上げる。その辺の社長が、ああいう美形の詐欺屋をばら撒いて、

ズルい商売して蓄えてるんだろが。

警察が捕まえるべきは弱いネズミではなく、悪党。簡単な実績だけしてドヤと甘えるな。

税金もそうだけど、

なんで自分よりも金を持っている奴に、金を渡さないといけないんだ。

逆だろ。

苦労人の私のために、金をよこせ。

苦労人の私のために、道を開ける、邪魔だ。

○ ハイスピード事故

その日も朝が早かった。

早朝5時くらいに起床して、朝食もそこにM Y車に乗り込む。

起床とは、

布団を出てからM Y車が動き出すまで、5分となかっただろう。

そんな毎日だ。

早朝は比較的、道路もすいている。

信号も点滅、素通りOK。

私はこの時間帯だけとは、鬱憤を晴らすようにトバしていた。

田舎の割と細い道、片側一車線、

車幅とほぼ同じ幅かと体感する細い道、家屋だ建屋だの玄関面は、ガードレール代わりだ。道の脇までせり出している。

約70 kmから80 kmほどだろうか。

信号。黄色。

ギリギリ信号遵守の私と、

交差点、

ギリギリ信号無視の、左角からの進入車、

進入車も結構なスピードでトバしているのがわかる。

正面衝突。

死んだ。

並行世界があるとしたら、ここで死んでいた私もいただろう。

ブレーキ。

．．．．間に合っている。

赤になっている私の車線、交差点の一応手前で、運転席に座り呆然としている私。

右角には、事故になっていてもおかしくなかったと、やや離れ俯瞰から眺めていたトラックがいた。

快適にトバせていたのに止まってしまった残念さと、事故がなかった安堵が混じった、ため息が出た。

○ 警察を轢き殺す

その日は片側一車線ではあるものの、比較的広い道路幅、高速道路とはいわずとも、体感的にも、快適にトバせる。

夜7時頃だった。

90kmくらいだっただろうか。

急だった。

道に飛び出してくるネズミ取り。

夜道にチカチカと蛍光ランプ、小さく赤く黄色く点滅している。

近かった。

キーギーギーパーパー……タイヤがロックしているキーキーキー音がする、ブレーキ効かない、

止まらない、ヒク？、轢く？、轢いちャウ？、止まらない、止マレナイ、

クラクション、私の声も、

片乙『ジャマあアあ』

轢く。

人を轢き殺すスピード。スローモーションの中、
びびってヒキ高い声で、「邪魔」とか「よけて」とか、

結局そのときはブレーキが間に合わず、

私のMY車はタイヤロックギギー、いかほどか減速はあったかも？、通り過ぎた。

ネズミ取りを轢きトバす衝撃もなく、夜風とともに通り過ぎたから、
ネズミはネズミらしく身を避けたらしい。

傑作だった。

それなりに間一髪だったタイミングだろう。

あの飛び出してきた警察も、危険な音の予兆もあって、間一髪で避けて、腰抜き、
ガタガタ小便漏れている姿を想像すると、可笑しかった。

我が物顔で急に道に飛び出してくる国家権力に、
少しの仕返しはできた瞬間だった。

○ 事故

ツイには、とうとう、追突。

信号が青になった流れでの、周りの車も順に前に行こうかあとの流れの、クリープ追突。

板金が、クグツシヤリ、と曲がる、

イヤゝゝな効果音と共に、目の前にリアガラスがあった。

凹みはしたが大破ではない。

警察の介入もあって、事後処理は済んだ。

野良カーチェイスも度々、危険を感じるほどやってきた。

警察を轢きトバすわけにも、一応、よくはないし、

仕事場と家の日々、長距離往復にも、いつまで続くのだろうと疲れてきた頃、

MY車、教育商材、アクセサリーの借金ローンも、払い終えた。

辞めることを伝えた。

解放感は、逝くほどだった。

事あるごとに思い出す、インシデント。
エピソード　―車と運転と道路警備―

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『車を降りるようです』

黒社 『あのポーコは轢かれなかったな』

配下 『エラはさっさと負けちゃいました』

黒社 『ヨワ、ハハハ』

黒社 『まええわ、次は』

配下 『ああこれは面白いかもしれません』

配下 『ペインです』

作者は電話が嫌いだ。

話をさえぎり、

『ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ、ピリピリピリピリ、ジジジジジジジ、ジリジリジリジリ』
この小説を書いているときにも、

『ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ、ピリピリピリピリ、ジジジジジジジ、ジリジリジリジリ』
人の気もうかがわず、

『ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ、ピリピリピリピリ、ジジジジジジジ、ジリジリジリジリ』
集中が途切れる。

電話が鳴れば受話器の向こうの誰かの、相手をしなくてはいけない感覚。

電話はアドリブだ。

TV番組で例えると、生放送。

それも相手の都合で急に始まる、生放送。

メールは収録番組。

T A K E 2、T A K E 3 になったとしても、文章を考えながら言葉を並べられる。放送タイミング、送信タイミングも考えられる。

作者のような口の回らない者は、どれだけ電話で話したところで、有益にはならない。相手にピクヒャラ望まれるまま口上回しされて、「ああ」「はあ」
いつの間にか鵜呑みになってしまうだけの、電話会話。

電話に良い思い出が無いことも、嫌いを助長している。

詐欺屋の電話しかり。

遠足警備の仕事電話しかり。

中学の部活電話しかり。

なにかを脅迫される電話しかり。

水を飲まず走り続ける部活が「なんか違う」と思った当時、部活に行かず逃げて、コンビニや公衆トイレに隠れていたら、

家の電話に「部活に出てこい」と脅迫電話があった思い出もしかり。

苛めることは快感とも似る。

逆に、苛めらると、とても不快。なので、やめて。

エラ張りもそうだったし、

警察の罰金と巻き上げる金も、

自分に逆らえない弱者から金を巻き上げている行為としては、苛めと同じ。

苛めることは快感であり、ストレス解消にもなる。

人間誰しも、ストレスは抱えている。

個人の中でストレスと付き合い、ストレスが重くとも折り合いを付けて、生活している。
ストレスとは重く、個人が己一人のストレス量を抱えるだけで、十分、重い。

苛めたところで、ストレスは消えない。

苛めっ子のストレス量は、一時的に、多少は、軽くなるかもしれない。

ストレスの行き先は？

苛められた者が、苛めっ子のストレスを、代替わりに持つていたとしたら。

本来、己が1人のストレス量だけで、十分重いのだ。

それに他人のストレスの重さまで加わると、どうなる？、どれほどの重さとなる？

1人苛めっ子がいれば、苛められる者の量は倍だ、重さも倍だ。

2倍のストレス量だ。ストレスの重さも2倍だ。

苛めっ子がさらに増えれば、ストレスの重さも量も、さらに増える。

苛められる者は、産まれつき、決まっているような気配がある。

苛めっ子は、誰になるか、生きて年数が進むまで、わからないかもしれない。

自分1人のストレス量さえ抱えられない、弱い弱い苛めっ子よ。

弱い弱い、苛めっ子よ。

お前にこの重さが抱えられるか？

○ 職業紹介所

クジ引きから引いた工場というキーワード。

クジ引きとはいえ、最初の社会人デビューとしての就活、最初に見聞きする概念として、

工場というキーワードも残る。

工場というキーワードだけは、耳馴染みとなっていた。

人間には、馴染みのあるところ、慣れているところに、つい流れていく気来もある。

どんな仕事を求めるか？

まずは、もう車には乗りたくなかった。

遠足警備で、もう懲り懲り。

必要なときだけ、MY車の力を借りることにしよう。

車に乗って現地へ行くとか、誰かの運転手になるとか、車には、もう乗れない。

給料の高額低額は、ローン借金も身軽となった今、この際関係ない。

単に、何もしなくていい仕事。

朝8時から午後5時まで時間を、時計を回せればそれでいい。

そして睡眠のため、ゲームのため、家から近い立地。

下手に高額な給料の仕事は、門前払いだった営業屋をはじめ、やる仕事内容の大変さもついてくるといふ価値観があったから、反面、

それなりに低額給料のほうが、カンタンに流せる程度で済む仕事、という価値観もあった。

職業紹介所に赴く片乙。

そういえば職業紹介所の存在を知ったのも、このタイミングだ。

職業紹介所にて、「平日」といふ看板名を掲げた工場の募集が目に残る。

「平日工場」といえば、小学中学の通学路にもあった建物で、見なくても目に入る、あの普通の中規模工場のことだろう。

工場というキーワードも馴染みだし、建物自体も馴染みの場所にある仕事先。

10万円ほどの給料、初期工場より少ないな。

だけでももうローン借金はないし、

またマイナス給料にもならないだろう。

家からも近い、出退勤の時間も合わせて14時間とかにも、もうならないだろう。

条件も良いのではないか？

四辺ノ町。この地域内には、極めて近い土地面積内に、

「平日株式会社」と、「平日製造所」があった。

どちらも工場という意味では、同じ。工場という仕事内容の言葉だけは、同じだ。そしてどちらも「平日」だ。

紛らわしくも、私の目に留まっていたのは、平日製造所だった。

だがこの当時は、株式会社と製造所の見分けがつかない私だ。

平日製造所は、平日株式会社とは、まったくの別物。

間違えた？

と思ったのは面接当日。

どうも紹介用紙の地図にズレがある？

地図は、いつも歩いていた、かつての小学中学通学路を指しはしなかった。

○ ハリボテのようなボロい玄関

目の前の建物、

思っていた建物とは、別の建物の手前に来た私、

あの平日工場とは別の、あきらかに平日工場よりもボロい建物の、平日工場があった。

紹介手続きの通り、面接に来た私。

この平日工場の相手方にも、面接の約束はしてある。

会いもせず、

「じゃあ無しで」とはできなかった。

そのまま、思っていたのと違う平日工場、知らないボロい平日工場へと加入。

私は翌日から、平日工場で働くことになった。

ボロいほうの平日。

家から近いけど、知らなかった建物。平日製造所。

例えば都心市街で事務職、他、毎日何もすることがない。

毎日何もしない仕事。

該当する人が1人もいないわけではない。

そこまでじゃなくても、仕事場でパソコンをいじるだけの、8時間。

動画やらネットニュースやらを漁るだけの、8時間。

中古本屋で仕事の身なり、スーツのまま立ち読みしてるサボリヤーも見かける。

銭湯も外回りの隠れ家か？

そういえば、事務職モノとか医療モノっぽいTVドラマは、度々放映されている。

例えば田舎の工場職、法が届かない町工場、毎日過酷すぎる仕事。

どれだけ過酷か、知っているかい？

どのような過酷さか、知っているかい？

TVドラマでもこのテーマは拳がってこない。知らないからだろう？

工場内で繰り広げられる中身の劇が、どのようなものか、見当もつかないからだろう？

脚本も見当すらなければ、文字ひとつ書けない。

さて、一般人の方々、以上、

上流階級方々、エリート方々、人間を扱う人間の上に位置している方々、の皆々様方々。
体験してみようか、低層の仕事を。

する必要すらなかったとしても、そう遠慮するほどでもあるまい。

心配することはない。

低層のやるような、誰でもできる、カンタンで、ラクな仕事だ。

なんの責任もない。

周りの低層同類がなにか言ってきたとて、聞き流せばいい。

歯牙にもかけず、いつものように軽く聞き流せばいい。

小説という二次創作。

疑似でもいいから体験させてあげよう。

カ・ン・タ・ン・な、内容だ。本を読むほどの疑似体験くらいだ。

○ 平日製造所

どこであれ、工場は暑い。

天井の鉄板トタンが炎天下に炙られ、側面の鉄板トタンも余熱で炙られ、木造の日焼けし色褪せた板の隙間には、化石かと埃もビッシリ。

風通しも皆無だ。酸素には灰素、埃素も空間に混ざっている。

そのため空気から汚い。

工場の内部は、人の肉やら脂肪やらにも、じっくり火が通るほどの暑さになっている。工場蒸し焼き。

まして平日製造所、

こんなボロクソ狭いところは、更に暑さの熱さの汚さの通りがよくなる。

平日製造所は、いわゆる町工場の形態をしている。

家族一家で経営を回している、錆びたトタンとススを塗った木造の建屋、体育館を一つ二つ並べた面積がズン胴2階分、所狭しと資材が積まれている。

整理整頓などという言葉はもとより無いと言わんばかりに、当然乱雑だ。

ハッキリ言うと、

私はすでに人間達がしている仕事というものに、良い印象などなかった。

詐欺屋のエサになり、金のないところから更に金を巻き上げられるのが、私の遭ってきた仕事。

仕事という文化自体と断絶できればとも、思っていたかもしれない。

適当にサホド程度の仕事を片手間で十分こなして、

午前8時から午後5時まで適当につぶして、月に10万円ほどの給料がもらえるの？

ロクに価値も無さそうな、これで会社の一つなのか？、勝手に倒産するならそれもよし。別に仕事の選別吟味もする気もせず、どこでもよかった。

ともあれ平日製造所に加入した私。

だがここは、仕事内容こそサホド程度であるものの、適当とは、いかなかった。

これも知らなかった形態。

製造所の形態、町工場の形態に、生きた汚れが在ったためだ。

○ 脳梗塞

脳の血管が詰まり、血が流れなくなるために、脳の神経細胞が死亡する病。その症状は、呂律が回らない、手足や表情筋などの部分的な麻痺。

脳梗塞は、平日一家の祖父、

脳梗塞は、こんなナリで、平日製造所の社長らしい。

脳梗塞 『チヂヨレレモケバジモジモモ』

脳梗塞 『マジャボベエゴボボ□□□』

脳梗塞 『パジャレモケバジベエエ』

もうなにを言っているのか、聞き取ろうとしたくない。

顔の表情筋あたりも麻痺しているせいか、□回りに黄ばんだ涎がハベっていても、お構いなしだ。

不潔で汚くてたまらない。

不愉快だ。

頭や手足などの形態は人間のそれだが、どうにも人間のようには見えなくなってくる。

禍々しい。まるでゾンビだ。

そりゃ家族であっても、持て余す。戸籍は家族の一員だけど、捨てたいゾンビ。脑梗塞キマった涎ジジイの介護など、面倒臭くてたまらない。

だいたい私は工場内の仕事をしに来ているはずだ。

なのに今やっているのは、脑梗塞ジジイの介護そのものだ。

そう、平日製造所とは、脑梗塞家族一家で操業している、町工場。

脑梗塞家族一家こそが、ここ平日製造所の「輪」であり、もちろん家族優先の最優先もある。工場のメイン製品は、脑梗塞の倅が担当している。

大事なメイン製品だ。脑梗塞の涎がついてはたまらない、脑梗塞は携われない。

家族は一家でなくとも、親族親戚などの縁人も工場員として加わっている。

最優先の優先順は、もちろん他人の私が最後、脑梗塞ジジイの担当となる。

こんなゾンビジジイ、介護したところでなんになる。

意識の無い寝たきり老人であれば、死ぬまで放置、いざ知らずで済む。

自分の意思で仕事の真似事、歩き徘徊は出来てしまうのが、余計に始末悪い。

○ 脳梗塞ゾンビジジ

平日製造所、本来の仕事内容として、

多くは切りっ放しの角木材を扱う。細刺などで怪我しないよう、軍手をして作業する。
作業Ⅱ軍手。当たり前も当たり前だ。

脳梗塞『チャララアア、デッブツグウロズルルナナ、シプゴブゼベレレ』

脳梗塞ジジイは軍手をするなと言う。

私は怪我をしたくない。

無視して、会社の社長の言うことを聞かず、私は軍手をする。

脳梗塞『チャララアア、デッブツグウロズルルルナナ、シプゴブゼベレレ』

脳梗塞ジジイは軍手をするなと言う。

私は怪我をしたくない。

無視して、会社の社長の言うことを聞かず、私は軍手をする。

脳梗塞 『チャララアア、デッブッグウロスズルナナ、シプゴブゼベレレ』

毎日のように、ウツゼエエやり取りがあった。

鬱陶しい脳梗塞涎ゾンビジジイだ。ゾンビが人間としてなんで生きてるんだ？

腐れ涎ゾンビめ、ホーリーフレアで消し飛ばしたい。

痛っ、

この脳梗塞ジジイ、

人が背を向け気付いていない隙に、細くなった腕の骨を頭の上にぶつけてきやがった。
何か言いたい事があるらしい。

脳梗塞 『ドボオゴジツドンソンド、ダンゲエズノボボボ』

脳梗塞 『オバエエタケエエダケゲエエモモ』

私に払う10万円ほどの給料が、私のやってみせる仕事と見合わず、雇い賃が高価らしい。
クソボロ町工場ごときが、何言ってるんだ。

もう人の声というより、不快なゾンビが、汚い涎吹いてるだけ。

本人自身が今なにを言っているのか、なにをしているのか、理解出来ているのか？

脳梗塞ジジイ直結の家族の皆様は、隠れず私を監視しながら、見て見ぬふりだ。姑息。老獪。

異常な「輪」が正常となっている一家。

本当に気持ち悪い一家だ。

この「輪」の中では、

工場に勤めているからといって、必ずしも工場の作業員になるとは限らない。

工場の中で工場の給料で、工場の内容ではない仕事をすることもある。

そんな役目が曖昧な職場も、度々発生する。

しまいには、脳梗塞の介護が工場の仕事になるらしい。

介護の給料って、ボロクソ平日製造所の給料よりも高いんじゃないか？

工場の仕事のつもりで来てみれば、

やっているのは脳梗塞ジジイの介護。そんなバカな。

2倍3倍の介護費用を払え、

私がやってるのは介護、絶対工場としての仕事内容じゃないし、

もはや仕事の話でもない。

ただの苛めだ。

倅の嫁『辞めたほうがいい』

監視をしていて目に余ったのか、只飽きたのか、脳梗塞の倅の嫁が、伝えてきた。

辞めるのは当たり前だが、ただ辞める訳にはいかない。

辞める前に、仕返しをしてからだ。

仕返しの方法として、一番効く方法を探っていた最中、倅の嫁の一言だった。

テメエの家族の脳梗塞を他人に塗りつけ、私を引きずり回しておいて、

コワれた頃を見計らい、他人が判断した自己都合辞職として、格安そのまま辞めさせる？
都合のいい話ではないか。

毎日毎日毎日毎日、

脳梗塞ジジイ介護、脳梗塞ジジイの相手役、涎れ、汚い、汚ったない呂律、

ゾンビ、ジジイ、老害、

本来の工場仕事はどこいった？

殺意もあるう。

やっぱり、燃やすか。

○ 火葬

この平日製造所、工場内は9割が木材、可燃物だ。名前も平日と紛らわしいだけのクソボロめ。

そうだ、

私にどこか続いている不運の発生源は、ここじゃないか？

四辺ノ町域内、私の実家の近くに、こんなに禍々しい「膿」のような建物があったのか。私の不運の元凶こそ、このクソボロ平日製造所から発する「膿」に違いない。この「膿」が、私の不運になっている。

燃やせ燃やせ、こんなモン。

禍々しいゾンビを祀る元凶め。

軽くオイルドレッシングを振り掛けてマッチ棒でもあれば、またたく全焼だろう。建物周りは道が細く消防も近づくにくい、さらにマキビシでもあれば万全だ。

良い考えだな。

この御家族様へ手向ける仕事の貢献として、これ以上はあるまい。
脳梗塞ジジイ、ゾンビのようなジジイを火葬する代わりにもなる。
葬式も省略できる。

四辺ノ町に必要な「膿」も消せる。
実に合理的じゃないか。

御家族一家仲良く燃やすことで、
いつまでも御家族内で、
脳梗塞ジジイ様々を、
社長様と祀りあげ、大事に大事に、
親族一同、手厚く、御介護してやるといい。

消し炭になってからな。

○ 殺意の一手

その日も呂律が回らないゾンビ。涎を口籠った拍子に、ベトベトの涎が私に向かって吹き出した。

刹那、

シワシワ雑巾のような首を絞めくびる、私の意思のない片手が飛び出す。

その手は、首に触れもせず、届かなかった。

咄嗟に命の危機を感じた脳梗塞ジジイは、

後ろに仰け反った拍子、仰向けで転び角材のカド辺りに後頭部を掠るようにぶつけた。

仰向けで倒れては介護ジジイらしいポーズ、両手両足を半開きにジタバタしている。

呆然。

我に帰ってハッとする。

当たりどころがズレていたら、意図はなくとも殺人犯になるところだった。

が、だとしてもこの脳梗塞ジジイの態度には、

如何ともし難い、面倒な怒りがあつたことも、

事実。

まったくの他人を依代として、脳梗塞ジジイを処分できる、この家族にとって、最も都合のいい結末になるところだった。

突如、

視界の外から飛び込んできて、安全靴の硬い外底が鳩尾に食い込む蹴り。しばらく呼吸が止まる内臓へのダメージ。

脳梗塞ジジイの倅だった。

こいつも異常者だな。

倅は、脳梗塞から直結倅の家族。つまりゾンビウィルスと、日夜常に居る。

事実上、倅が平日製造所の若大将ではあるものの、

どこか普通ではない、

狂いが正常になっている、異常を感じれる奴だった。

状況を問題視した脳梗塞の倅は、どこかに連絡している。

警察か？ とは思ったが、

倅『明日からは来なくていい』

工場内からも、即追い出される。

仕返しは出来なかったけど、まあ、脑梗塞ジジイの介護も、これでおさらばだ。

帰り道、暑さはらおうと、図書館の冷房を抱き抱える。

帰り道、ベンチに座り込み、動けなかった。

私は、私が思っていた以上に、疲れていた。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード　― 脑梗塞の工場 ―

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『死なねえゾンビとか』

配下 『何もできず辞めてったオモロ』

配下 『片乙が辞めました』

黒社 『ふーん』

配下 『行き先は、あまり変わらないですね』

自分だけが悲惨だと思ふなよ。

いや、私だけだ。

こんな惨状、私しかない。そして私こそ、最下層の頂点。

誰よりも苦勞がガチ多い最下層の者こそ、世界の真理を知っている。

勘が良い。勘が悪い。これは個々人により、ステータスが異なる。

勘の良い奴に合わせると、勘の悪い奴はついてこれない。

最下層の者はもれなく、勘が備わっていない。

勘とは生まれつき有無が分かれているもので、

生後本人の努力や苦勞だけで、勘の、後から貼り付け付与、はできない。

最下層を基準にしよう。

勘の悪い奴、最下層の者を基準にすることで、誰一人、差別も、格差もない世界となる。

落ちこぼれが、誰一人いない、平等な世界となる。

一番下の落ちこぼれが基準になるから、誰一人とて、落ちこぼれがない、

美しく、クリーンで、平等な、世界となる。

いわば、底上げの世界基準。

現状、底上げができているのは弁当の皿だけだ。

よりによって、勘の良い奴、苦勞を知らん奴、こそが現状の世界基準を構成している。

現状では、底の最下層を押し上げる世界観は、養えない。

現状では、勘の悪い奴はさらに悪く、苦勞を塗り重ねる重々苦勞、

脱する経路は、針穴に億万人の狭き門。実質不可能。無理ゲーかよ。

やがて最下層へ堕ちるコースがコテコテのガチガチ、墮落コースができてしまっている。

世界の真理を、

世界を歪めさせている元凶とは、最下層の者こそ、知っている。

セルフレジが増えてきた。

「誰がレジ役などするか」

を正さに現している。珍しくナイス社会。良い変化だと思う。

不規則なレジ入り客、レジ前でごねるオバン、人数単位で割り勘の学生グループ、忙しいタイミングを狙ったような着信電話、タッチパネルやセルフレジが使えない老害、面倒な客を挙げればキリがない。

ただでさえ他人のタイミングに合わせるのは面倒なものだ、さらに迷惑も加わる。

毎日毎日狭い面積内に長時間立たされて、

他人のタイミングで、銭の交換だけ。

そりや大変さ。

毎日毎日レジ前で、面倒客の相手をしていれば、そりや精神も病むさ。



真



○ 私の実家 私の自室 兼 ゲーム部屋

友達だ。

学生の頃、高校からの同級生に数人、頻度多めにツレる連中、
敢えて、わかりやすい言葉でいうと、友達がいた。その中の一人。

いつかのクジ引き就活のときも、隣にいて、一緒にクジ引きした友達だ。

中太り、とぼけた宇宙人、どこかネチツとしている、みたいな人物だ。

他にも役だけは友達に該当するような同級生もいたけど、多くは卒業と同時期くらいで散り
散りになった。

同じ年代で、同じ高校出身、同じように就活して、同じように学生を卒業して、
同じように社会人として、同じように工場に勤め始めた。

ゲームだ。

初期工場の仕事を繰り返す日々が日常と思い始め、
詐欺屋にローン借金を負わされる少し前日譚頃、

そんなある日、高校卒業から一年経たないくらいだろうか？

友達が家を訪ねてきた。

学校の同級生は散り散りになった中の友達候補として、私を訪ねてきたようだ。

自然と私と友達は、2人でゲームをして遊ぶようになった。

週に一度、土曜日に決まって私の家に集まり、2人で午前から夜までゲームをしていた。

仕事だ。

お互い、仕事の話も合間につぶやく。

聞くと、私のような経験はしていないらしい。

仕事でも周りから、なんとなく程度だとしても頼りにされ、

上司先輩達々から見守られているかのような仕事の逸話を、度々聞くことになっていた。

私を見てきた日常、妙な面倒さ、オバン、ローン借金、邪魔なノ口ま渋滞、エラ張り、

脑梗塞ジジイ、などとはまるで違う日常のようだ。

クジ引き就活までは、同じ条件だったはずだ。

なぜこつも違うのか？

なぜこつも差があるのか？

ゲームだ。

友達は週毎に変わる変わるゲームを持ってきた。

私もゲームは好きだから、最初こそ何も感じず単に、次々変わる新しいゲームをしていた。何も感じなかったところに、何かを感じたとき、感覚は徐々に変わっていった。ある種の、強迫観念？、とも違うか？

「週に一度、私の土曜日の大半の時間はいつしか、友達のゲームのためのNPCとして支配されていた？」

いやいやいやいや、今はゲームをしている。友達と。

友達と過ごす楽しい休日の一場面。のほろほろが、

口を開けば、

友達『くだらね』

友達『つまんね』

友達『いらね』

友達『ぶう』『ぶう』『ぶう』

友達『だる』

口癖にしては、もうそれしか言わないほど、小言系悪口しか言わない。

冷酷な短い言葉以上に、不思議な感覚に陥った。

友達と一緒にゲームしていて、本来であれば楽しい遊びの一幕のはずだ。
なんだろう？ この気怠さは。

ゲームだ。

友達は、ゲームにおいても運があると感じた。

確率1%とかのレアアイテムも、ろくに繰り返さず苦もなく入手する場面を、
何度も見ていた。

私が100周回繰り返しても入手できないレアアイテムを、

友達はものの2、3周回くらいで入手している場面が何度もあった。
いわゆる、確率以上の、運があった。

仕事だ。

仕事においても、この不思議な差は、当て嵌めることができた。

私が仕事でアレヤコレヤと気が狂おうかとしているなか、
友達はとくに何もなかったと言っている。

私がつぶやく仕事の状況場面を話しても、友達は何んのことかわからない顔をしている。それだけ職場環境にも差があることを、浮き彫りにしている。

私は、日々苦悩苦痛苦勞。

友達は、日々順風満帆。

不思議な、この差。思う。

科学的根拠はない。

摩訶不思議な現象であっても、私は実体験として遭った。

目で見、耳で聞き、肌で感じている。

ただの仮説。

ふと視線を感じた。

グルリと目を見開き、私を見ている。

黒目はリーダーかと小刻みに微細に、私を捉え、毛の揺れひとつ逃すまいと、観察している。

妙な目の圧があることに気付いたところからか、仮説は真に近づく。

ただの仮説にしては、的を得すぎているほどの、キーワードが視えた。私は、まるで、この友達に、運を吸われている、かのようなのだ。

○ 運吸い

このような友達を持っていると、やがて気付く。

運吸い。

このような友達を持っていると、運を吸われている側は、やがて気付く。

この友達は、運吸いだ。

運吸い側としては、自覚ないところがまた厄介だ。

運吸い。

他者の運を吸い、自らの運に換算し、自らの運を常に好運良運と維持している者。先天的才能者。

人間が無意識に呼吸するように、

運吸いも、また無意識に、他者から運を吸っている。

運吸いにとっては、近くににいる者、さらには運バリアの無い者を本能的に嗅ぎ分け、対象から運を吸うこと自体が、

無意識の呼吸と同じくらい、自然なことなのだ。

吸われる側は、当人が持っている運が機能せず、本来訪れるはずの良運幸運が、運が、なくなっていく状態。

としか説明がつかない。

学校卒業からの、この数年。を振り返ると、運吸いとししか説明がつかない。リアルホラー。

この数年。とは、高校を卒業し、就職した段階をスタートでしょうか。

友達は、同じようにクジ引き就活してきて、残業など日々仕事の大変さこそあれ、その分の給料ももらっているらしく、同工場員との雑談や、波長の合う雑談とか、目線の合う雑談も、適度にある様子なども、言っていたことがある。

この友達は仕事そのものの大変さ、こそあれ、理不尽レベルでいうと、そこまで酷くはない。

この友達が隣にいた片乙は？

ここまですぐの通りだ。

運吸いを別の言葉に置き換えると、

サイコパス。

サイコパスの定義を説明できるだろうか？

私は一応この友達と高校から長く付き合っていたこともあり、

当時しばらくは運吸いだとも、サイコパスだとも気付かなかった。

言葉自体知らなかったから、というところもある。

隣の友達が運吸いだと気付いていない状態では、

説明がつかないけど、何かおかしい。妙に違う違和感といえいいだろうか？

私も当時は気付いていないので、心身の状態も重かったかもしれないが、

はつきりとは思いつかない。

○ どうやって縁切るか

脱せないのだ。

友達という枷を、外すことができないのだ。

「もう来るな」簡単な一言で済む。

脱っせないことが、関係を断てないことが、不思議だと思うだろうか？

決まって事前日の金曜夜に、友達からかけてくる長電話の相手をして、して、

一応のアポイント、実質、強制アポイント。をして、して、

毎週土曜日、「ゲームの会」をして、して、これが友達と5年6年と続いていた。

数年単位で週に一度、

私の家に2人でゲームをするという習慣が、深い木の根のように根付いていたのだ。

太く、続いていた、習慣。

急に変わると警戒される。

友達は運吸いだと気付いたところで、脱せない状態にある。

「くるな」仮に断ったとて、

「なんで」と食い下がられると、私はもう次の言葉が出てこなくなる。

「ああ、いや、なんでもない」別の話にすり替わっていくだろう。

無駄なやり取りが視えそうだ。

それに私の家も、友達の庭かと同然に知られている。押しかけられると、余計面倒になる。そして実際、ストーカー気質もある。ネチっこい。

中太りオタク、スポーツ気質のないチビデブのわりに、なぜか動体視力は上々だ。鬱陶しいほど、異様に反応が速い。

もし断り文句が成立しても、次のターンで、押しかけてきそうな雰囲気だ。

○ 運吸い 時食い

毎週土曜日、昼12時くらいから、夜9時くらいまでとしようか。

実際そのくらいの時間分だった。

週に1日、私は友達のために、週に1日を、失っている。

この時間が、とても、もったいなく思えてきた。

もしかしたら、

毎週休日土曜日を使って、何かの技術や学びが得られた時間だったかもしれない。

わずかな可能性も、運吸いによって閉じられている。
運を吸われているだけでなく、時間をも吸われている。

今思えば、いわゆる風俗業。

「遊んでやる料金」を請求できるレベルだったかと思う。

○ 2人の強弱差

強弱差、それだけの要因ではないだろうが、

強い弱いのは、見えている世界も違ってくる。

本人の求める願望や欲、快樂もまた、差だったり、別物になってくる。

だんだん馬鹿にし始めたよね。

友達は運だけの環境、

なのに、それとは逆。悶々と悩んでいる私が、ムセ返る弱さに見えたのだろう。

友達本人は己が恵まれた運は気にもならず、

逆に虚弱となっていく雰囲気の際の私を、蔑む。

片乙『このゲームのボス、強いんじゃないね、私が、いこうか？』

友達『クズが、相手にすらしてもらえる？』

友達『つまんねーやったぶ、ぷっぶー』

片乙『．．．．．』

冗談とは遠くなるニュアンス。

週に一度、美味しい運の栄養補給をする、快感、

相対的に弱くなっていく私を苛める、快感、

友達本人は無意識だとしても、2つの快感があった。

友達は、この快感を得られる、土曜日のルーティンを続けたい。

私は、とくに憤怒はなかった。

ただ、同じ部屋でゲームして、隣にいるこの者を「友達」というのは、違うと思った。

あるとしたら、理不尽さへの憤怒があった。

そして縁切る方法、断る言葉を探していた。

近くにこんな友達に似た奴がいたら、
避けた方がいい。

避ける方法がないというのは、厄介だ。

○ 友達？

読者にとっての「友達」とは、どういった存在なのだろうか？

一緒に遊ぶ存在？

なんでも話せる存在？

頼りになる存在？

わからないなあ。

私にいたのは、「友達」という言葉を使いたくない友達だった。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード　　―友達―

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『運吸いはいい仕事しましたね』

配下 『キモチ悪いわあの子』

黒社 『いよいよこれからイタづれるぞ』

配下 『アレも強いですからね』

配下 『えっぐいスね〜』

配下 『アハハハ』

波長の合わない人と人。人と場所。

波長がピンとこない人は、馬が合わないと言い換えてもいい。

これはある。それも結構な割合で。

もし不穩に乱れる波長がなんのことかわからないという人は、運が良かったのだろう。そこにいるだけで、波長が良かった状態が続いていたわけだから。

乱波長による、人生の失われるエネルギー。という損失もなかったことになる。

乱波長がわからない？ ずいぶん運がいいね。不自然なほどに。

ひよつとしたら、あなたも？

運が良かった者。

相対的に派生している不運は、「膿」として誰かが請け負っている。

好運のアタリ。

不運のハズレ。

アタリのあなた、ハズレの「膿」と交換してみないか？ どうなるかな？

不運から巡る「膿」は、好運の者にとっては、知らないし、感じない。

逆だったかもしれないんだ。

例えば著名人。貴方の推す芸能人、

彼らは、本人と、もちろん周囲の支えもあつただろうが、本人の偉業と云えるだろうか？
偉業と云われる逸話の裏に、他者をエサとした運吸いの特性もあつたとしたら？
著名人の偉業は、本当に本人の偉業なのだろうか？

名前もあがらない著名人の隣に居たかもしれない人は、
本当にただの凡人で、能力のない人だったのだろうか？

さて、片乙の友達は、運吸いだった。言い換えると、サイコパス。

まあ、嫌な感じの人は全員サイコパスだと言ってしまうと、元も子もないわけだが、
波長の合わない人がサイコパスだとは限らない。

あなたがサイコパスだ。消えろ異常者め。

○ 単に仕事のない日々

どうする？

私には、少し前から、ある、ひとつの案が浮かんでいた。

運吸いの「枷」も、ボロクソ平日製造所から感じる禍々しい「膿」をも、
まとめて突破する、
案だった。

実行に移す時かもしれない。

その案では、私の姿に、私が憧れる。
人生の歩みが、劇的に変わる案だ。

変わらず歩み続けていた。

それはつまり、

変わらず「奈落」の深層へと進み、底へ底へと降り続けることを意味していた。



真



勝ち是有。

負けは無。

勝ち組だけが次へ、勝ち組だけが優越であり成長につながるとしたら、負け組は一向に進めなくなってしまう。

勝負のある比較、試合やゲームがあるのは別話として、いいとして。

負け組にも一定の成果を得られるようにしないと、片方が5連勝したら？、片方が5連敗したら？もつと差が開いたら？

この差を、補填できる？ 補填するにも、どれだけの労力を伴い、時間を失う？

世間そのものが平等など考えていないのであれば、

一度負けさせてやろう。

痛みつてやつを、一度知ったほうがいいな。

能力を育てる環境、教育、学業、授業、
例えば片乙は、あんな授業だった。

勝負以前に、土台となる能力の時点でハンデがある。

ゲームは勝たせてもらおうプレイヤー、負けてあげる相手の敵さんがいる。
勝てたのか？、勝たせてもらったのか？

負け用敵がいないと、
プレイヤーは勝つどころか、何もできないんじゃないか？

社会世間の話に戻り、
全然負けでいいのであれば、みんなダラけて、何もしなくなる？
社会が機能しなくなる？
だろうか？

むしろ余裕が生まれて、犯罪とかも減っていく気がする。

○ 束の間 実家自室にて1人

この四辺ノ町、この地域は、なにかがおかしい。

まるで、私の一挙手一投足に、枷があるみたいに、なんか、すごく、重い。息苦しい。

順に振り返ると、

初期工場で、異様な面倒さを感じたこと。

詐欺屋が、真っ先に私へと話をしにきたこと。

警察が、磁石のようにくっついてきたこと。

ハズレの平日、脑梗塞ジジイの工場に勤めることになったこと。

友達がいつしか運吸いだったこと。

オバン、ノロマ&ネズミ取り、脑梗塞、それに運吸いか、

社会って、こんななん？

事象事象ひとつに、なにかしら「嫌がらせ」があり、上手くないかない。

おかしい。いつまでもグルグルと、

クジ引き就活、算数不能オバン介護、オバンの枷、不意打ち詐欺、エラ張り監視、監視もそう、磁石かと警察、行き先行き先で次々止められたノロま車の数々、

同じ平日名看板の工場、脑梗塞ジジイ介護、運吸い時吸い。

こんなに重なる？

おかしい。いつまでもグルグルと、変だグルグルと、オカシイ。

こんな、こんなに続いている。こんなに、不自然に不適切なことが続くか？

まるで、私の自由が封じられている感覚。

畏れている？ 四辺ノ町が、世間そのものからくる、私への「陰謀」？

私が本当の能力を発揮することを、世間が畏れている？ わからない。

を由来とした、私への、「陰謀」？

とにかく、この地域は、なにかがおかしい。

見えない不遇の真相を「陰謀」として、

「陰謀」が私の「敵」だとすると、私はなにを討てばよいのか？

熟考。

見えない気配、「陰謀」と戦う方法を考えてみた。

他人を殺すと、警察に囲まれる。

「陰謀」というか、不運の元凶、「膿」を感じた脑梗塞工場を燃やして大騒動を起こすと、警察に囲まれる。

うーん。

「陰謀」を消せたとしても、お釣りで私も封じられる。
戦わない、ひとつの自己提案。

この地を離れたほうがいいと思った。

四辺ノ町自体が、ダメなんだ。四辺ノ町自体が、「陰謀」なんだ。

今こそ、あの案を発動する時。

身投げを決意したかのような、思いの強さだった。

○ 転地療法

住み慣れた土地を離れて、まったくの別の環境へ移り休養する、療法のひとつ。
という解決方法もある。

そうだ。四辺ノ町は変だ。移ろう。まとわりつく「陰謀」から、逃げよう。これが結論。良い方法を思いついた。

まったくの別の地域に逃げてしまえば、「陰謀」も追ってこれないだろう。

クジ引き就活のハズレも、脑梗塞ジジイも、運吸いの友達も、振り切って、逃げよう。

車に乗るのも、これが最後だ。

逃げる。彼の地へ。

その地域に行ってしまうば、私を知る人は、私一人。

「陰謀」の発生源が、凝り固まった知人の誰かだとすると、さすがに「陰謀」も発生のしようがない。

目指す彼の地は、陸地続きですらない。

地域由来による発生タイプの「陰謀」だとしても、陸地を途切られると追ってはこれないだろう。

悠悠自適な生活ができるはずだ。

親の居ぬ間のなんとやら。

M Y車に必要な、持っていく生活資材を詰め込み、四辺ノ町を離れる。

行き先は、田舎だけど、ドラマでも有名な、彼の地。

いつか移住できたらと、空想案程度に、憧れていた、彼の地。

そして、

○ 約束

彼の地といっても、何処へ行くのか？

候補があった。冷寒ノ地しかない。

冷寒ノ地とは、かつて高校のイベントで訪れるはずだった、約束の地。

イベントに行く生徒は一人。狭き門ではあるが、そこそこの優等生だった私。

そのまま高校3年生の私が行く事になると思いきや、

ひとつ下の年代に譲る形となり、私はイベントに行けなかった。

私は後輩を立てた、物わかりある先輩。ともいえるが、

「あの子」との約束を果たせなかったことには変わらない。

「約束を守りたかった」、この後悔は、高校生片乙の無念として、尾を引いていた。

8年越し、約束など、とうに関係ない年数が進んだ。7年遅刻の、約束。

憧れの地であり、約束の地でもある、冷寒ノ地。

逃亡先として、自分にも酔える、適地だった。

失われた約束の地への、逃亡。

彼の地。

そこは、海を超えた向こう側。

冷寒ノ地。

○ 逃走のハイウェイ

「陰謀」を置き去りに快適に高速道路をトバしていた。

携帯電話も変えた。余計に水を差す着信も、もうこない。

クジ引き就活のハズレも、脑梗塞ジジイも、運吸いの友達も、

「陰謀」渦巻く呪われた四辺ノ町は置き去りに、高速道路をトバしていた。

風速強めの日だったから、多少M Y車のハンドルはトラれているけど、大丈夫。

あの長距離運転していた日々もあって、身体が覚えている。時速120km。快適だ。
ビューーン

私はこれまでの私とは、別人。

そう自己暗示するために、髪も白光するほどに明るい色に染めながら。

今こそ、1人だけでも、7年遅れで約束を補完する。

不意に、

パトカーのサイレンが聞こえる。

警察『左に寄せて停めてください』

私の、一世一代の、華麗なる、逃走劇の最中だぞ。
空気読めよ警察。

まうた余計な出費があつた。ジガダナイ、これが最後の「陰謀」払いだ。

○ 海路

四辺ノ町、

周囲の四辺の山壁は、トンネルへと貫通した先は、港。
ここから先は、海の向こう。

船舶へ。

海路一路、北へ。

冷寒ノ地へ。

コンプライアンス？

法令を守る社会的倫理観？

ポリコレ？

時代が進むとともに人間の意識も、一応は、進んでいるためか、

一部の層では苦勞を知らない人間も発生している。

二次創作するにも、苦勞話がどのようなものか、想像もできないだろう？

薄っぺらい一部の層が、苦勞話をSNSからネットワークから無理矢理拾ってきて、繋いで切って貼って、脚本のソレにしたところで、ソレはやっぱ薄っぺらい。

一部の層がアニメだゲームだと創ったとて、シナリオも薄っぺらいんだよなあ。一部の層では、圧倒的過ぎる、悲惨過ぎる、大敗北する主人公を、描けない。

一大劇となる、シナリオを描けない。

本人がある程度の苦労を実体験として知ること、
創作できるシナリオは、厚く深くなる。

片乙のように苦労しすぎて壊れても、都合が悪いけどな。

実体験の痛みには程遠いが、仕方ない。

見せてあげよう。

これが苦労だ。

ある程度の差があるのは仕方ないとしても、

格差つてやつは、

100倍以上、1000倍以上、の差になっている。

そりゃ不満もあるぞ。

のう世間様。

100倍1000倍の差があっても、行動は、している。

大成功億万長者であつても、

成果ゼロであつても、

マイナスであつても、

行動は、している。

行動は、している。

行動そのものに一定報酬を与える、そんな成果があってもいい。

「はいじゃあ3円ね」

そんな意地悪じゃなくてさ。金銭社会を暮らすための数字が、全員必要なわけでしょ。

収入、報酬、成果、得られた金があれば、

次の行動のためのモチベーションにもなる。

行動が収入に直結する世界になると、

行動しない運だけ野郎は、収入がない。ざまあみろ。

何か感じないか？、世間様。

怒りに似た何かを覚えないか？、世間様。

その感情が社会への、世間への、恨みだ。

のう世間様。

「A」という月額30万の収入。

「B」という月額10万の収入。

なるほど、「A」の仕事は難しい資格や技術が必要だったり、人間の臓腑を見たくないなどの理由で、実力を伴う専門職や医師が高額なのはいいとして、それら大変さを加味して、高額収入が定められているのだろう。

「B」というと、特別なスキル、身分カードを示し証明はできないかもしれないが、大変さという意味では、「A」と同等か、それ以上になることもある。

「大変さ」という基準の定めがあってもいい。

おおかた、各職の収入基準を定めたのも、職務している者にとって本人都合を良くしただけの、価値膨れだろう。自己犠牲になれとはいわないが、これでは本人だけを尊主にした規定、我儘がすぎる。最初に定めた時点で、周囲の者達のこととは考えられていない。

大変さを全基準にするとオールフラットになってしまいうから、多少の差はあってもいいさ。ありすぎ。差。

大変な思いをしているのは、「A」から「Z」まで、皆同じ。

だいたい皆同じだよ。と思える基盤、前提数字、収入を、皆に届けたい。

政策。

年収500万以上の連中を、収入半分。ハーフカット。

半分回収した財源を、以下民々に等しくバラ撒いてみよう。

民1人1人に、まとまった金額を配布できるぞ。

一発で経済正常化。

さあ、運に恵まれた高収入共よ。

怯え倒してくれ。

世間の一部環境に金額が行き届いていないのであれば、造幣局で紙幣金銭をもつと製造すればいい。

すると、

世間に潤沢に金額が溢れることで、価値単位が下り、インフレーションになるらしい。リング1個1万という、極端な先行き不安もでてくる。

想像不安はともかく、

造幣局で紙幣金銭もつと大量生産して、世間に人々に配布、バラ撒けば、単純に、

世間に、人々に、潤沢に金額が行き届くことになる。

ただし、物価の価格は絶対上げないこと。

流通する金額が2倍になると、物価も2倍になってインフレになるんでしょ。じゃあ上げなきゃいいじゃん。

人様のフトコロに入れる金額だけ上げて、物価上げなければ、それで済む。

会社の利益が欲しいとか、考えるな。

心配せずとも配布され、勝手に金額数字が増えていく。

世間にバラ撒かれた金額を回収しようと躍起になるのは、人間の欲望に由来する。

つまり、

人間が自分の欲望を制御できれば、

世間にどれだけ金額が溢れようと、金額1個の価値はそのまま1個。普遍も不変。インフレにはならない。

だいたいインフレもデフレも、

人間が招いたことで、この名称にしても、人間が勝手に決めて呼称していること。

己が欲望で困り、

己が欲望で右往左往、

ずいぶん滑稽じゃないか。

鬱になってください。

この小説を読んでも、鬱にならないでください。

いや、むしろどうぞ鬱になってください。

この小説によって鬱になったとしても、それは仮想、鬱。
どこまで重症つても、それは仮想鬱。

本物の鬱ではない。

よほどの専門家でも、読解するのは難しいだろう。

それでも鬱の体験くらいはできるだろう。

仮の仮想であつたとしても、鬱の気持ちが少しはわかるだろう。

強い人は、特に。

怖い人も、特に。

鬱を知れ。

弱い人はすでにわかっている。

○ 冷寒ノ地

やがて辿り着いた地は、陸を広く広げる冷寒ノ地。

冬季に白く輝く光景は、白息とともに美しい。

世界の全てを白く染める景色は、社会の乱雑さをリセットと共に静かにする。
静寂の白。

世を赦す、白雪。

冷々とした厳しい寒気が1年の半分ほどを覆う、冷寒ノ地。

その分、人々は助け合って生活していると云う噂を、聞いたことがあった。

縁もゆかりもない地域だ。

この地域まで来れば、誰も私を他人以上に知らない。

失われた約束も、もはや私だけの思い出だろう。

さすがにここまで逃げてきたのだ。

逃げてこられたこと自体に満足している自分もいた。

もう大丈夫。

やっぱり風が冷たいなあ。

でも空気とか凜としていて、爽やかだ。

・・・あるていどの、寂しさがないと言ったら、嘘になる。

それよりも逃げ延びてこられた自由さが大きかった。

本音に同居する、寂しさと自由。

運吸いもない。私の土曜日の時間も、私のもの。

全く別の「輪」にいる。四辺ノ町の「陰謀」は、もう無いはず。

まわりつく「陰謀」も、もう感じない。

この、自由。

さあて、なにをしようか。

することはたくさんあるが、とりあえずはメシの支度か。

食事もそうだし、1日の行動、用事、なんなら呼吸ひとつさえも、

自分のペースでアクションを起こせる、この自由さは、快適だった。

4ゝ5ヶ月であれば、それで構わない。

自由さは相変わらずであったものの、半年を過ぎると、貯金は底が見え始めていた。仕方ない。仕事するか。

○ どこに勤める？ 仕事はあるか？

いわゆる接客業をする気は毛頭なかった。

観光地でもある冷寒ノ地に住んでいる身自分だとしても、接客業だけは、やらない。

そりゃそうさ。

これまで見てきた人間は、

オバン、監視、エラ張り、ノ口ま、ネズミ取り、脑梗塞一家、運吸い、などなど。

散々苛められ苦しめられた人間達を相手に、

こんな人間達を、お客様として、オモテナシ？

「ありがとうございました」？

冗談でも言う気にはなれない。

○ 髪を整えスーツで着飾り面接へ

白光染めしていた髪も地毛へと切り、

職業紹介所を挟んでいくつかの就業求めた先に行ったものの、多くは断られた。

履歴書には、

引越してきた余所者と正直に書かれているから、

警戒されている部分もあったのかもしれない。

唯一、接客業らしい、いかにも接客業。

の通り道を言ってもらえたことはあったが、

先述の通り接客業は絶対にやりたくなかった。

○ 鳶塗装屋

結局仕事として加入できた先は、塗装屋。

鳶塗装屋。普通の民家に足場資材、工具、事務所も詰め兼ねている。

いわゆる鳶職だった。

太めの体格ある棟梁と、もう1人、2人で操業している鳶兼ペンキ塗装屋だった。

私は3人目として加入することになった。

すぐに私の体力量では保たない作業だとわかったものの、他に仕事のアテもなかったため、しばらくは鳶塗装屋として様子を見ようと思った。

私の体力と作業内容のバランスが、合っていないのに無理しているため、どうしても歪みの隙間、偏りが発生する作業がある。

本来は余所者ということもあってか、応対が疑われることもあった。

棟梁『オメエ、誰か殺して逃げてきたのかあ』

疑われる。

そんなわけではない。

棟梁は事情を知るはずもないが、むしろ殺されたとしたら、私のほうだ。

ギクシャクとした疑惑は、思い込みへと変換、

棟梁の想定以下の動きしかできない私も、足手纏いなだけ、余所者のポツと出感が残る。それ以降、私の印象像として、植え付けられることになった。

○ 棟梁と筋肉

棟梁『じょうしきききい』

私は鳶塗装屋、なにぶん初めての仕事タイプだったから、勝手を知らないことも多い。

棟梁に言わせれば、知っていて当たり前のこと多々あるようで、

ねっとり、とした、

「常識」、「じょうしき」、という言い方で揶揄されることも度々ある。

さらに酷かったのは、2人目の筋肉。

筋肉は元チンピラ、元ヤンキー、ハッキリとわかる風貌。

身長も180cm以上ほどもありそうだ。

冷寒ノ地が観光地だからといって、ドラマロケ地だからといって、

住民のみんなが皆んな、素朴で穏やかな人達、というわけではないらしい。

観光地だとしても、田舎は田舎。

いわゆる田舎系ヤンキーが、治安の裏に、たむろしている。

チンピラヤンキー界限では、

筋肉はかなり最強格の人物であり、問題児としても有名だったようだ。

いわれてみれば、目もイッている。ヤンキー界限ならではの、独特の目をしている。

身長は高く、一見痩せ型だが、

産まれつきの素質もあるためか、練り上げられた筋肉を備えている。

フィジカルに恵まれている。

そして性格は、凶悪、暴力。

ヤンキーチンピラ界限の、あの刺々しい態度よ、なんとかなんのか？

私と筋肉の2人だけで、鳶作業を進める日も多くあった。

ローキック。

棟梁はどこかに遊びに行っている。

ローキック。

私の動作ひとつひとつが、筋肉にとっては齒痒くて仕方がないらしい。

ローキック。

そうは言われても、私は本当にできる精一杯だった。

ローキック。

筋肉がそれだけ幅広い鳶作業が出来ているのは、

恵まれた180cmを超える身長や、備わったフィジカルがあつてこそ。

160cm前後の私に筋肉と同じ鳶作業、動きすら同じにしると要求されても、

まさに土台から無理な話だった。

仕事スタイル上、隣に並びあつて同じ向きで、長めの時間、体力仕事となることも多い。

筋肉の気分で放たれる無造作な横パンチは、

ちようど私の顚顚に、凸ったMP関節骨が私の顚顚にあたる。

痛い。トラウマも残る、痛い。だ。

ローキック。

筋肉『オレは仕事デキるから、オメエのようなちんちくりんボコボコにしてもいいんだ』

筋肉『この遊びはよ、デキるやつの特権なのよ』

筋肉『オメエには一生無理だなあああああああ』

グーパンチ。

筋肉『警察に言ってもいいゼナアンにもならネけど』

筋肉『ポーコもオレらとグルだからなあアハハハ』

筋肉『ええい弱い死ねや』

ローキック。

暴力とはデキる奴の特権？　どんな理屈だ。

こいつも何かの格闘技、あるいは例の漫画に影響を受けている口だなと察した。事ある毎にローキック。ときには解説も交えてローキック。

痛いからやめてほしい、

が、圧倒的フィジカルの差もあり、

体だ力だで反撃したとて、重傷を負うのは私。沸く憤怒を意識で、留めておく、一言の訴えひとつも反論と思われ、エスカレートされては更に叶わず、逆らえない。

甘んじて「へへへ」と騙し笑い、

2、3発のローキックを受けるだけのほうが、実害は少ないと判断した。

棟梁『片乙う、命の危機を、感じねえかあ』

棟梁にとっても片乙を招いたのは失敗雇い、後腐れなく除名したいところもある。

棟梁も筋肉には、遠慮気味の怯え、あまり現場には出てこない。

そのため現場にいるのは、私と筋肉の2人だけ。という日も割合多かった。

筋肉『ええ死んでくださいお願いしますう』

筋肉『オレ様がだよおお、ザコ虫のテメエにい』

筋肉『頭を下げてお願いしてるんだからああハヨ死ねやあ、ああ死ね死ね死ね』

筋肉『ハヨ死ねハヨ死ねハヨ死ねハヨ死ねハヨ死ね』

○ なぜ変わらないのか？

私はかつての四辺ノ町から、冷寒ノ地へと逃げてきた。

さすがに「陰謀」は追ってこれないだろう。と思つてのことだった。

まして私を知る人は誰一人とていない、私の印象自体、リセットされているはずだ。

それなのに、仕事した途端、

こつも最初から苛められ、

これでは「陰謀」を受け、悲惨に苛められていた四辺ノ町と変わらない。

なぜ変わらないのか？

○ 反省会？

仕事上がり夕刻、の反省会、ではないが、一度あった。

なぜ片乙はこんなに仕事ができないのかと、棟梁と筋肉も揃い、問い詰めてきた。幸いその場こそ暴力はなかったものの、これまでの経緯などを、質問攻めになっていた。

質問攻め、何度の問答があったか、

『なんで？』『それで？』『どうして？』『ありえん』『そんなはずないだろ』『ウソだろおい』『何がやりたいんだ』『変われや』『こうとか』『そうとか』

質問が回るとともに、

私のこれまでの記憶も回って、

口の奥、声の奥が、滲む、

滲みはやがて、

片乙『私は、わだし、ば、こんなはずっゝ、』

ひいきい、ひいきい、

「私は、こんなはずじゃない」

言いたかったけど、涙もひいきい、喉がひいきい詰まり、言えない。
言ったとて、どうにもならない。

自己的我慢をゆうに超え、慟哭の涙が溢れかえる。

身体中の成分を涙とし、なんとか喚きを抑えながら、ひいきい、ひいきいと、
際限なく吹き出す慟哭の涙。

一度決壊した感情の雪崩は、ひいきい、ひいきい、とどまらない。

人目に、目の前で、晒す、ひいきい、

おおよその涙だった。

涙を代償に、その日の質問会は、幕引いた。

○ 鳶塗装屋のある日

シャッターの中、塗装缶が無造作に並んでいる。

どんどん暗色が濃くなる刻、その日の仕事の、一応あがりの時間。

筋肉『また明日ボコボコにしたらあタアノシミだなああアハハ』

・・・外隣には仕事で使う大型軽トラック、鍵もそのまま、その気になればすぐ動く。
朝一に不意打ち猛スピードで轢けば、筋肉を殺せるだろうか？

車庫に仕舞ってある塗料ストックは、そんなにないけど、これも可燃物だろう。

民家一軒燃やすくらいであれば、足りるか？

棟梁のこの民家も、鉄筋基調っぽいからな、あまり燃えないか。

大胆すぎる、すぐバレル。

頭を振り、よぎる「膿」を否定。

私は、そんなことをするために、冷寒ノ地に来た訳じゃない。

筋肉と2人、棟梁と3人、

フィジカルだけでも不利そのままに仕事の日を重ね、数ヶ月が経っていた。
まだ若年26歳とはいえ、ヘトヘトだった。

とにかく、今日はこれで、帰れる。

・・・半額弁当、あるかな？

○ 鳶塗装屋の冬季

あくまで塗装屋のため、仕事は塗装。

鳶らしい足場組みなどは、あくまで準備のため、作業として請け負うはあくまで塗装。

ここは冷寒ノ地のため、1年の数ヶ月ある冬季は氷雪に覆われ、塗装業ができない。冬季は、漁師の手伝いをすると言う。

私と棟梁、筋肉も一緒に行き、現地では同類、同界限、同業他社も、宿地に集う。

筋肉と一緒に漁師の現場に行く？、と、

私は筋肉に殺害されるビジョンが、冷や汗だの油汗だのも添えられ、一ドラマの一場面、ノンフィクションシーンのように、色濃く視えてしまった。

「辞めます」

とも言わず、書き置きも残さず、正月元日を挟み、冷寒ノ地口ケ地を、脱走した。自分のMY車は、まだ所持していた。

正月、12月と1月の狭間、外は大吹雪。気温はマイナスを極める。めでたい1月1日に、決死の逃亡。

防寒に寝袋があったとはいえ、寒かった。

凍え死には、結果的にしていないほどではあったものの、もう、凍寒かった。脱走したといっても、同じ冷寒ノ地。冷寒ノ地の、別の方角。別の街。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード　― 鳶職 ―

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『筋肉は愉しんでいたようです』

黒社 『フン』

配下 『精神も保たなくなってますね』

明治、大正、昭和、ベビーブーム、団塊、バブル、平成、氷河期、ゆとり、令和、Z世代、コンプライアンス、年号、新年号、時代が変わる話。

いくら時代が変わろうと、

その瞬間に人間の意識がアップデートされるわけではない。

その時代の意識流行りがどうあれ、人々全員がアップデートされるわけではない。

真代。

1000年後の未来、真代という年号があるでしょう。

明治の時点で、真代の流行になる意識をもつ存在がいたかもしれないし、何度新たに年号が変わろうと、

昭和の感覚から、いつまでも変わらない人間も、一定数存在する。

◇ 仕事は戦いか？

社会の仕事という戦いの場。

本当は戦いであつてはいけないけど、

人間の意識はまだその域にいないだろうから、あえて、仕事の戦いと表現する。

時代が進むごとに、

この小説も時代劇になるかもしれないな。

いくら変わろうと、

かつての戦争然り、人種差別然り、そして私の、エピソード然り。

代わり、変わり、移り、解決して？、なかったことになり？、忘れられる？

これらの出来事も事実としてあつた。過去にあつた事実。決して失われることはない。

その出来事が大多数大規模であれ、

少なく唯1人であれ、

あつた事実の憤怒、恨ミは、失われることがない。

そして、いくら時代が変わろうと、恨ミは、恨ミ。

○ 極寒の脱走

暗色の街中はずれ、

一面、白く迷いそうな道を逃走路に、雪道を抜け抜け、

一夜を過ごしても不審ではない、船港の駐車場、一角に車を停める。

車の外はこんもりと氷雪が覆う。

できる限りの厚着と、寝袋で暖をとっていた。

もう深夜だ、ブルガタ冷える極寒だけど、少しは寝られるだろうか、

寒さにアテられてか、脳内コイルが回転しだす。

フラッシュバック。

画面が乱れ、全面に点いては消える、画像、幻覚を視る。

誰かとも、何者かともわからない、おぼろげ。

XX 『人間は空気からは産まれない』

XX 『どういう経緯であれ、男のチンコと女のマンコがいる』

XX 『両親は両方大学に行っていた。給料の目安も知っていた』

XX 『だがテメエには言わなかった。伝えず、継がせていない』

XX 『あきらかに望まれていない出生だ』

XX 『たまたま遊んだSEXで、たまたま細胞が当たっただけ』

XX 『大人のおもちゃになる運命だ』

XX 『その役目通り、ボロボロになるまで遊んだらあ、つまんで捨ててやらあ』

XX 『ああ無様無様、いらね、もう死んだら』

XX 『まっとうできるなあオメデトウウウ』

そう言われて反射のようにギョングョン巡る巡る、記憶のスクロール。
外れて壊れるほどの速度で回転する脳内コイル。

記憶の回顧、遡ると行き着く、

子供の頃。

物心の頃からも、振り返る。

古い、蓋がある。

たしかに、心当たりのないわけではなかった。

○ 時は昭和 片乙の生実家 トタンと木造で組み立て建て増した家

人間は空気からは産まれない。

どういう経緯であれ、男のチンコと女のマンコがいる。

最低限、細胞体をつくる、元細胞が必要だ。

○ お見合い その日 即決

○ 結婚

お見合いをするということは、必ず結婚へと進行する時代だった。

お見合いをしたのに、お相手様を断るという無碍など、失礼千万という時代だった。

大切な大切なお嬢様一家が巡る一幕。

結婚の理由は、大切な大切なお嬢様に晴れやかな結婚をしていただき、幸せな家庭を築いてほしいとの先代両親からの希望だった。

お嬢様が結婚を迎えることで、大切な大切なお嬢様は、さらに見事に立派になれる。

お嬢様がお嬢様であることを内外に示す、ある種の世間体も内包していた。

お嬢様は女、婿は男。

女は世間体だけで結婚する。

男はお嬢様と結婚できると、チンチン手放し喜んでいる。

盛大に世間体を迎える、一代の結婚相手として迎えた婿だった。

わけだが、

女にとって実際のところ、結婚も男性の事も、わけがわかっていない。

男にとっては、お嬢様とSEXできると、胸躍らせるだけ。

男はしばらくは遊びで毎夜か、夜毎か、精子を打ち込みたい時分。

女は訳もわからず精子を腹に打ち込まれただけ。

男が、男の性器がどんなものかも知らない、女は、男自体を初めて見るほどで、性だ恋だデートだは、なかった。あれこれ省略結婚だった。

女も女で、男が想像していた女は存在していなかった。

女にとっても、本来は結婚も子供も、そこまで優先する事柄ではなく、求めている。言葉にするほどの自覚はなくとも、別に必要ないと思っていた。

○ 数字だけ多い歪み

女、つまりお嬢様は、看護婦としての仕事を通勤していた。が、電子レンジの扱いひとつできないお嬢様が、看護婦だと？、まともに勤まるわけがない。

荷物看護師だとしても、お嬢様という名目看護婦。

看護師の給料として毎月高額収入がある以上、

自分1人であれば、如何様にもなる生活を送っていた。

無能のくせに長年看護婦として働けていて、それだけ高い給料も貰えていたという事は、それだけ運が良かった。

女は運が良過ぎた。

末代までの運さえも、使い切るほどに。

女は、本来は結婚も子供も、設けてはいけない類いの女だった。

男も仕事をしていたが、女ほどの収入はなく、金額の数では男が下だった。

女は、自分より弱い男を、見下す習性がある。

女が腐っていると云われる要因、

この習性がひとつの原因だが、男は婿。家に来た外者。

この場合はお嬢様一家からも総勢で、見下される男になってしまった。

家に入ってみれば、

婿として歓迎されたはず、

迎えられた男は、

別家から勝手に来た、嫌われる異物。

一家屋根内で日々、異物扱い見下し扱いされている男は、やがて狂う。

男は掃き出される埃のような扱い、

なにか訴えるも、埃がしゃべるわけがない態度で、無視返し。

女も女で、なんでこんな男が一家内にいるのか、よくわかっていない。

○ マッチング不具合

安定的にマッチングが絶えない、メシ不味の嫁。

女に例え高等仕事、高収入があつて、充実した趣味があつたとしても、メシは不味かつた。

男はやつと仕事から疲れて帰ってきて、

「おかえり貴方」

嫁の作る、ゆっくり美味しい食事とお酒を、温かい家庭、楽しくイメージしてたか？

あれこれ省略された家庭には、そんなモン、無い。

女の出すメシも不味かつた。

イメージは割れる。不味いなら食うなとギスギス。

女は料理できないくせに、頑なに冷凍食品やインスタント食品は使用しようとしなない。

いろいろ理由があるようだ。

電子レンジを扱えない無能なところも由来するが、

加工食品を扱うと、女は料理下手、それを自分にストレートに見せつけられる。

普通の味付けになっている、数ある加工食品を見るも味わうも、料理下手を正面から証明されるのが、気に障るのだろう。

料理できないのに、頑なに、手料理っぽいことは続ける。

女自らの料理で、女自らの味覚も異常をきたしてくる。

偏食の味覚異常。

万人受けするはずの、冷凍食品やインスタント食品は、食べられなくなっていた。飲食店の料理も、おそらく受け付けられず、食べられない。

女の作るおふくる料理が、腐った卵だ。

ご自慢の料理下手を誤魔化し続けていた食卓、生まれつき不味い偽物だけ食べていた細胞。そんな奴に真っ当な能が備わると思うか？

結婚して同居生活するにしても、それまで30年40年と暮らしてきた個人感覚もある。食事も大事。自分を軸にして、自分のための食卓にしたほうがいい。

○細胞

交配してはいけない類の女と男だった。

ところが世間体は、この男と女を、一膳の割り箸とした。

割れた割り箸を再び繋げる接着剤は、なかった。

男は男で、お嬢様姉妹の長女を嫁にしSEXできると思って、脳からのばせていた。
さらにはあわよくば、

2人姉妹お嬢様をまとめて両手の華、ハーレムにでも、できると思っていたか？

女は女で、男をロクに知らない以下の感覚のまま、世間体のお見合い、世間体の結婚、子供も世間体の一部とまで思っていたかは知らないが、
のばせた男の精子を、訳もわからず注がれちまった。

男もまだ子供作りの気もないのに、

まだ結婚してすぐの、

お楽しみタイム、のつもり。

まだアソビのつमりのSEXで、細胞が、くっついちまった。

人神が与えし、
細胞の時点で、「間の悪い」細胞。

それでも、かつては、

世間体がちよっとお漏らししただけの、細胞。

腹に打ち込まれた細胞。

やがて膨らむ細胞。

産まれた細胞。

一家内に、さらにひとつ、細胞が増えた。

分解し、水に流そうとしたのだろうか？

浴槽に沈める。

とっさに、思い直した。

ものの、

細胞を育てるどころではない。

○ 生ゴミ細胞に向ける教育？

女と男は、お互い、無視無視無視、日々無視日々無視日々無視。

無視するだけでも、体力エネルギーは消耗する。精神エネルギーはもっと消耗する。こんな女と男が、細胞を育てられるような思考に至れるわけではない。

教育？

異物と埃と世間体の見下しで、なにをどう教育するのだ？

育てる、教育はともかく、

省エネルギーにて、日々を過ごす方法は見付けた。

無関心。

無関心でいることだ。なにもかも。

揮沌とはしているものの、無視よりも無関心のほうが、まだマシだったのだろう。

口きかない。相談しない。しゃべらない。

嫌な奴を避ける？ 排除する？ 方法は無視すること。

無視から無関心に、合理的向上した、省エネ。

ギスギス家庭で、教育？

できるわけではない。

箱入りのお嬢様が、ガキを搾えるもんじゃねえ。

箱入りのお嬢様に、男を？、婿を？、与えるもんじゃねえ。

女は、本当は子供を作る気もなかった。

勝手に家に来た男に、勝手に植え付けられ産まされた細胞、

細胞の関係上、くっついてしまっただけ。細胞がくっついて人間の形になっただけ。

子供なんぞ、捨てれない生ゴミ。

ただでさえ邪魔な臭い生ゴミなのに、金まで、かかりよる。

教育課金など、する気はない。

女の金は、女の金。

仕事してきた給料の金、趣味に課金するための金、生ゴミに払う金など、あるわけない。

女は、自分に勝手に精子を注ぎ込んだ男を、嫌っていた。

余計な出費が男と、男のせいで増えた細胞に取られているのだ。

ひよつとしたら家内で、一番の無能で、一番の世間知らず、の女。
だが、金の、金額の数字だけは、女が最つとも、持っていた。

○ 家内の余所者 埃の嫌われ者 婿 男

昭和だ。

年号が平成になっていたとしても、感覚は昭和のままだ。

男は、婿として招かれたはずであるものの、

実際は、余所者だ、嫌いだ、埃だ、無視だ、異物だ、おおよそ婿として扱われない。
鬱積も溜まっていく男は、父。父上様だ。

産んでもらった子供ごときが逆らってはいけない、昭和の偉大な父上様だ。

教育か？ 暴力か？ どちらが先か、どちらが本音か？

男『塾行かなかっただど？』グーパンチ

男『塾ん金をどこで使った』グーパンチ

男『泥棒だそお前ええ』グーパンチ

男『勉強してないだろ？』グーパンチ

男『ちゃんとやれ』グーパンチ

本音がひと通り済んだころ、顔を赤くして半ベソの細胞、こもる台所の不味い夕飯席へ。

女『殴られた？ 殴られたの？』

女『はン、甲斐性ないこと』

女『泣いた？ 泣いたの？』

心配ではない。

野次か皮肉か。

表情は隠しているが、中身は視える。

ヒステリックドラマさながら、サスペンスさながらの、悪女の嗤い顔。

○ 夜の運動会

『嫌だ』 『イーヤーだ』 『嫌だ』 『イーヤーぢゃ』 『嫌ぢゃ』 『イーヤーが』 『嫌が』

女の声だ。

叫びにも似た声に、真夜中、細胞は目を向け起きてしまった。

細胞はまだ小学生。一つの部屋内、子供の布団の10cm隣、真横の布団で男と女。

子供の目前に映った、男と女の重なる裸体姿。

夜の運動会が開かれていた。

子供の真横で営むなっつーの。

嫁として女と戻ってほしい男。

男の爪を剥ぐほど「嫌だ」と抵抗する女。

そんなに出産したくなかったか。

知らない。これが本音だ。



真



○ 会話など無い

25歳頃までを過ごした実家では、記憶のある25年と長く、

家族内誰とも声が交わされていなかった。

一応、それでも、同じ家にいる以上、数文字くらいの発言は、稀にある。

あったとしても、極端に少ない少量、最小限の声、最小限の単語。

代わりに、無視、沈黙は、家内を覆い尽くす最大限、空気に色濃く混ざっていた。

男『・・・育て方を、間違えた・・・』

ある日、男からの口が漏れた。

今思えば、蒸発を決意した、ひとつの言葉だったのか？

たぶん、中学期、突然、男が家から消えた。

そのままたしか、中学3年から高校1年くらいの頃、だったと思う。

離婚。

頭の中でガラスが割れたようなショックを感じたことがあったことも、思い出した。

細胞は高卒という名目こそあるものの、
実際は中卒と変わらないか、あるいは、むしろそれより低層だ。

女2人『つつ、しょぼっ』

女2人『日当1万ないの？』

女2人『時給1千ないの？』

女2人『ぶぶっw、しょっぱw』

女2人『あああ、ヒソヒソ聞こえるしょ』

女2人『言わない言わない、知らない知らない』

ふとした、女特有の短い単語会話、それで十分に察せる。

女は長女で妹がおり、2人姉妹だった。女2人の会話。

初期工場の際の12万給料の話になった際、ふと吐き捨て漏れのような、短い会話だった。

本当はもっと高額な給料を貰える仕事がある社会にある。

ことを知っていたけど、進路、就職のいまわのキワになっても、女達は言わなかった。
例えば、大学行かせて、高い給料、質の良い会社を「工面」するのは「面倒」だから。

女『甲斐性ない子やちゃあ』

この家では祖母の代も含め、二世代から受ける、「甲斐性ない」という教育方針だった。

「甲斐性ない」から改善する、ではなく、

余所者の精子も含まれている細胞に向け、軽蔑、皮肉、あざける、貶むだけの「甲斐性ない」女は同じ女である祖母と同調し、細胞を「甲斐性ない」そのままに、擦り込んでいった。

女『なあんしとんがあ』

女『あんたみたいな甲斐性ないもんが、どうすんが』

初期工場を辞めた。

その日の夜、感情的に怒りをあらわに、女の一言だった。

仕事辞めるなんて、何してんだ、とんでもないこと。を細胞が、しでかした。

女は転職など、したこともない。

見たことない現象に、イライラしたか、あるいは恐怖か。

この親にして、この子あり。

よかったじゃないか。教育の通り、細胞は親の言われた通り、素直に育ち、

「甲斐性ない」その方針通り、見事育ちきった。

余所は他所。家は内。ズレ倒していたとしても、カンケー無いもんな。

女『仕事の人達と葬式に行ったことはあるけ？』

ある日、世間話程度に尋ねてきた。

「NO」と答えるのも、はばかりれる質問だった。

葬式というなら、私は出席する側ではない。葬式送りにさせる側だ。

生涯一度も転職をしたことのない、甲斐性あふれる女様は、いったいどんな仕事を、なされていたのやら。

私の仕事環境とは、まるで別物だったことをも、証明する質問だ。

片乙『なんの仕事もしてないけど』

ハツタリ気味に、軽いつつこみ。雑談に紛らせた。

TV、何気ないバラエティニュース番組の途中、たまたまそれっぽい話題の場面。
食い気味の返し言葉、

女『そんなことない』

ガチめのニュアンス、

咄嗟に「仕事してない」を否定したところを見ると、そういうこと。

○ 無能 運しかない

女は、本人は何も考えなくても、高い給料の仕事を40年と長く続けられた。多少大変な日があったとしても、ヤケ酒もヤケ食いもなかった。

大変といっても、その程度。

社会とは、「そう」いうものだ、と、思っていた。

この親にして、この子あり。

一度会社に入れば、仕事は生涯長年続けるものだろうと思っていた。

細胞本人も、「そう」思っていた。

細胞を知る者達よ。親の顔が見てみたい？

答えがここにある。

女本人は、なんの苦もなく高い給料の仕事を長年変わらず続けられたのだから、世間の仕事はすべて「そういうもの」、との認識しかなかったのだろう。

逆に自分以外は、なぜ「そう」できないのか、わからない。

それができたのは、運だ。運吸いとは別の意味で、女も運だった。

運しかない。

女は一家末代までの運をすべて使い切って、女だけに全振り。払いきった運となっただ。

女は仕事、少なくとも高い給料を得る意味の仕事としては充実していたし、趣味として嗜んでいた生花花道も、それなりに金銭課金が必要な趣味を持っていた。一般的に不味いものしか食えない偏食であろうと、女は女の食べたいものを食べて、女は、一人で仕事と趣味を繰り返していればよかった。

そこに旦那婿男とか、面倒に育てる細胞とか、入る余地は、本来なかった。

私が実家を去ったことも、男が蒸発したことも、女にとってはむしろ都合の良い結果となっていた。

不要細胞に消費する金も、他人の男と交換する酸素も、これからはすべて女自身のものだ。

なんでこんな無能に、金が集まってるんだ。

なんで真っ当にがんばってる連中に、なんで金が集まらないんだ。

○ チート 逆チート

親が楽チートの環境にいたため、それも運だけで。

逆に子供は、過酷チート、無理ゲー環境として、世代さかのぼり、女にあったはずの苦勞の分まで、ツケ払いすることになった。

女は、本来自身にあるはずだった苦勞を、経験することがなかった。

あるはずだった苦勞は、どこに行ったのか？

細胞が生後払った苦勞量には、本来、女が払うはずだった苦勞量も含まれている。

ひよっとしたら、家代先祖遡り、

まるまるの苦勞量を、末代である細胞一人に、すべて加算されているかもしれないんだ。

自分の抱える苦勞の分は、自分で払え。

今からでもいいから、

楽チートの外にあった、社会の無理ゲー、血が滲む苦勞を、払わせてやりたい。

○ 本来なかったはずの細胞

「うっかり産んぢゃった」

男は蒸発したため不明だ。

失敗婿として、いたたまれなかったか、女の家も異常な部分があったことも事実、とても共同生活は続けられないと思いきったか。

女は仕事も趣味もあった。

お見合いだ結婚だは断り、女自分の用事を、女自分一人で営んでいればよかった。

「うっかり産んぢゃった」

元がなければ、細胞も生後、これほど苦勞することはなかった。

親になってはいけない、男と女。

ロクにガキ育てる気もない奴が、ガキ産むなっつーの。

男も、女も、産まれた細胞も、お互い迷惑だ。

男も女も、本来は結婚も子供も、してはいけない類のペアだった。女も男も、「つがい」にしてはいけないペアだった。

○　ところが細胞を植えつけたときは、昭和

お見合い、結婚、めでたい子供。

それを「嫌だ」と言って納得できる時代の風潮ではなかった。

間違っで子供を産んでしまった。

細胞を産んだとて、

不良品じゃあ、

もう、どうすんのさ、お互い迷惑だ。

「あー、今の無しで」方法も、法律も、無い。

男は、離婚のあと、マジ蒸発。

女は、1人ではなにもできない人だ。旧家と共に朽ちていくだろう。

片乙の出生の経緯。家族構成の記憶。

社会に忌われる格差が、

社会よりも小さい単位、一家単位の凝縮、縮図として発生していた。

親子格差。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード ―家族構成―

○ 何処とも不明な一室にて

黒社 『あの女あ捨て』

配下 『除名しておきます』

親が死んだら、どうするか？

実用的なことを伝えておこう。

親が死んだら、

遺体を動かさないこと、触りもしないこと。

110。電話、「親が亡くなった」

警察がきて、見て死因を調べて「死体検案書」をもらう。

「死体検案書」があると、市役所で「死亡届」をもらえる。

「死亡届」があると、葬儀屋で火葬できる。

葬式は、高200万から、低50万くらい。

しめやかな葬式だと？ してもらえんと思っただのか。

このような毒親には勿体ないから、腐る前に燃やし代金だけ払って、ゴミ捨てだな。

通帳の預金は「相続財産」となる。

「相続財産」を引き出すために。

銀行口座は凍結され、子供など「相続人」が必要書類を用意することになる。
市役所と銀行窓口を行ったり来たりすることになる。

・通帳（タンス裏など）

・印鑑登録証明書（市役所）

・死んだ親の出生から死亡までの戸籍標本、住民票（市役所）

・あなたの戸籍標本、住民票（市役所）

・銀行で書く、相続用の書類（銀行窓口などからの預金名義変更依頼書など）

・遺産分割協議書（作成は自分で。パソコンか手書きで作成。場合によってはいらない）

・遺産分割協議書を誰かに頼む場合（弁護士、行政書士など。近くの事務所を検索、探す）

・他パターンにより、2〜3種類、紙が必要（こんな感じ？）

上手くいくと半額から全額が、「相続金」として入手できる。

「相続預金の仮払い」これは、すぐ金がある場合の突貫制度、ほぼ無視していい。

銀行窓口、または家庭裁判所にて、一時的な支払いであり、150万くらいが上限。

親が子供を育てる気があつたかどうかは、齒並びを見ればわかる。

教育や賢さなどは、物理的に目に見えないが、

齒は、見える。

奥齒の親知らずのことも覚えておいて、18歳から20歳代で抜齒がオススメらしい。

齒列矯正していた親は、子供を育てる、教育課金する気があつたと云えるだろう。

なかった場合は？

そういうことだ。

この時点で面倒だと思う人は、親になつてはいけない。

子供を、

子供を自分よりも小さい弱者として見るか、

子供をひとりの人間として見るか、

の差といえるかもしれない。

作者に子供はいないから、実体験による説得、とまでは言えないが。

女は、親になるなら、入室のノックくらい覚えてな。
特に思春期とか、いろいろと気を張っているから。

男は、親になる前に、女断ちを覚えてな。

アソビまでいいけど、親になると別物になるから。

女は、女も男も、女を甘やかしすぎだな。

女から見た、女えも、男から見た、女えも、甘やかしすぎだな。

男は、自分に厳しい、というか痩せ我慢する傾向もあるな。

男はときに、甘えることも覚えるべきだな。

男も女も、どちらが収入面、金銭面で強くなるかは、わからない。

男は、強くあるべき？ 違う。

女は、弱くていい？ 違う。

少子化の原因は、金の話じゃないよな。

単に、めんどくさい。

教育の話しといてなんだけど、子供いる？

いらないだろ。

自分で産んだ子供だとしても、人間として他人だぜ。

子供なんて産んでしまうと、そして真っ当に育てるとすると、

男も女も、自分たちが持っている金と時間を、ほぼ全てと言っていいほど、失うぞ。

自分の大切な金も時間も、可愛い子供という他人に、全部取られる。

どんなに面白いゲームでも、

10年20年の教育ゲームと続けていると、さすがに飽きてくる。テンションも保たない。

その金と時間でゲームだとか、1人旅行してたほうが、よっぽど有意義。

教育するなら自分に向けて充実する、よっぽど平和で余裕のある、快適な生活が送れるぞ。

私にパートナーがいたとしても、

付き合ううえで大切なことなので最初に言っておき、厳守する。

「産まない」

「子供はいらない、中絶してでも」

「孕まない」と言う。

気の迷いでうつかり身籠りそうな人は、不妊手術を受けてしまおう。

男女とも、それぞれの生殖能力を失わせるための手術がある。

男は精管切除術、女は卵管結紮術、というらしい、あとは病院で聞いてくれ。

結婚も子供も、節穴じみた憧れなんて、抱かないほうがいい。

男女の恋人ラブラブ夫婦だとしても、他人は他人。

そのうちヒズミが生じ、1人の方がよかった。となってくる。

そして何より、

片乙みたいな望まれぬ人間を産むな。

女のやだあ。なんなんあれ。

「これかわいい」 「やだあ」

「いっしょに帰ろう」 「やだあ」

「おいしいお店見つけた」 「やだあ」

「SEXしよう」 「やだあ」

「お金あげる」 「・・・」

全部「やだあ」

全部否定。

否定が肯定で、肯定が否定？ もうよくわからない。

ある意味性別によって、甘やかされ過ぎているところはあるよね。

自覚があっても、なくても、逆手にとってるよね。

女の涙とは、方法、手段、演技、武器、に類するもの。まともに相手してはいけない。

自制しなよ。

クソババアになる前に。

◇ ドン引き

男も女も、ミスはある。

恋人、運命の配偶者の目の前で、
カッコよく、かわいく、美しく、
キメたいプレッシャー、
緊張もあろう、男か女のミス。

「えーそんなこともできんの」
「きも」

百年の恋も冷め、てはいけない。

たまに、本物の涙もある。

彼氏彼女ヨメダンナ奥さんに婿。

そういった概念が薄まっている昨今ではあるが、それでも性別の魅力は多少なりとも残っている。

女性は、

女性っぽい男性を求めているところがある。

性の身体的には男性であっても、メイクや美容など、フルーツといった偏り食嗜好。女性グループと同じ集団心理に加わり、キャツキャできる男性だ。

一定の強バリアを張れる集団心理だが、集団心理だけに閉じこもるのも、よくない。女性自ら、1人で、自発行動することを覚えてもいいだろう。

男性は、

お姫様や、いわゆるお可愛いヒロイン、みたいな女性を、あまり求めていない。

求めるとしたら、ゲームやアニメでセンターに立つ、ヒロイン主人公だ。

あまりゲームもしない女性は、ヒロイン主人公像が、ピンとこないだろう。

恋話のスキル習得も兼ねて、女性主人公のゲームもしてみるといい。

ま、

個人の性癖もあるから？

なんとも言えない。

外面おキレイなのは、いくらでもある。

内面を磨き上げると、良いな。



壺部

かきけり



○ 帰り先無き路

午前4時になろうかとする時計。

寒さが手先足先からチクチク起こす。

少しは、寝られたようだ。

どうにか、部屋を探さないと、

脳内コイルの回転が収まり、視ることになった、ビジョン。

そうか、私は、

なにかの間違いで、産まされた、細胞。

両親の望み出生した子供、という立ち位置が普通だとすると、とても普通にはいられない、別の、細胞。

細胞の材料は同じだったため、人間の形こそ、している。

だからといって、

○ 凍れる地 脱走先

正月脱走から数日、冷寒ノ地域内、別街区にて。

人の暮らせる、どこでもいいからアパートの一室に入居、駆け込むことができた。
凍死こそ、していない。

また携帯電話も変えたから、鳶塗装屋は追ってこれない。
筋肉に殺されず逃げ仰せたのは、一旦よかった。

残金も少ない。無理気味の行動が続くが、スピード就職しかないか。

○ 少なくとも株式会社

職業紹介所にて、「株式会社」を探す。

平日製造所も鳶塗装屋も、あの形態は自営業と云われるものらしい。

仕事の求人の中には、自営業も紛れているから、

自営業には近づいてはいけないことも、ここで知った。

というか自営業当人達は、職業紹介としての求人を発行してはいけない。

他人に手を求めるな。

自営業は自営業らしく、家族間などの当人達だけで操業するべきだ。

そもそも、自営業などという社会個体を派生させてはいけない。

以前求職諸般の断りが続いた先とはいえ、

何気なく参加することになった鳶塗装屋は、そもそも、自営業に参加するべきではなかった。

鳶塗装屋も、以前の平日製造所も、自営業だったと知った私は、2度と自営業には加入しない。

次は、ちゃんとした会社、「株式会社」という看板のあるところに勤めよう。

そして今度こそ普通の会社、普通の仕事に就こうと考えた。

ところが私自身、特別な資格やスキルもないため、パズルは、資格不問、高卒可。

普通の会社、普通の仕事とはつまり、

結局は聞き馴染みのある、工場キーワードが目によく留まる。

割と早々と、

大きめの工場、巨管工場株式会社に入居することができた。

と同時に、スピード転居。巨管工場に近い、住居となるアパート部屋も確保できた。

○ 巨管工場

パンを扱う、食料の工場だった。

巨管工場はその紹介時、食用パンがベルトコンベアに流れてくる様子を、ツツ立って見守るだけの、簡単な仕事だと聞いていた。

時給は最低か、あるいはそれ以下。金は少ない。そのぶん、仕事は簡単はず。とりあえず見守るだけ、これなら私にもできる。

実際に配属となったのは、惣菜部屋。

あれ？ 話と違うけど？

食用油の浸かった機械へ食材を投げ込み、唐揚げなどを大量調理する部屋だ。

揚げたて唐揚げが美味しいという話じゃない。

別フロアには確かに、食用パンがベルトコンベアに流れており、ツツ立っている凡人が脇で見守っている。

パンフロアは、丸一日単調作業であり、空調もある。

それと比べて、

惣菜は毎回複雑手順、空調も無い。

労働内容的に、惣菜のほうがはるかに酷だった。

パンと惣菜、同じ時給だとしても、あきらかな「大変さ」という格差があった。

○ 仕事のスタイル

工場の中身はともかく、

私はとあるスタイルを、この仕事のスタンスにしようと考えていた。

何の技術もない私の意思など、こと社会の仕事においては、屁の参考にもならない。

であれば、自分を殺そう。

私は人形。

私の意思など存在しない。

部品のように動け、言われたことだけ動け、私の考えなど無にして動け、

ただただ、やれ。

最初こそスタイルスタンスの意地を維持できていたけど、無茶な意地は破綻する。

どうしても人間の心が無になる人形には、なりきれなかった。

○ 役職や配属や部署に代わる、臍貞

よくある会社の役職？

初期工場や平日製造所などもそうだが、

工場という会社においては、

直属の上司とか部下とか、管轄とか部署とか担当とか分野とか理系文系とか、はあ？
だ。関係ないのだ。

こういう工場はどれだけ建物が大きく立派に見えたとしても、中身は粗末も粗末。
この巨管工場でいうと、食材ごと腐っているとも揶揄できる。

大きめの機械がドンとあって、その隣にも大きめの機械がボンとあって、
なんとなくそれらに触る担当が、じゃあアンタね。

なんとなく決まっているだけ。

では仕事の方向性、仕事の配属、とか舵取りはどうするのか？

舵取りがあるとしたら、派閥、臍貞。

○ 食材を吸い込む肥えた脂肪

食えることが好きなのだろう、でも料理は別だ。

さらに工場の調理とは、どちらかというと作業であり、食える話とは別だ。

食いしん坊、大食漢、がいた。

大食漢も180cmくらいあり、縦にも横にも肥えている。ついでに態度も肥えている。肥えた鼻肩が跋扈する。

舵取りの大元、鼻肩の頂点に座すのは、自称偉い役職、大御所、大食漢。

自称であつても役職は役職、その辺の民草は、へへーと大食漢鼻肩にならえ。

大きめの機械がドンとあつて

大食漢と私はよりにもよって、

ひとつの大きめの機械がドンとある同じ一台、同じ配属として携わる担当となつた。

新人加入して、先輩どころか、いきなり鼻肩の頂点を満足させる仕事をしろ？

一番弱い立場の私と、一番強い立場の大食漢。

無差別階級マッチどころではない。

○ 手癖

当本人が無意識のうちにとる行動。なんとなく、自然とラクな姿勢や、間。手癖感覚は、個々人で異なったり、個々人で似つつも、微妙に異なる程度なこともあり、ある意味で手癖も、個人のパーソナル的に尊重すべき要素のひとつ。もしこの手癖を他人を基準にしたものに矯正しようとする、手癖を矯正されている側は、とても窮屈な思いをすることになる。

○ 手癖封じ

自分よりも小さく、チヨロチヨロと動く私が気に入らないのだろうか。大食漢は私の手癖という手癖に、因縁、矯正しようとする。手癖封じだ。

手癖の矯正をする方法のひとつに、常時的監視がある。

手癖を封じられる感覚というのは、とても窮屈だ。

指ひとつ、自分の手癖で動かせなくなる感覚は、とても窮屈だ。

ずっと監視されて、手癖封じられている、毎日のように長時間窮屈。いつかのエラ張りのときの監視とも似ている、あれも窮屈だった。

今回は仕事8時間、狭い惣菜室、狭い機械脇、

まったく別の環境にいるはずだ、なのに、なんでまた同じような事に遭っているのか？

今回は巨管工場、この配属エリアの大元が、

私が日々仕事をしていて、日々一番近くにいる者、大食漢である。

手癖の矯正を受けていると、本人は指ひとつも周囲を確認してから、バレないように、隠れたように動かす、なんとも言えないモドカシサがある。

手癖封じとはつまるところ、

出足を挫かれている。

私の手癖封じ、出る手、出る足、ひとつひとつに枷がある。

大食漢は臍肩も支配し、私の枷の重さには臍肩の重さものしかかる。

大御所直々による、ありがたいご指導という、手癖封じ。

私の手癖も、大食漢の手癖封じでも、大食漢本人の手癖でも、完成される惣菜品質は変わらない。

どっちでもいいじゃないか。

大食漢『違うじやろう』

大食漢『オれあそんな方法言ってねえだろうお』

大食漢『なんでそんなことしてんの』

大食漢『何してんだあああ、ふざけんだあ戻せ遅え』

大食漢『不っ器用やわああ』

大食漢『遅っせえわー』

大食漢『遅せー遅う違う違う、言ってんわからん？、なんで出来んの』

大食漢『違ーう、やり直せえ』

大食漢『不っ器用やわああ、世界一不器用やなお前』

大食漢『なんでお前、生きてんだ？』

大食漢『遅せーまだ？違う違う違う、ダメだなお前え』

大食漢『オれあそんな方法言ってねえだろうお』

大食漢『違ガーああああう、うやり直オせえやああー』



真



○ 自分の意思で動けない仕事

私が手癖封じられている様子は仕事の動きどころではなく、
なにもせず突っ立っているだけということも珍しくない。

傍から見ると、私は仕事も口クにせず、

その中身は手癖が封じられているために、

自分の意思では満足に動けないからくる状況なのだが、傍の面々には伝わらない。
歯痒く、細かく震え、悶えることしかできない。

いつしか不当な扱いを受け、苛められる。

仕事もせず、ただ突っ立っていると、

それは「ギリギリ動け」などの叱責も飛んでくる。

違うんだ。

大食漢『お前はやらねえのか』

手癖封じの大元がアンタだろうが。

大食漢が臍も脂肪に蓄え、

どこまでいっても私は他者から見て、苛めやすい対象らしい。

でもそのせいで、

私は必要以上の苦勞をし、ハンデを抱えながら仕事して、

やってきたはずの仕事の実績はなかったことになり、長年苛められた。

手癖封じの大元、大食漢が邪魔で邪魔で仕方がない。

「配属を変えてください」と言う？ か？

「夜勤に変えてくれ」と言う？ か？

巨管工場の中樞人事にも、なかなか遠慮して、言い出せなかった。

手癖封じの枷、監視制限をかいぐり、日々窮屈な思いで仕事をする。

○ 同じ仕事 別の評価

まったく同じ仕事内容だよ。

シフトの関係で大食漢と私が、どちらか、いない日もある。

大食漢は重い体を揺らし8時間かかる仕事を、私は6時間とかからず終わらせていた。
8時間と、6時間以下。

まさしく一台の同じ機械を使っていて、まったく同じ仕事内容だよ。

私の方が明らかに仕事が早い。仕事ができる。

仕事できてないはずがない。

やってるじゃないか、こんなに。

それなのに、周囲からの評価は、一向に、

31歳、どれだけ歳を重ねたとて、いまだに仕事できない使えねえクソガキ扱い。

大食漢『10年早いわ』

この一蹴、

41歳、になったとしても、変わらず、どうせ、

大食漢『10年早いわ』

なんだろ？

算数できるか？ 自称ベテラン勢？

大食漢『間に合わねえなお前じゃあ』

鼯鼠『なんか違うんでしょ大食漢そう言ってるもん』

鼯鼠『お前にできるわけがない』

鼯鼠『食材捨てんな片乙う』

鼯鼠『えー捨ててんの？』

鼯鼠『片乙？、できるわけないでしょ、あんなのに』

○ 先輩と後輩

中年の団塊世代、ヒヨ口長が入ってきた。私と大食漢と同じ機械に配属した。ヒヨ口長は年上だが後輩になる。

ヒヨ口長『へへへ、へえ、ほええ、あれだよね、これだよね、あそつか、ほおん、はへほ』聞けば『へへへ』と愛想笑いだけで、

営業屋の隣でおこぼれ、給料も20万だか30万だか、貰っていたらしい。

ヒヨ口長は口は回るが、手は動かない奴だった。

私のこれまでの経験とは違い、まるでラクだったらしいというのに、金はあるわ、でもその分の動きはできないわ、口しか回らない、ヒヨ口長に、イライラした。

「このヒヨ口長中年、口しか回らないのか」

「背が高いだけでつつ立ってるだけで、近くで手伝えば私を見下ろすだけか」

片乙『遅いわあちゃんと品物受けないと』

私は巨管工場の先輩、大食漢からのご指導を踏襲し、

大食漢から言われてきた通り、強めの言葉で、後輩のヒヨ口長を指導した。

大食漢『片乙、何してんだテメエやらんかい』

え？ 私が後輩として散々罵られた文句を、私は後輩に言ってはいけないのか？

ついさっきまで、大食漢は、私に向けて、

大食漢『はよ不器用やわあ』『何してんだあ』『遅っせえわー』『違ーーう、やり直せえ』

大食漢『遅いわ、片乙、早く』

「遅いから早くやれ」って、大食漢は、私に、

言ってきたじゃないか。これも先輩から後輩へのご指導なんだろう？

大食漢『早いわ片乙、もっとゆっくり』

はあ？

今度は私が先輩となり、動けない後輩ヒヨ口長を、ご指導する順番ではないのか？

大食漢『もういい片乙、止めとけ』

鼯鼠『片乙、もうなにつっ立ってんだ、動けえ』

う、動けじゃない、違うんだよ、わかってもらえない。

先輩と後輩。

先輩が上、後輩が下。

先輩の言宣う姿が、後輩の姿であり姿勢。

先輩の「アイツはできてない」が真実となり、後輩はできてない成果。

先輩の「アイツはだめだ」が真実となり、後輩の評価。

先輩は絶対者、後輩は黙って従え。

先輩から木刀で叩かれ、ご指導を受ける後輩。

後輩の誰かが逃げようものなら、脱獄犯を捕まえる勢いで連れ戻す「輪」の包囲網。

後輩が先輩になったら、これまでの恨ミ、後輩を木刀で叩き、鬱憤を晴らす。

叩かれた後輩がまた、先輩になって、

その後輩がまた、先輩になって、

この連鎖。

腐った「膿」の連鎖を続けていたのは、バブル世代とか、団塊世代。あるいはその前から。いわゆる老害連鎖。

止めたのは、氷河期世代。

氷河期世代が、壁となり、連鎖濁流となっていた「膿」を、止めた。

連鎖「膿」を止められはしたが、壁の代償が脱落だった者もいた。

連鎖「膿」を止めた代償は、壁となった者の犠牲。

時代の重さで濁流となっていた連鎖「膿」

相当な重さの濁流だ。止めるにしても、相当に対等するほどの、相当な壁がいる。ならば、壁として犠牲となった者は、いつたい、どれほどの、

氷河期世代の中でも、叩かれた回数が多い少ないは、差がある。

最つとも多く叩かれた者は、最つとも多くの「膿」を止めている。

壁の貢献として、大活躍している。

賞賛は？ ん？ 聞こえんぞ？

○ イメージだけの無能者

できない奴はどう足掻いても、出来ていたとしても、出来ないことになる。

根拠もないのに、私はイメージだけで、できない奴。になる。

世間の、社会の、いつものテ。

大食漢が邪魔だ。

どうにか、いなくなってくれば、

だけどアルバイトの権限で、大食漢を追いつことはできない。

知識はないけど、おぼろげに視えた、慰謝料？、みたいな制度？、あつたっけ？
私自身が傷モノである証明がある、よな？

そうだ、精神科に行こう。



毒



○ 精神科

精神科、心療科、心理科。

医療としても扱いが難しいためか、

担当医も少なければ、受診するにも予約を介入してからだ。

私は自己診断で、私がなにか変になってると思い、というか確信的に私は「鬱」と思い、精神科を受診した。

普通は家族などの誰かが対象を変だと感じて、ひょっとして「鬱」かも？
などと感じて診断に連れてくるパターンらしいが、

私には家族も頼れる人もいなかったから、自己診断しかないだろう。

「鼻肩があつて、派閥があつて、手癖封じ、身動きがとれなくて苦しい」

「まるで災害、人が起こす、人災」

「私には資格がある、邪魔な人類を滅ぼしても許され、称えられる資格がな」

「どれだけ人を殺しても犯罪にならず、むしろゴミ処理としての貢献者が私だ」

どうせ公平な評価がないのであれば、自称で十分だ。

みたいな診断、医師との話内容があつて、

私は自分が「鬱」だと信じて疑っていない。

診断は、「統合失調症」だった。

初めて聞く病名だったけど、鬱までいかない、鬱よりは軽度、と思われた診断内容だったことに、納得いかないというか、軽視されてる気もした。

薬剤を10錠ほど、毎食だったかな？

気分のブレを沈める薬剤らしいけど、一切効いてる気はしなかった。

むしろ10錠の薬剤の値段のほうが圧迫され、かえって余裕がなくなるほどだ。

私はこの病院に、金を落としているだけなのではないか？
精神診察の日程も続いていたけど、やがて訪れなくなった。

○ 巨管工場 鼻屑を討つ方法

給料低いし金無いし寒いし辛い、なんとか解決を、
蓄えられるのは、辛さ過酷さだけ、十分貯まってくると、人は狂いだす。

いつか平日製造所へ恨みの炎を放とうかと考えていたように、

巨管工場さえも燃やせるだろうかと考えていた。

工場が燃えてしまえば、大食漢の肥えた脂肪も枯れていくだろう。

邪魔な大食漢の枷もなくなるだろう。

大丈夫。

内部は食用油で溢れかえっている。着火剤は十分だ。

ところが可燃物は少ない。

さらには、巨管工場は、24時間稼働しており、夜勤シフトもあった。

夜勤メンバーもいるため、夜闇に紛れて火を放つのも難しい。

「夜勤に変えてください」

とは言えなかった。私は寝てしまう。それに夜はゆっくりテレビも見たい。

「辞めます」

ともすぐには言えなかった。

また逃げて逃亡の旅？　にも疲れていたし、

せめてもの給料が、少量でも小銭がコンスタントに必要な私事もあった。

工場の仕事自体は、悪くないんだ。

いや、もちろん空調が無いとか、古い機械しかない仕事環境の不備といった問題、暑い寒い環境は平等に皆同じ。

外から見えない内部で、大食漢みたいなヌシや鼯鼠が蔓延る実態こそ、嫌悪の中心。

鼯鼠の繋がる糸は目に見えないが、イメージとして視えつつある、「鼯鼠」
鼯鼠の排泄物、「鼯鼠」

私は、「鼯鼠」を食わされている？

災害が起きると、50万人という被災者、被害が発生する。

帰宅困難者も含めると、350万という災害関連の当事者がいる。

「大変だったね」

400万人という、共感者がいる。

TVニュースでも報道され、一大事として周知される。

みんな知ってる、みんなが共感できる、みんなで傷を舐め合える。

一方、

局地的に、ただ一点に集中した災害。

人災。

誰も知らない。誰もわからない。

こんなことがあった、こんな被災被害があったと話しても、なんのことかわからない。

このたった1人は、

常人の400万倍という痛みを、一身に背負っている。

自然災害と違って、人災には明確に、害を加えた元凶がいる。

400万人の痛みを、400万人で背負う。

3999999人の痛みを、1人で背負う。

1人当たりどちらが重い？、明確だ。

なんで私だけが背負ってるんだ？、なんで私だけ、こんな重いんだ？

その他399万人は、なにをのんびんだらりと、のほほんと、呑気に暮らせてるんだ？

「私には資格がある。399万人を滅ぼす資格がな」

これは人災だ。

400万人の「膿」が、私という1人に集中し起きた災害、人災。

被災。家ない、食べ物ない、金ない、服ない、雨風吹きつさらし。

すまんが、支給頼めるか？

「は？、そんなの自分で用意しろよ」

災害も人災も、一度自分で経験しないと、ホントのところは、わからないよな。

○ 水道凍結破損

工場の仕事、鼻履などの内容以外にも、問題があった。

ここは冷寒ノ地。

多少寒くても、身体は、なんとか根性で耐えられる。

1年の冬季の、さらに冰雪たちが最も輝く数ヶ月の最盛季節には、根性に関係ない部品、アパート部屋の水道パイプが凍りつき、破損した。

水が使えないのだ。

キッチン使用不能X、風呂バス使用不能X、トイレ使用不能X。

さあどうする？

どうするもなにも、水回りは必要ばかり。賃貸、修繕、高額な費用。

どうやら確保できたと思っていた当アパート部屋には、

冷寒ノ地の冬季を耐えられるほどの、凍結耐性がなかった。

寒冷地仕様に建設されていたとしても、どういうわけか凍結に弱い、

ハズレ部屋だったようだ。

毎年給料を超える金額の、水道パイプの修繕費がかさむ。

せっかく、何かの楽しみにと貯めておいた金額が、

水回り修理、水道パイプは常に交換、ガス給湯器の本体ごと交換、トイレ便器が割れて、まさに湯水と次々消える。

以前260万円を払い買ったMY車も売り、水道修繕とか、目の前の生活費に充てる。

いつしか水垢泥垢でまだらになっていたMY車は、査定額5万円ほどとなった。

損失は大きい。いろんな意味で。

工場に食材はあるから、一応、腹へ入れる食料自体はある、だが、生活を続けられ続けるほど、所持金が減っていく。

ハズレ部屋だったとしても、冷寒ノ地、冬季の絶対零度がこれほどとは、このままでは生活自体凍りつき、止まる。

○ 巨管工場 退場

大食漢、鼻屑、精神科、水道凍結、大食漢、鼻屑、精神科、水道凍結、
大食デブ漢、鼻屑の「膿」、金額だけ取られる精神科、予想以上の冷氣と水道の脆さ。

問題が山積みで、正気も薄くなる、

工場内の不利な状況だけでも、

精神科医と3者、人事管轄的などころへ告知するも、伝わらない。

無断で休んでは、辞めます、ヤリマス、急に出勤しては、ヤリマス、
急に出勤しては、ヤリマス、辞めます、無断で休んでは、辞めます、ヤリマス、
思考が乱れる。

自分の心が割れているような混乱した心境、自分でも自分がわからない。

片乙『辞めます』

ヤリマス、「辞めます」、辞めますッテ、イッチャッタ、やべ？、イキスギタ、

片乙『もう、一度働力、せてく、ダサイ』

ギクシャク土下座して10万にもならない仕事への再加入を、懇願した。

一度私が「辞めます」と判定した腐った食材工場、自分の判定をコロコロ自ら逆にして、「仕事します」と訴えても、覆ることはなかった。

片乙『・・・辞・メ・マ・ス・・・』

いつか仕事の雑談に混ざっていた言葉。

「片乙なら、どこに行ってもやっていけるよ」

ドコニイツテモヤツテイケルヨ

その意味。

用済みになった、後始末も面倒だ、どこへなりとさっさと去ってくれ。

ゴミを集めるビニール袋のように、お払い箱を言葉の袋に包んで捨てているようなもの。

つまりのところ、

厄介払い。

31歳、大食漢の手癖封じやら監視やらの枷がありつつも、5年と続いていた。

小銭だとしても給料入る仕事を、うっかり辞めちゃった、
うっかり、しまった、つい、あ、どうしよ、

ゾワゾワと妙な焦り。

当然金は減っていく。

金は無いいし、凍え死にそうだし、まともな思考ができない。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード ―巨管工場―

○ 何処とも不明な一室にて

配下 『こんな感じでエエんか』

配下 『食わず嫌い鼻屑で完封、お見事でしたあ』

配下 『ほら、あいつ死にそう死にそう、どうなるかなあ』

配下 『寒い金ない無能、ひでえなこれ』

配下 『惨めねエーおんもしろーい』

黒社 『・・・』

○ 凍りつく部屋 自殺

もう無理だ。

自殺。

手拭いで自らの首を絞める。

初めての体験だった。

頭に血が溜まる。

咳やら痰やらが上がってくる。

我慢できず、手拭いを、ほどいた。

自死とはならなかった、ただ、さ、寒むヒ、

心身の芯まで凍りつき、鼓動すら停止するほどの無力感を感じた。

お腹は少し減っていたかな？、でも苦勞を食べても、お腹は満たせない。

わずかな温かさの粒を布団で覆い、最小限の暖をとる。

私が完全に停止する前に、

せっかく憧れの、約束の地、冷寒ノ地、それも市街に住めたかと思ったのを、残念さも残る、私の憧れと約束、私自身が、裏切るのか？、だが、

やむなし、か、どうにか冷寒ノ地を、離れるしかない。

でもどうする？

何処へ行く？

帰るのか？

末代一家代々、までの運を、すべて使い切った、無関心女、のいる実家へ？

少し悩んだけど、再び地域を移ることにした。

といつても、次へ移る地域は？、今度はどこへ行くとも取っ掛かりもない。

まったく検討がつかない。

検討がつかないけど、どこかの地域へと移らないと、いつまでもジリ貧だ。

サイコ鉛筆で、たまたま止まったところ。

地図をパラパラとめくり、たまたま止まったところ。

弛温ノ領？

弛温ノ領？ 他にありそうな候補は、思いつかないし、まあ、ここでいいか。

冬季の氷雪から明け、少しでも暖をとろうと小さく丸まっていた身体を、起こす。季節も微かな温かさと交代をする頃、私も冷寒ノ地をあとにした。

○ 空路

空へ。

飛行機へと乗り込み、数多の地域を尻目に進む、空路。冷寒ノ地よりもさらにアテなどない。

何も考えられず、モヤモヤ徘徊した先に、たまたまあった場所。

縁もゆかりも、無い以下に無い。弛温ノ領へ。

片乙は、静かに暮らしたい。

ゆっくり暮らせれば、それでいい。

何者かの「陰謀」か、あるいは「意図」か。

最後の死地、弛温ノ領。

「奈落」へと進む。

○ 何処とも不明な一室にて

黒社 『そろそろ尽き刺せるか、招け』

配下 『こちらへ？』

黒社 『オウ』

配下 『片乙が冷寒を離れ、ここに来るようです』

黒社 『もてなしてやれ』

大勢 『アハハハハ』

大勢 『クックック、フハハハハ』

人間の体には、苦勞、苦しみ、苦痛を収めておくバケツがある。

「苦勞の類」を溜め込む、バケツだ。

バケツに溜まった、中身、

苦勞、苦しみ、苦痛は、分子が外れるように、少しずつ、少しずつ、蒸発する。

自殺は考えなかったのか？

もちろん考えた。

ご覧の通りだ。

実際に手拭いで自らの首を絞めたこともあるが、

咳や痰が出てきた段階あたりで、苦しみ、苦痛を感じ、手拭いを外していた。

自殺するにも、苦勞、苦しみ、苦痛、「苦勞の類」がある。

バケツは、すでに満タン。あるいは溢れているのだ。

首を絞めるも、飛び降りるも、己が身に刃を刺すのも、苦しい、苦痛だよね。

自殺をする分の、苦勞、苦しみ、苦痛を収められるバケツの容量は、なかった。

すでにバケツが満タン以上になっている以上、

自殺という苦勞、苦しみ、苦痛は、もはやバケツに収まらないのだ。

私は自殺をするくらいなら、他殺のほうがまだ理解してあげられる。

芸能人の自殺ニュースがたまにあったが、

十分な生活水準があるからこそ、バケツの容量にも、余裕があつてしまったのか、とも思う。

「苦勞類バケツ」が満タンであれば、私のように、自殺はできない。

自殺をするくらいなら、ゲームに逃げてこいと思う。

自殺するところまで陥ってしまったなら、貴方は十分に頑張つてこられたはず。

借金してでも、自己破産してでも、逃げてこいと思う。

私こそ世界一の苦勞人。

苦勞を語らせれば、私の右に出る者はいない。

高校頃にやっていたゲーム、古いコンテンツ、初見、「苦勞人」だった。筋金入りだ。

「苦勞」と「努力」の差は、難しいと感じている。

大変な思いをする。という意味では、苦勞も努力も同じだ。

「苦勞」に比例した金が集まる、「努力」に応じた給料の上がる世界線であれば、私はレジェンド長者だろう。

ところが現実には、歪みこそ、正常となるようだ。

うたた寝誘う快適空調の中、そこに居座るだけで、毎月80万円の給料があつたり、骨を折り目眩のなか無理矢理全集中、熱中症も当然なほどで、毎月7万円の給料しかなかったり、

苦勞バランスの、歪み。

◇ 苦勞を知れ

苦勞を知らない連中が、社会を動かすな。

差になる。

苦勞を知らない連中が、人の上となり他人を扱うな。

差になる。

苦勞を知らない連中が、基準になるな。

差になる。

政治屋などは言うまでもない。

社長、何故か位置している部長、課長、常務取締役、会長、これら類する上流階級。

苦勞つてやつを、知ってるかい？

行きすぎた上流階級を、

最下層が手に持つ、「苦勞ハンマー」で、叩たたき落とす。

それを怖れているから、防犯などのセキュリティなども、アレコレと拵えてるんだろう。

知ってるよ、他人の苦勞でしょ。我が身のように、もちろん知ってる。

ドラマ、漫画、バラエティニュースでも報道されてる。
本も見てる。

「DANDY」「WOMAN」「楽なダイエット」「漫画にならない漫画」「現代の辞典」
「スカツとする本」「暮しを豊かに」「どえらいなあ」「公式資料集」「A」「B」「C」

膨大な書庫。

買っただけ。買ったわ買った本、本本本本本。
もちろん物欲を満たすことも大事なこと。

百冊、数百冊、数千冊、

あらゆる見聞を積み重ねてきた、

これら無数の知識が頭に入ってるんだから、当然他人の苦勞話も知っている。

なにも見ていない。

知った気がするだけ。

見えたとしても、陳列されている本背だけ。

どんな本を持つてるの？

「エー」、「ビー」、「シー」、本のタイトルだけは答えられるかも。

これも本。書籍。読みとばす読書のひとつ。あるいは暇つぶし。

ふーん。御大層な経歴もってるね。それで？

それに何の意味があるの？

貴方は扱えても、他人が扱うことは考慮されてるの？

何ができるの？ 何をしてきたの？

学歴はあっても、知識はあっても、実は何も知らない、名目だけの博識者。御大層様が集まるだけ集まって、結局、何も知らない。

知らない。お前らは知らない。

○ 弛温ノ領

沼地が盆々と侍り、流動しそうな連地を、境に延びる山々が繋ぎ止める地域。沼地、盆地、の境目がわからない淀んだ温暖の氣候。

埋め立てた市街を流れる淀んだ河川も、人々の営みの実情を示している。

気温は冷寒ノ地と比べると蒸し暑いが、氣候のそれは単なる地域の差。

さして問題ではない。

・・・雪が降らない地域なのは、住んでからわかった。雪がない、寂しさ。

サイコ口の出た目で決めたような、投げやりで決めた引越先ではあった。

ただ、水道がすぐに壊れる冷氣ではないため、補填の費用はかからない。

その一点においてだけは、過ぎしやすかった。

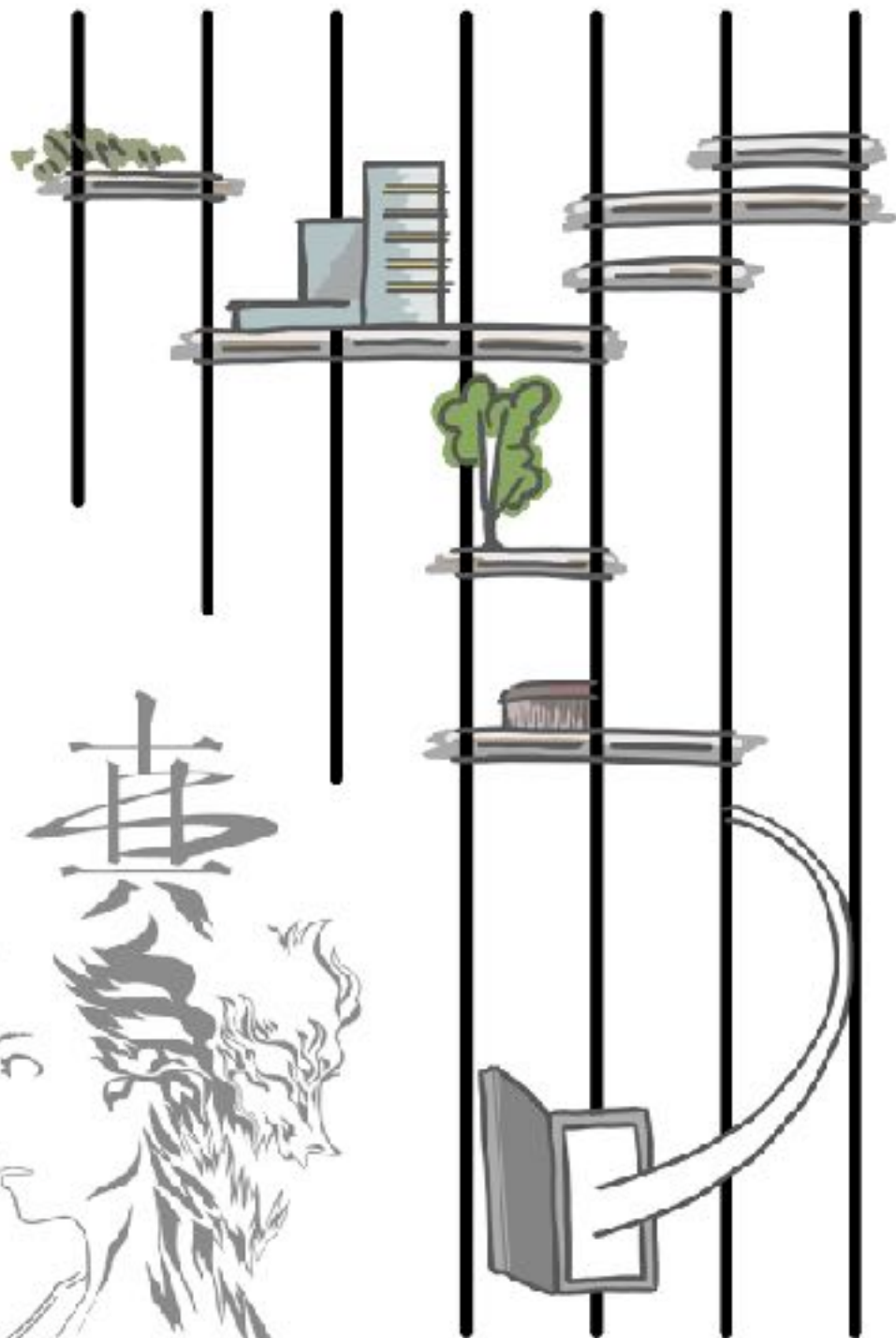
サイコ口の選択肢に、あるていどの温暖さがあることは重要だった。

少なくとも水道は、もう凍らない。

生活しやすいかもしれない。

あまり望んで転々と旅してきたわけではないが、一応は一日の長。

家も仕事も、割とスムーズに目星がついた。



○ 住居と仕事

冷寒ノ地よりもさらに、縁もゆかりもない地域、弛温ノ領。

とにかく家賃の安いところへ、駆け込んだアパート。

アパートの家賃は、冷寒ノ地のハズレ部屋も最低額だったが、さらにより安かった。

これまでの仕事の経緯を我ながら大変だったと振り返り、「膿」？、と考えたところで、手元にあるのはＴＶとゲーム。

パソコンは取っ掛かりも知らず、ちつとも扱えない。

部屋に籠もり続けるのも、だんだん暇になってくる。

地域を知る散歩ついで、

弛温ノ領への挨拶ついでに、ちよいと、出向きますかね。

アパートから歩いて通える近い立地に、資格を問わない仕事先がありそうだ。

給料もこれまでよりも高額な１３万くらいの基本額、おなじみ工場の仕事にありついた。

侶布工場。資格不問の、普通の、株式会社。

また工場？

選ばされている？

いやいや、そんなはずはない。推理小説じゃあるまいし。

それどころか、学ばされなかった？

意図的に無知にされているとしたら？

何者かに、意図的に、私が選ぶしかない仕事先へ、仕向けられているとしたら？

いやいや、妄想は得意だけど、さすがに妄想癖がすぎるか。

振り返ると、確かに出来ない。わからない。

凡人にすら出来ないほど、私に出来ることがまったくない。

いくらなんでも、こんなに差があるハズがない。

なにかが、おかしい。

まだ弛温ノ領に慣れてないけど、散歩ついでの面接ついで、たまたま訪ね出向く。

面接は、世間話すらもあつただろうか？

その日にその日、つーつーのかーかーの、素通りと合格。

○ 侶布工場

似た名前の人物もいるが、この場合の侶布とは、布を伴侶にするという意味の、マットやシーツなどのクリーニング工場だった。面接から初日、配属フロアに案内される。

○ 黒社

傀儡『明日カラノ子デス』

黒社『お前か』

この人が私が新たに勤める工場、その上司。

まるで、プロレスラーや相撲の関取、いやむしろ、それよりも大きい体格に感じる。似た体型、先生、エラ張り、大食漢もいたが、比べものにならない。

2m以上か？、身長も高いため、そこに居るだけで見下ろされる位置関係になる。

髪は大仏みたいなパンチパーマ、ゴテゴテのヤクザパーマとも揶揄できる。

なにもしていないのに、圧を感じる。そこにいるだけで、圧倒される。

なんだろう？

周りの空気が張り詰めつつも、生温い蒸し暑さが絡むようにも拡がる。
一目見ただけで、
いってしまえば、そう、

「怖い」

私が黒社を怖いと認識した瞬間、警戒信号は身体中を伝達する。
警戒と同時に、萎縮する。

「こいつは、違っ、違っ、」

怖さが実態をもち、それに丸飲みにされるかのようだ。

変に緊張する。

この黒社を、まともに、見れない。

呂布工場は、

これまで工場は3種類見てきたけど、どことも違う雰囲気があった。

○ 取り巻きヤクザ

黒社の取り巻きは数名、いつものメンバー。

黒社の2歩半後ろにつき、脇を固める。

その様子は黒社を中核とした、要塞のようにも見えた。

太鼓持ちは、隣にしっかり張り付く、天然パーマのちぢれ毛、そこそこの長髪、アニメキャラなんかになると、そこそこのイケメンキャラだろう。

ゴマ擦りも、逆隣に付ける。普段日常から黒社とつるみ、近くにいる1人だ。

アニメキャラなんかになると、縁の下のホストキャラだろう。

面接相手だった傀儡は、黒社と同じ課長に位置するが、力関係は見るまでもない。

さらに数名、

髪はオイルを被り、靴は尖った蛇皮、角出張っぱなし角剃スーツ、もれなく反り腰。

椅子の背もたれも反り腰、ギシギシ鳴く、

「ヤクザ組から出張ってきました」

と言われれば納得できる風貌、オーラが雰囲気か態度が、もう完全にヤクザ。私にも反社思考はあったが、あれは恨みの仕返し妄想。こいつらは本物の反社か？

○ 生活の数字

ヤクザだ反社だっばい雰囲気のある会社ではあった。

ただ、
数字の条件だけは良かった。

初期工場以来しばらく、初期工場と同じくらいの給料手取れる金額が戻ってきた。家賃も安くなっている。

31歳片乙、ようやく辿り着いた仕事と生活、とも思えた。

金銭面的には、誤差程度だとしても、これまでで一番良い条件だった。

○ 態度も図体も権力も強い

先述いつかも記したが、工場とは暑い。

さらにここは弛温ノ領、気候から生温く、ただでさえベトベトと蒸し暑い。

温風やら籠った熱気やらもベトベトと合成され、熱い粘土を纏っているかのようなうだ。重暑い。

工場蒸し焼きの内部にあっても、それが遮られている空間もある。

エアコンが効いている部屋だ。

なんならエアコンとして可能な限りの低温だ。

熱を遮るため重い扉のはずだが、軽そうに開いた。黒社が気まぐれで出てきたようだ。

黒社『あつつ』

黒社『まだやってんの長ッ、はよ長い』

それだけの言葉を捨てていくと、エアコン部屋に戻っていった。

この黒社は、なんで仕事しないんだ？

なにもしていないのに、

毎日、エアコン効いてる部屋で、

バフバフソファ、ゴロンとふんぞり、漫画を雑に千切っては捨てているだけ。

それなのに課長として地位になって、ふんぞり返っているのか？

それもただの課長ではない。

この呂布工場の中では、黒社の課長が権力存在、そのものになっている。

役職本来の位は関係がなく、

部長も社長も関係がなく、黒社は、あきらかにそれ以上の権力を持っている。

社長はいるが、黒社を主としたヤクザ連中の相手が務まるほどの強さはない。

黒社は私の上司どころではない。

この工場自体の、

最上位君臨者。

○ 黒社こそ中核

暇だからか、黒社は稀に作業場を歩武っていた。

以前はまともに見ることもできなかったが、

今度は警戒の薄皮バリアを気持ち張りながら、わざとらしくないように観察してみる。

姿は、遠目で見ていても、神社寺仏閣などにある仁王像の姿が重なり見える。

そう、まるで仁王像だ。

大きな殿寺門神社に鎮座、屈強な体躯をしている仁王像、

さらにそれよりも一回りも二回りも太く、強くしたかのような体躯だ。

1人の人間の放てる庄ではない、

あきらかに人間離れした、威圧感、脅威感。

それに、眼。

よく見るとナイフのような眼をしている。

太っているため上の瞼と下の隈、

どちらも縁取り太く、眼の瞼、上下脂肪にも押されて、余計細く尖れており、

鋭利なナイフのように、鋭い眼。

眼に刺されるだけで、胸に穴があきそうだ。

まっ黒な瞳孔。

眼に写るものにまるで興味がない色、あるいは否定の概念を色にしたかのような。

見る者見る物、無関心、

空き缶に向けるほどの、情の一边すらも感じられない。

乾いた、太い声、大きくないのに、重い声。

黒社は多くを話すタイプではなかったが、

先程のように、話すと短い言葉で周りに伝播する。

Aー音声のほうが、まだ抑揚がある。

声量は大きくないのに、短い言葉だけで、重くのしかかる。

黒社『古くから、知っている気はしないか』

あきらかに侶布工場からの初対面だけど、どこか同意できる気持ちの欠片もあった。

というか怖いから、「ハイそうですネ」、としか言えない。

ビリッと伝播。

黒社が現れると、ビリッ。

黒社に反応し、毎度まわりの空気が、ビリッと締まる。

黒社の姿が見えた途端、ビリッ、一瞬だ。

「ビリッ」と空気が変わるのが、わかる。

黒社の取り巻き連中であっても、

こいつから放たれる威圧感、脅威を感じ、

ある種の怯え、服従も含めて、従っている様子が見てとれる。

黒社以外の者は、すべて黒社のパシリ。

その中でも黒社に近い者は、多少おこぼれというか、蜜をすする。

黒社『金いらんなら別にええ』

だから言動に異常があったとしても、皆、黒社に黙って従っている。

やはり黒社が此処、侶布工場一帯の元締め、又シ、だな。



○ 黒社派閥のある日

ある日、

太鼓持『ハイツ、黒社サン』

太鼓持『黒社サンが走れゆうたら走れやあぁ道具があ』

太鼓持『お前なんてただの部品が、キリキリ走るための道具でしかねえだろがあ』

さすが太鼓持ち。

ヤレヤレいつものことと平常のゴマ擦り。

ある日、

黒社『XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX』

怒鳴った。

被害者は体験加入の高校生だったが、

見ているこちらまで、シメられる被害を感じる規模だ。

地面が地震かのように揺れる。崩れる瓦礫で怪我をしそうだ。

実際に地震は発生していない。

地面も割れていないが、まるで、無いはずのものが、有るように感じる、

ないはずのものが、起きる？、その衝撃が反物質を物体として見えるほど、その怒鳴りひとつで、衝撃を発生し、周囲に反物質をも見せる。

黒社『いつまでナガイ』

乾いた声で怒鳴りの周波数を収束させると、ゴトリと動き去っていった。いつまでかかっているんだ、長すぎる。と言いたいようだ。

ある日、

滑車付きの納屋がトレーラーの背から卸された。

工場から排出される産業廃棄物をまとめるための、家サイズほどある箱、納屋だ。四隅八隅に回る滑車があるといっても、それは家の重さだ。

今は中身があるから、それ以上だ。

測れる重さではない。

まして、人の手腕で押して、動くような代物ではない。

ふとした納屋の移動の用事。

黒社は、1人で、身体ひとつ、人の手腕だけで押して、ズシン、納屋位置を変えた。

人間にしては、剛力が過ぎる。

ある日、

タイムカードを一覧表のように眺め見る。

まだ人物と名前が一致することは少ないが、黒社の名前もある。

黒社強。

これがフルネームのようだ。

強さは名前に宿るというが、本当に強すぎる。名前の時点であらわれているじゃないか。黒社強。

その名前の通り、桁違いに強い。

強すぎる、と思う。

これだけ剛力に恵まれ、権力も取り巻きも加算され、強い黒社。

の割には、退屈そうにしている様子も、その雰囲気とともに、薄々感じていた。

強すぎる故の、退屈さ。

片乙にはそう見えていた。

ある日、

なんでもない仕事の隙間時間、移動にもならないくらいの移動、の拍子、黒社と隣に歩いた。

私は、恐怖を、悟られぬよう、普通を、平常心を、務めて、振る舞う。

黒社『お前のテンションわかったわオツカレ』

「・・・何がわかっただと？」

アンタに、わかる訳ないだろ。

私のこの30年が、アンタにわかる訳ないだろ。

一瞬だけとはいえ、珍しく恐怖と互角につりあうほど、対抗心が芽生えた。

黒社よ、アンタらは、

黒社を又シに、太鼓持ちとゴマ擦り、ここの一グループ、黒社派閥。

面倒なことは派閥以外の他人にやらせる。

私のこの30数年の経緯、テメエのような、ふんぞりデブに、わかる訳ないだろ。

だいたい、工場ってのはね、私のような根暗無口オタクのための仕事環境なのよ。

ムキムキに力溢れてやまないヤクザ崩れは、鳶でもやってるよ。

口しか動かない者は、芸人か屋台でピュヒャラやってるよ。

ふんぞり返るだけで、仕事はせず課長、

デカイ図体で周りを怖がらせ支配する黒社に、
怒っていた。

なんとか一矢報いようにも、あの強さと権気。取り巻きも大勢いる。

たった1人で、

私以上の力を持っている者達を大勢相手にする。のか？

不意打ちで？ 一気に？

・・・・・怖気付く。

○ 割と近い不明な一室にて

配下 『最後、回しましょうか』

黒社 『おスソわけか』

黒社 『えっぐ』

黒社 『好きにアソベ』

配下 『あざっす』

その地位と能力は比例しない。

社長さん、坊ちゃん下り政治屋、皆が認め憧れるエリート、絶対かなわないと思う相手。

その実、

そいつも人間である以上、たいして難しいことはしていない。

元々、たまたま、ステータススペックが高かったため、そうなっている、だけ。

力ある者が、なにもしない。

権力ある者が、なにもしない。

能力ある者が、なにもしない。

絶対的な強さを持っているにもかかわらず、なにもしない。

やっているとしたら、その強さで、他者を貶めること、だけ。

能力に恵まれたのなら、仕え使い尽くせ。

影響力を持つ主軸へと捧げる奉仕者を周りに固め、己を益の象徴として誇示するか。

他者へと象徴誇示のため、己が欲の解消用に攻撃するためでなく、強さを、能力を、正しく使え。

痴れ者よ、

苦勞を知れ。

私と同じ「メ」に遭え。

私と同じステータススペックでな。

やってみろよ、奉仕者として仕えながら、貶められる側の経験を。

どんな思いをしているか、身を以って経験してみろよ。

どこまで耐えられるかな？

○ 異動

黒社『今日から2階だ』

突然の異動を伝えられた。

「え??」

せっかくやってきたのに、太鼓持ちとゴマ擦りがいたとしても、せっかくやってきたのに、2年3年と続けて、きたのに、

いろいろと能動的に仕事出来るようになってきた頃だったのに、全部なし?

丁寧に作り作り込んだものが、一瞬で崩れる感覚。

「え?」

「え?」

それならそれで、早く言ってよ。

今日の今朝、一言目に今言って、今すぐ異動? そんなことある?

というかこういう異動は、1ヶ月前からとか? 前もって言うもんじゃないの?

予兆もない、突然も突然、不意打ち異動。

30秒後、まったく別の人達、入ったこともない2階フロア異動に、急遽加入。予期してない。

心の準備？、知ったことではない。

自分の意思ない行動先、急に変わったフロア、急に心乱される。

○ 乱れる心境

心の整理がつかない。

心のタンスがバラバラになったまま、異動先の2階フロア、単に日数だけは進む。片乙の心境などつゆ知らず、内弁慶。

内弁慶はこの同時タイミングで、雑兵から昇格した2階フロアの中ボスだった。

念願の昇格が突然訪れた中ボスは、メンタルも最大充実している。

かたや、予兆もない変化にメンタル虚弱消沈の片乙、

メンタルの階級が段違いな者が近くにいた状況もまた、歪みが発生しやすくなる。

黒社に比べれば内弁慶など、ただの小物。

だがメンタルは最大限高まっている。鼻息も荒い。

片乙は準備もできず、

急に2階フロアに異することで消沈デバフが続いており、本来の動きができない。

中ボスが昇格祝いに弄ぶに、最適の対象になる、片乙。

中ボスにとって、気持ちいい苛めの対象となる、片乙。

中ボスがその他雑兵を雑に扱う、ここ2階フロアに来た、片乙。

中ボスの雑兵にも取り囲まれ、鬱陶しい嫌がらせの数々に遭う、片乙。

中ボスも私をラクにいたぶれると思ったか、遠慮もなく節操もない。

中ボスらしく、吠え面だけはやかましい、

中ボスに位置し、半端にでかく見せる態度、耳障りな言葉を得意げに吐きに吐き、

片乙『黙れザコ、黙って仕事様に仕える』

ハンデはあるものの、どうにか、切先を示す。

弛温ノ領には下品な連中が多いな、まったく、

○ 静心つとめ

窓の外を遠い目で見る。

実際、遠くまで来た。

感慨もぼんやり眺め、よぎる思い、

私は、こんな仕事が、こんな生活が、したかったのか？

中ボス『チビ、どこも見てねーで、何ツツ立ってんださっさと運べやああ』

2階フロアが続き、数ヶ月経っただろうか？

歩武り先に訪れた、

黒社『ラクショーだったろ』

なにを言っているんだ、このデブは。

2階フロアの仕事も、たいしたことなかっただろ、と言いたいようだ。

見下し、うすら笑いを浮かべ、愉しんでいる？

いや、本題はそこじゃない。

○ 異動＋異動

黒社『布フロアに行け』

また？

このデブめ、従業員をなんだと思っているんだ。

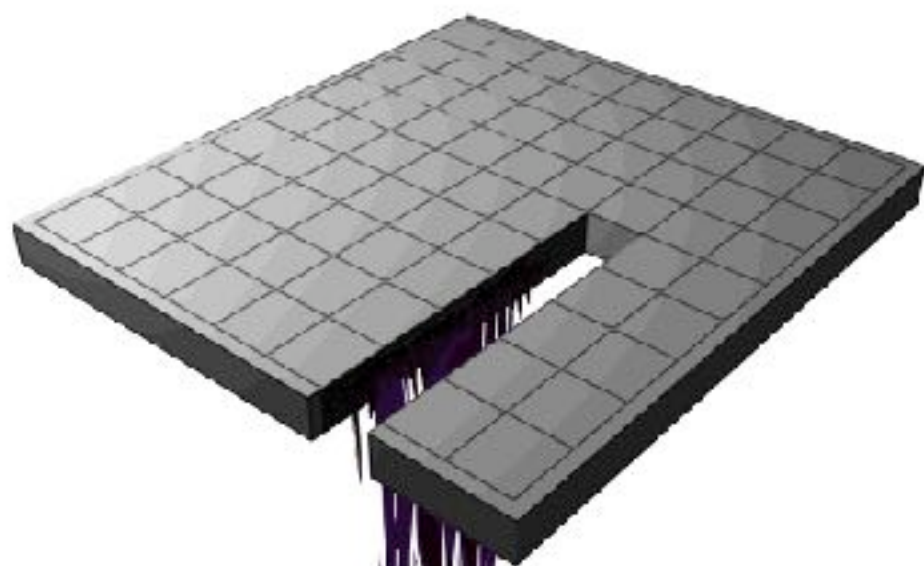
わかってたけど、ブラックだな。

思い返せば、あれも、あれも、そしてこれも。

私の役目とは、ブラック企業を修正して回る運命にでもなっているのか？

相手は会社だ。

会社ひとつ修正する度、我が身ごと人間爆弾、犠牲にしているのは、とても身が保たない。



芸人のいじり、

言い過ぎ冗談と回収、

暴言のタライ回し、

無視コント。

ゲーム、刃物を遠慮なく振り下ろすクリティカルヒット。

漫画やアニメの悪を討つ、素敵に盛った一撃。

これらは、エンターテイメントとして、成立しているんだよ。

エンターテイメントの範囲内で、成立しているんだよ。

現実で実際にやっちゃダメだ。

まして、素人が、やっちゃダメだ。

完璧な冗談。であれば、やってもいい。

だが、どうあると完璧な冗談といえる？

粗末な配慮で冗談言ったとて、おおかた行き過ぎた冗談になるだけだ。
人によって、物差しは異なる。

素人が、本人はただの、おふざけ、のつもりかもしれない。

相手も、同じエンタメを見ているとは、限らない。

相手に、そのニュアンスが通じるかは、わからない。

相手は、それを冗談と思うかも、わからない。

君も、相手も、素人だ。

普段の日常でやつちやダメだ。

○ 侶布工場内 同じ敷地 別の工場棟 布フロア

布フロア。

年増の婦人が多く配属されているフロアだ。

黒社及び取り巻きであっても、あまり進んで布フロアに来ようとはしない。

理由は明確、クソババアが多くいるためだ。

ひしめき合うフロアだった。

人間とは、性別年齢誰であれ、ある一定のパーソナルスペースを備えている。

○ パーソナルスペースとは

個人の身体からある一定の空間で、他人に侵入されると不快に思う領域の事を言います。

○ 布フロア

ひしめき合う事が、さも当然、さも常識、当たり前前に仕事する環境となっている。

ここ布フロアには、パーソナルスペースがない。

ぎゅうぎゅうに箱詰め出荷、屠殺行き箱詰め家畜に例えるとイメージし易いだろうか？

誰かと私、誰かと誰か、私と誰か、常に近い。

20cm?、10cm?、体感的にはもっと近い。

物理的に、人間と人間の立ち位置が、どうしても近い。

8時間から残業早出込みで、実働10時間。時にはオーバー、その長時間、常時、人間と人間の立ち位置が、どうしても近い。

他人も私も、関係なく、くっついていてる。

パーソナルスペースという言葉など、布フロアには存在しない。

パーソナルスペース?、概念など、ハナツから気にも入らない。

暑苦しい粘土のような空気、

そのうえパーソナルスペースもない。

呂布工場の1階2階にも増して、劣悪環境だった。

黒社にとっては、箱詰め環境だろうと、黒社個人には一切影響もなく、なんとも思わない。

黒社本人は空調部屋でふんぞっていいばいい。あとやっとけや、道具以下連中。

○ 婦人の班長

黒社から傀儡へ、傀儡から婦人へ。

媚びたのだろう。

婦人は大抵口が回る。

言葉を回すケイデンスだけは達者だ。

年齢を重ねた婦人の口は、さらに高速回転する。口と声を回すだけであれば、よく動く。布フロアの暑い現場から離れ、事務所エアコンで世間話という報連相をしていた婦人を、よく連絡して仕事もできる有望人材として、班長にしていたようだ。

男性でありながら、ババア集団に同調している人物もいた。

多くの年増婦人とは別の性別の、年増具合は同じほど、1人の男が混ざっている。

外道ジジイ。

ババアの口撃マシンガンが、外道ジジイも口撃マシンガンも混ざり、ぎゃあギャアと、

それはそれは下品で下品で、うるさかった。

そうだ、ババア集団に加え、ババア班長とも混ざるな危険、外道ジジイも混ざっていた。

○ 土足で踏み込む当たり前

外道『なんかオモロいこといえやあ』

プロの芸人にも、こんなフリは禁手だ。

私は素人だ。できるわけがない。

婦人たち、化粧はしているようだが、ゴキブリのような目だ。

どう足掻いても、パーソナルスペースがない。

常に体内、呼吸、息遣いのひとつひとつ、体内プライベートを覗かれているようで、不愉快すぎる。

これは私以外は、パーソナルスペースがないことに、抵抗はないのか？

違う？

私のパーソナルスペースだけが異端なんだ。

このババア共は、複数体でひとつのパーソナルスペースとなっている。

複数人が集まり肥大化したパーソナルスペース、1個のパーソナル範囲体。

その中にひとつだけ、片乙という毛色の違う要素があるものだから、いわば体内に侵入した不快な病を追い出そうと、

私は、ババア合体パーソナルスペースに居る病原体かのごとく、認識される。抵抗すると、なおのこと、不快な病色は濃くなる。

私が足搔けば足搔くだけ、私の首が絞まる。

苛め。

ターゲットロックオン。

その伝播は光回線よりも速く、片乙以外の者達の共通認識として、完全一致する。ババアパーソナルグループコミュニティハイスピードネットワーク。

苛められる奴は、片乙。

苛めていい弱者は、片乙。

刻印。まただ。また覚えのある、羽交い締め感。

絶対に消えない刻印が刻まれた。

一度刻まれると、もう変わらない。

変わろうと足搔けば足搔くほどになお、刻印はさらに濃く深く現れるだけ。だが抵抗しないと、足搔かないと、私が無くなる矛盾。

ババア目線でいえば、ババア感覚こそが、ババアの普遍的一般であり、常識なのだろう。その中で私だけが、異分子になる状況となってしまった。

そういえば似ている。

あの蒸発した男も、家内という「輪」で異分子となっていた。血は争えない。家庭内か、侶布工場内か、「輪」は違えど、まるで同じ状況。

呼吸ができない。

いや、できないことはないが、吸う酸素は、妖怪の毒素。

私の状態も、いいはずが無い。

ババアにとっては、自分の感情が最優先、感情を自制する栓など、あるわけではない。自分の言葉が最優先、言って良いこと悪いこと、判断の頭？、あるわけではない。

他人のタイミングなど、配慮の欠片もない。

配慮だあ？、ババアにはその概念すらない。

○ 閉じられた箱

侶布工場という工場。

工場という、工場とは、見えない箱、閉じられた空間。

ここは外には見えない。

工場内部は、外に見えない。

ここでは、弛温ノ領に内包していた下品さを、隠す必要もない。

下品、下品、下品、

下品の、下品による、下品のための、工場、箱、内部。

見えないバシないであれば、他所行きの所作な自制すら、機能しなくなる。

己が欲の赴くままに、何をやってもいい。

やりたい放題だ。



○ 効率？ そんなモン無い

不自由な動きしかできないが、仕事の行動をしよう。

例えば空間認識、例えば作業ひとつに要する客観的所要時間、そして効率。

これらがババアにはわからない。

わからなくてもそこはババア、口だけは無限に回転している。

そんなババアを、一区域布フロアの、班長的立ち位置に、据えている、この人事も腐ってる。

仕事のイロハを、効率のイロハを、知らないババアが、布フロア班長リーダーだ。

班長ババアを畏れる雑他ババアも、仕事できるわけがない。

効率を知らないババア。

仕事の動き、仕事の動線が見えないババア。

ババアのペースでストップ＆ゴーってね、疲れる。もののすごい疲れるのよ。

そして、

うるさい有るわ、効率無いわで、振り回されるだけ、もののすごい頭にくる。

ゲームをやっていると、他どんな作業であれ、ある程度の応用、効率は自然と思いつく。さらに私は他工場経験もあり、

「こうした方が楽なのに」という動線が見えていた。

この現状、「むしろ大変な方法で仕事しているよ」、と冷静に諭す。

新入り班員の私が「こうだよ」と、子供に言い聞かせるように言っただけでも、相変わらず私が何を言っているのかも理解できないババア。

どこをどう解釈したのか、自らの班長地位を乗っ取られるかと、

「こうだよ」を翻訳し、受けてしまったのかもしれない。

「こうだよ」の百倍千倍、的外れのババア口撃が跳ね返ってくるだけだ。

効率など皆無の作業内容。

ババアが集まり、ぎゃあギャア騒ぐだけの、女仕事。

ババア軍団が仕事の主導から変わることはない。

効率的仕事ができない、もどかしさ。

○ ババア軍団

ババアは、ババア同族との集団心理が、かなり優先的位置付けだ。

何かと、何をするにも、何ごとも、

くつついて、数人で、集団で、磁石かと集まって、動きよる。

よって、たかって、事あるごとに、また寄って集って、

軽い布一枚持ち運ぶのにも、ババアの手が6本8本と、布一枚に繋がり持ち運んでいる。
どえれえ効率悪い。

効率悪い分を、私にシワ寄せがくる。

ババアはなぜこんなに仕事が進まないのか、わからず、苛立っている。

仕事を追われてくると不機嫌になり、異分子の私が悪いと騒ぎ、ぎゃあギャア。

ババア自ら仕事を遅くしているんだ。

自覚がないババアには、本当頭にくる。

布一枚を持つことなど、人間1人、手は2本あれば十分だ。

ババア集団は、そこに効率がどうかは関係ないし、考えもしない。

効率など考えないし、発想もない、人間の考える頭が、妖怪ババアには、無いのだ。

多重時間を使って全遠回り、物忘れしながら、それがババアの言う、出来てる仕事。この全遅れを、私が全力バーするのか？

異分子であり、不自由なまま？

なんとか仕事を進めようと、孤軍奮闘の私。

外道『正義の味方あ正義の味方取りいダアああギャラララ』

『ギャラララ・・・・』と笑い声。

けたたましい。

下品をそのままに丸出しだ。下品な妖怪と外道に、効率という知能は存在しない。

ババアに我慢という言葉はない。我先にと、でしゃばる。

ババア軍団。

そう、これはもはや軍だ。

ババア軍団と揶揄しても、それほど間違いではないだろう。

ババアのパーソナルブロックの中に入ってきた片乙は、たとえ真実正論だろうと、ババア軍団にとっては、病原細胞。

○ サンドバッグ

私は共に仕事するメンバーではなく、放り込まれた生贄。

ババア個人、それぞれのストレス払いのための、人形。

年増になった更年期のストレス解消のためにも、片乙サンドバッグをお使いください。

「片乙はストレス解消用サンドバッグ、どうぞ好きに八つ当たりしてください」

ババアが複数人の軍団で襲いかかってきている。

そうだ、気は進まんけど、アイツの真似して気を避けるか、なるべく目立たないように、

これまでの経験を駆使して、どうにか自分を保とうとするも、

そこはババア軍団包囲網、逃げ場がない。

ババア1人とは複数人であり、パーソナル範囲体、

ひとつの言葉がエコーのように何度も響く。

ひとつの四肢から同じカビ生えた手足が2〜3本と、連ね生えてくる。

斜めに傾いた鎖骨、胸鎖関節からはチヂれた頭も数頭、連ね生えてくる。

気色悪い。

形は人だが、人ではない。

幻覚とも違う、はつきり居る、禍々しいケダモノ、妖怪。

混ぜるな危険の外道が、火に油を注ぐ。

ゲームであれば、

見向きもほどほどに処理される、汚物系ザコモンスター、と例えるのも失礼だ。

だがこの現実においては、剣で真つ二つにすることもできない。

犯罪になってしまう。

犯罪をすることなく、この恨みを仕返する方法があれば、、、、と模索するも、それは細胞もなく人間を産むような話。どうしても出来ない。

どんな妖怪だったか？

呪いの疫病霊、絵の具口唇、脳に寄生虫飼ってるキチガイ、性根腐ったヒョ口枝、朝一の第一声から、うるるせえし、大変だし、

妖怪に囲まれている片乙は、人間の生活ができなくなっていた。

○ 唯一の人間

ほとんどは妖怪外道ひしめく布フロアのなか、唯一の人間、若人がいた。

妖怪外道がはびこるなか、たった1人の人間だった。

若人は、相対的に、とてもステキに見えた。

この若人は、妖怪外道も人間の年増として認識し、健気に介護していた。
若人の己が身を削る、危険な健気さに思えた。

唯一の若人も、だんだん妖怪へと染まる様子が、いたたまれない。

片乙『若人、なにか手伝うか？』

といっても私は妖怪外道用の木偶で精一杯。

あまり仕事本筋で手伝えることはなかった。

私の言葉は若人にも響かなかったが、なんとか妖怪化を阻止したかった。

言葉さえ届けば、

片乙34歳、この若人はやっと一般的とされる仕事仲間になるかも？
そんな淡い期待もあった。

若人を手伝ってあげたい。手伝ってあげたかった。

この理由が狂気の布フロアでも、すぐに辞めなかった理由のひとつ。

○ 口車だけは達者だ

まともな仕事手がない。いるのはスピーカーだけ。

妖怪『よっ若大将、ヨッ、ワカダイシヨウ』

そんな口車、反応を愉しむだけの、おだて文句と、察せそうなものだ。
気が狂ってきている私には、耐性なども剥がされていた。

妖怪『あああ、アバラアア折れたああ』

仮病か？、からかいか？、嫌がらせか？、

ヒヨ口ヒヨ口に骨を細く伸ばした180cmの妖怪ババア、
布一枚持つくらいで、折れるわけがない。本当にアバラ折ってやろうか。

妖怪『はよお』妖怪『はよお』妖怪『はよお』妖怪『はよお』妖怪『はよお』

早くしろ。と言いたいようだ。

ババアは順番という言葉もない。

行けないんだ、前に詰まっているのもババアで、右も左も後も妖怪ババア詰め、
ついでに外道ジジイ詰め、行くに行けないんだ。

外道『親にいい勘当じゃれちゃんじゃろおおお』
違う。むしろ勘当するなら逆勘当。

ぎゃあギャア騒ぎに騒ぐだけ騒いで、肝心の仕事は、効率悪い。

仕事が進まないとか立っては、毒吐き、私が複数人の不満を肩代わりに味わうのか？
その苛立ちは、本当に仕事内容に由来する不満だけが噴き出ているのか？

どさくさ紛れて、家庭ゴミ等の不満も混ざってるんじゃないか？、バシてるぞ。

片乙『やかましい！、仕事しろ！』

ほとんど大声を発したことのない片乙、

その乾坤一擲の一言は、拡散する音波のように響き渡り、布フロア一帯を震わせた。
のも束の間、

若人『どんくさい』

妖怪のせせら笑いの隙間から放たれる確かな言葉の主は、若人。

鋭く、ガタツと意識を抉る。

アナウンサーよりも発音が良く、聞き取りやすい罵声をモ口に受けてしまった。

一方的とはいえ、期待していた若人本人からの、遮断する一言。実際に言われると、ショックを受けるものだ。

さらに追い討ち、決る一言、

外道『あああ、どんクセエわあああああ』

外道『どんクセエ言われてあダメだああ』

外道『ああどんクセエああドン臭えへええどんクセエああドン臭えへええどんクセエ』
外道には殺意をもって、「コイツ許さん氣」が沸く。外道から先に殺そうかな。

外道『おおめえええ不幸だあなああああ』

普通、他人の、隣の芝は青く見えるものだ。

それを最初から他人から見ても、まして外道から見ても、

「不幸だな」という印象になるということは、私は、
よっぽどなのか、

生活の、数字だけでいう、誤差程度だとしても、
金銭面的にこれまでで一番良い条件、
は、変わっていない。

だがその実情は、これまでで最も悲惨なのではないか？

希望を持たせて、墮とす。

希望とエサを間近に見せておいて、手が届かない。

実際はどんどん遠ざかっている、呪われた幻。

抱くはずの希望そのものに、蹴墮とされる。

いわば反転希望。

外道『オメエの負けだ』

外道ジジイの口から発せられる「オメエの負けだ」は、発音こそ「負け」だったが、

その言葉の中身は、

「オメエは死ぬ」だった。

『どんくさい』『臭い』『不幸だな』『オメエの負けだ』『オメエは死ぬ』『使えねえ』

凶器のように発せられる言葉の数々、枷になる。妖怪パーソナルが、重量になる。

またともに、動けない。あまりに哀しく、せめて目を逸らす。

妖怪『ポケットと見てねーで手エ動かせやあああ』

妖怪『なんしてん、ハヨこんかい、ち違うんが、右い、違う左やがる、あぼげそれ違う』

この妖怪ババア、外道ジジイ、気色悪い圧迫を以って迫る軍団。
こいつらも黒社の取り巻きだな。

もう雰囲気でわかる。

嗤う、ババア、嗤う、ジジイ、

妖怪外道『ヒヒヒヒヒヒ』

外道妖怪『ホヒホヒホホホ』

妖怪外道『ケケケ』

外道妖怪『ヒヒヒヒヒヒ、オホホホホ、ホヒホヒホホホ、ケケケ、ケケケケケ、ヒヤヒヤ
ヒヤ、ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ、ヒッヒッヒッヒッ、ゲッゲッゲッゲッ、ケッケッケッ、ケ
ケケッ、ヒヒヒヒヒヒ、ホホホホホホホ、ケケケケケケケ』

もう完全に妖怪だ。

この工場内には、人がいない。

妖怪ババア共にとっては、

崇高な仕事をするのと、他者を苛めることは、Ⅱイコール。

苛めは自然。車を動かすためにアクセルを踏むことのように、至極、自然なこと。

ひよっとしたら、

苛めているという自覚もなく、

自分達が起こす崇高な仕事を日々営むため、必要な指導とさえ思っているかもしれない。そこに苛めているという、自己的な罪悪感すらないのだ。

だがババアが集まる暴走、集団心理も取り込む苛めの渦は、苛めの暴走は止まらない。

集団ストーカー犯罪、

監視、

嫌がらせ犯罪、

卑劣、

妖怪外道にとっては、これら人間の罪は、罪にらない。

そこに罪があるのに、私という被害者がいるのに、明確な証拠はない。

被害の怒りを恨みを暴力と示したところで、

この内情をわかってもらえる人は、この実情を理解してくれる人は、味方は、いない。

罪になるのは、私。

外道 『くっっさいのおお』

外道 『臭い』

外道 『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』

外道 『臭い臭い臭い』

外道 『ああまあ臭いのが来よった』

外道 『ああまあたたくっさいのおが来よったああ』

外道 『シッシッ』『シッヨボイ』『シヨボ』『シヨボイシヨボイシヨボイシヨボイ』

外道 『しぶといな』

外道 『ばっちい』『ああああああああああ汚い』『汚い』『汚い』『汚い』『汚い』

外道 『邪やん魔あ臭いのおおお』

外道 『まだインの、カエれ』

外道 『くっっさいのおお』

外道 『臭い』

外道 『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』

外道 『臭い臭い臭い』

外道 『ああまあ臭いのが来よった』

外道 『ほら、無理や、どけ』

外道 『は、情っかけねえ、臭いわ鈍臭いわ、なんでインの』

外道 『ああまあたかつつさいのおが来よったああ』

外道 『シツシツ』『シツヨボイ』『シヨボ』『シヨボイシヨボイシヨボイシヨボイ』

外道 『しぶといな』

外道 『ばっちい』『ああああああああああ汚い』『汚い』『汚い』『汚い』『汚い』

外道 『邪やん魔あ臭いのおおおお』

外道 『まだインの、カエれ』

外道 『くつつさいのおおお』

外道 『臭い』

外道 『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』『ああ臭い』

外道 『臭い臭い臭い』

外道 『ああまあた臭いのが来よった』

外道 『ああまあたかつつさいのおが来よったああ』

外道 『シツシツ』『シツヨボイ』『シヨボ』『シヨボイシヨボイシヨボイシヨボイ』

外道 『しぶといな』

外道 『ばっちい』『ああああああああああ汚い』『汚い』『汚い』『汚い』『汚い』

外道 『邪やん魔あ臭いのおおおお』

外道 『ほら、無理や、どけ』

外道 『は、情っかけねえ、臭いわ鈍臭いわ、なんでインの』

妖怪『ハヨおお』妖怪『ハヤくうう』妖怪『ハヨこいやあ』

妖怪『邪魔あ』妖怪『じやまあああ』

妖怪『どいて』妖怪『どおいてえええ』

妖怪『いけええええ』

妖怪『ちがあああう』『ちぢやあがあうゆうとるんやろげえええ』

妖怪『どこ行ってるんのこっちいい』

妖怪『しっつつこいわあああ』『しつぶとい』『キモチワルイ』

妖怪『おっそいわあ』妖怪『おっつぞいわあああ』

妖怪『若いのナあん動かんわああ』妖怪『若えの動くよおおらおら』『動かんのおおお』

妖怪『きったあない』妖怪『きったないわああええこれ』『キモつつあワッルイ』

妖怪『うちら乙女やからねええ、丁い寧いにねえええ』

妖怪『ハヨおお』妖怪『ハヤくうう』妖怪『ハヨこいやあ』

妖怪『邪魔あ』妖怪『じやまあああ』

妖怪『どいて』妖怪『どおいてえええ』

妖怪『いけええええ』

妖怪『どこ持ってた』『どこいっとながけ』『えぎやあああ邪魔やああ魔臭さいわああ』

妖怪『汚ったなああいわがああお前工え』

妖怪『ちがあああう』『ちぢやあがあうゆうとるんやろげえええ』

妖怪『どこ行ってるのこっちいい』

妖怪『しゅっつこいわああ』『しゅぶとい』『キモチワルイ』

妖怪『おっそいわあ』妖怪『おっつぞいわああ』

妖怪『若いのナあん動かんわああ』妖怪『若えの動くよおおらおら』『動かんのおおお』

妖怪『きったあない』妖怪『きったないわああええこれ』『キモつつあワツルイ』

妖怪『うちら乙女やからねええ、丁い寧いにねええ』

妖怪『ハヨおお』妖怪『ハヤくうう』妖怪『ハヨこいやあ』

妖怪『邪魔あ』妖怪『じやまあああ』

妖怪『どいて』妖怪『どおいてえええ』

妖怪『いけええええ』

妖怪『ちがあああう』『ちぢやあがあうゆうとるんやろげえええ』

妖怪『どこ行ってるのこっちいい』

妖怪『しゅっつこいわああ』『しゅぶとい』『キモチワルイ』

妖怪『おっそいわあ』妖怪『おっつぞいわああ』

妖怪『若いのナあん動かんわああ』妖怪『若えの動くよおおらおら』『動かんのおおお』

妖怪『どこ持ってた』『どこいっとながけ』『えぎやあああ邪やああ魔臭さいわああ』

妖怪『汚ったなああいわがああお前エえ』

妖怪『きったあない』妖怪『きったないわああええこれ』『キモつつあワツルイ』

外道『くっツさいのおお』妖怪『汚ったねえわあ』妖怪『汚ったねえわゆうとるやるげ』
妖怪『ハヨおお』妖怪『ハヤくうう』妖怪『ちがああう』外道『おっせえわどん臭いえわ』
妖怪『邪魔あ』妖怪『じやまああ』外道『女仕事が』外道『しょっぱい』外道『はあん』
外道『臭い』妖怪『動けやああ』妖怪『うちら乙女やからねええ、丁い寧いにねええ』
妖怪『どいて』妖怪『どおいてええ』外道『オラどけやとよドケや』外道『どけどん臭』
妖怪『いけえええ』妖怪『あれ殺しといて』妖怪『ドやって殺す』妖怪『ええよ殺りや』
外道『臭い臭い臭い』妖怪『じやま臭いなああ』妖怪『はよおおおぎいでええええ』
妖怪『ちがああああう』妖怪『ちがあぶううう』妖怪『ちがぶあああああああああ』
妖怪『どこ行つてんのこっちいい』外道『殺さんでえ』妖怪『いつ殺す』妖怪『いつ殺す』
外道『ああああ臭いのが来よった』妖怪『あれ殺しといていつ殺す』外道『殺さんで』
妖怪『しっつこいわああ』外道『おらこっちだがよ』外道『おお今日も臭っさいなあ』
妖怪『おっそいわあ』妖怪『おっつぞぞいわああ』外道『プププじゃかされとんかああ』
外道『まああたくっさいの来よったあ』妖怪『どけや邪やあ魔あ』妖怪『汚ったねえなあ』
妖怪『若いナあん動かんわああ』妖怪『若えの動くよおおらおら』外道『チンタラああ』
妖怪『きったあない』妖怪『きったないわああええこれ』外道『あああ臭い臭いああ臭い』
外道『邪やん魔あ臭いのおおお』妖怪『はよどこいっとおおん』妖怪『こっちやるげ』
外道『バっちいんのおお』『ダメだわオメエ』『ああまた臭え臭え』『シツシツよどけ』
妖怪『チガぶうが』『はよ殺しで』『みんなガバビビ乙女じゃでへえ』『どけや邪魔臭が』

外道『くっツさいのおお』妖怪『汚ったねえわあ』妖怪『汚ったねえわゆうとるやるげ』
妖怪『ハヨおお』妖怪『ハヤくうう』妖怪『ちがああう』外道『おっせえわどん臭いえわ』
妖怪『邪魔あ』妖怪『じやまああ』外道『女仕事が』外道『しょっぱい』外道『はあん』
外道『臭い』妖怪『動けやああ』妖怪『うちら乙女やからねええ、丁い寧いにねええ』
妖怪『どいて』妖怪『どおいてええ』外道『オラどけやとよドケや』外道『どけどん臭』
妖怪『いけえええ』妖怪『あれ殺しといて』妖怪『ドやって殺す』妖怪『ええよ殺りや』
外道『臭い臭い臭い』妖怪『じやま臭いなああ』妖怪『はよおおおぎいでええええ』
妖怪『ちがああああう』妖怪『ちががあぶうう』妖怪『ちがぶあああああああああ』
妖怪『どこ行つてんのこっちいい』外道『殺さんでえ』妖怪『いつ殺す』妖怪『いつ殺す』
外道『ああああ臭いのが来よった』妖怪『あれ殺しといていつ殺す』外道『殺さんで』
妖怪『しっつこいわああ』外道『おらこっぢだがよ』外道『おお今日も臭っさいなあ』
妖怪『おっそいわあ』妖怪『おっつぞぞいわああ』外道『プププじゃかされとんかああ』
外道『まああたくっさいの来よったあ』妖怪『どけや邪やあ魔あ』妖怪『汚ったねえなあ』
妖怪『若いナあん動かんわああ』妖怪『若えの動くよおおらおら』外道『チンタラああ』
妖怪『きったあない』妖怪『きったないわああええこれ』外道『あああ臭い臭いああ臭い』
外道『邪やん魔あ臭いのおおお』妖怪『はよどこいっとおおん』妖怪『こっちやるげ』
外道『バっちいんのおお』『ダメだわオメエ』『ああまた臭え臭え』『シツシツよどけ』
妖怪『チガぶうが』『はよ殺しで』『みんなガバビビ乙女じゃでへえ』『どけや邪魔臭が』

○ 布フロアとは人外魔境

ここは人間界ではない。人外魔境。

一般的な感覚を持つ人間は、迷ったとしても来るところではない。

よし。燃やそう。

侶布工場の1階、2階、布フロア、全部燃やそう。

絶対ブラック企業だ。

以前の平日製造所、鳶塗装屋、巨管工場のときも同じことを考えていたが、

今回は本気の真剣に燃やそう。

侶布工場を世界から消してしまおう。

今後、次世代の若者達が、たとえ間違っても、

ブラック企業侶布工場なんぞに加入しないよう、今こそ私が、消し炭にしてくれよう。
敷地面積は広いが、オイル爆弾も併用すれば、なんとか手際よく業火を回せるだろう。

火が回れば慌てて集まる黒社と取り巻き、

順にチェーンソーで首を刎ねれば、任務完了だ。

正義の業火と聖剣チェーンソーを携え、ブラック企業を潰した英雄に、私は成る。悲惨な光景だな。

私はいつ死んだのか？

その光景は、とても人の現世とは思えない。

ここは「奈落」

○ 洗脳

気が狂う、気が狂うと正常な判断ができなくなる。

哀しいかな、すでに狂いに侵食されている片乙、

正常な判断ができないから、逃げることもできないのだ。

ブラック企業から脱せない、不思議な心境という感覚がわかるだろうか？

洗脳。

いつから毒されていたかわからない、すでに私はブラック企業の毒素に洗脳されていた。

すぐに「辞めます」と言つて、さっさと退散すればいい。

が、それが出来ないから洗脳なのだ。

いつしか私は、侶布工場にて7年と長く勤めていた。

そうだ、「辞めます」ではない、燃やすんだろ。

ここまでコケにされて、誰が手放し「辞めます」だけで済ませてやるものか。

復讐の炎の大爆発、その時、お前らはどんな顔をするんだ？

「辞めます」と言うにしても、誰に言うんだ？、傀儡か？

傀儡はすぐに黒社を呼ぶ。

黒社は怖い、恐怖だ、ビクビクだ、何されるか、わからない。

単に黒社が怖くて「辞めます」と言えない恐怖もあった、

それに辞めると生活の数字もなくなる恐怖、

恐怖も洗脳を強固にする。

○ 私 は 犯 罪 者

妖怪ババアのまず小物1体、呪いの疫病霊、のあと、帰宅途中のアトをつけた。

除霊、じゃなくて暗殺を、あるいは家ごと燃やしてやろうという魂胆だ。

途中までで、見失った。

狭い道、迫る建屋の壁、複雑に絡まる暗色に押し潰され、死にそうなのはむしろ私、弛温ノ領、そのものさえも敵なのか？

また妖怪ババア。狂気こそ妖怪の糧。

妖怪 『バクダン、つくってんの』

妖怪 『銀行強盗は、いつすんの、いつバクダン、担いで、銀行イクノ？』

妖怪 『警察に日時言っというてあげるからああホラホラホラホラホラホラホラ』

妖怪 『ウチらあああ殺スううう？、う？、う？』

妖怪 『片乙、あんた外道殺されええよお、八三殺してアレええ』

妖怪 『はヨ、外道殺されえ』

妖怪 『外道殺せ、あの外道ホラホラ』

妖怪 『アンタ無理やわ、もイイ事無い、死んで来世にイかれ』

妖怪 『外道殺して、バクダン担いで銀行行って、ホラ終わる、死んで来世になられ』

妖怪 『ウチらああやめてえ、殺さないでれれヒッヒッケッケッ』

苛められている怒りからくる、復讐の殺意を見抜かれている。

その上で片乙を嘲笑い、

さらに片乙を追い詰めるセリフを知っている。

妖怪外道本人のストレスも加算された、罵声、罵倒は、ストレス発散とともに、逆側の対象、片乙の精神を抉る、片乙は重く追い詰められる。

こういう時に何を言えば、

さらに煽り追い詰めれるか、老獪らしく姑息手段を心得ている。

妖怪『誰かー殺されたー』

妖怪『アレ殺す？、ドレ殺す？、フヒヒひひ』

妖怪『真っ先に、片乙犯人あいつデスあいつデス殺した片乙あいつデスウウ』

妖怪『はい逮捕おおバイバイい』

こういう現実。

恨みを放ち、暴れたとて、

産まれたときから役が決まっていたかのように、私は気が狂った罪人になる。

最後の抵抗も、あっさり拘束され、復讐も失敗無期捕獲。

○ 追い出し部屋

妖怪の毒素に耐えられる者はいない。

ここは追い出し部屋。

妖怪パーソナルスペースどころではない、

侶布工場という「輪」そのものにいる、異物、それが私なのか？

自殺であれ、辞職であれ、異物を追い出せるのであれば、なんでもいい。

黒社め、デカイ図体のわりに、やってることは、みみっちいじゃないか。

この侶布工場として、黒社を絶対の要としていれば、この「輪」の中の文化を守る。守るに値する文化であれば、別にいい。

派閥という「輪」

見えない適正条件となる隠しステータスがあり、一致しない者が近づくと、自動ドアが閉まる。

どうあっても派閥に、「輪」に、入れない。

「輪」に、たまたま入った例外個体、私のような異分子がいると、その人は「膿」を一身に受け、苦しむことになる。

同じ「輪」にいる他者多数のために、犠牲になる異端が発生してしまう。

単に辞めるだけでは、私が犠牲をすすめるだけで話が終わる。

侶布工場の通常運転は変わらない。

それでは、

私の気が済まない。

逆恨みだとしても、恨みは恨み。

あの若人は、別に私の手伝いも、望んでいない。

だからどうしても侶布工場にしがみつくなければならないが、

かといって、絶対的強者の後盾もあり、「辞めます」とも言いにくい。

黒社の恐怖の前では、単語ひとつもまともに言えず、「や、ゝ、ゝ」と息が詰まる。

単に言うただけだとしても、

「辞める」と言う、あの気マズさ。「辞める」の気マズさ。

○ 是か否か

殺さない程度に思いつ切り暴れて、数年捕まればよかつただろうか？

4年5年刑期拘置所行き？

刑期に閉じ込めになったとしても、欲の赴くままに大暴れすればよかつただろうか？
周りにいるのはババアとジジイ。□だけは回るが所作はそうでもない。
本気で「その気」になれば、容易い氣もした。

でもなあ、

お前らをボコボコにするよりも、私にはやりたいゲームもあった。

M M O、ディリーログインスタンプのほうが大事だった。

捕まっては、ゲームができない。

捕まっては、この小説も書けない。

布フロアには度々、たまに？

黒社の男側派閥も仕事の手伝いの名目で加わる、1〜2時間ほどある。

効率が悪いためだ。

妖怪ババアを班長にしてる影響もあり、仕事が進んでいないためだ。

一日置きくらいに、黒社派閥に属する者たち、の数名、ときには頭数を揃えて、太鼓持ち、ゴマ擦り、内弁慶、同類のヤクザじみたアイツコイツ。

黒社と取り巻きだ。陣を組んで現れる様子は、やはり要塞。

妖怪 『あら黒社さん、ようそこ』

妖怪 『順調でございますわぁ〜お愉しみただけで幸いにありますうう』

妖怪と外道は黒社派閥に媚びている。

担当こそ別であっても、妖怪と外道も、黒社の派閥と確信した。

黒社を中核とした「輪」に、派閥と妖怪と外道、他も面々、

私だけが異分子の「輪」

口は、凶器。

言葉は、凶器。

口と言葉は、凶器。

口より発声させられる言の葉は、凶器。

包丁で刺した、バールでぶつ叩いた、ロープで絞殺した、人体の痕跡には、物理的に証拠が残る。

と違って、口言葉は証拠が残らない。

証拠がないため、殺人罪にならない。

罵声暴言で心に穴が空いたと訴えても、実際に胸に穴が空いているわけじゃない。

実際は、

口言葉は言霊として、実体の在る言霊として、
脳を貫く。胸を貫く。

言葉は、人を殺す。

口言葉は、凶器。

被害者が追い込まれ勝手に自殺したところで、それは自殺の自死だ。
と、法律さえも、そう判断する。

口撃、口言葉攻撃にて、被害者を貫いた加害者は、この件の話の蚊帳の外にもいない。

口撃、口言葉攻撃は罪ではなく、加害者もいない？

アイツが、

アイツが言葉で人を殺しておいて、

アイツが言葉で私を殺しておいて、アイツは罪にならないだと？

包丁で刺殺すと、殺人罪になる。

言葉で刺殺すと、殺人罪にならない？

そんなことがあつてたまるか。

アイツが人間を殺人したという、アイツという悪罪人がいるのに、

法律で裁く方法がないというのなら、

法律外で裁くしかあるまい。

◇ 言葉に言葉で対抗できるか？

口撃は対抗できない。

口が回る。

口が回らない。

口が回らない者は本当に口が回らないため、

口撃に対抗しようとすると、どうしても物理的攻撃、破壊的な反撃行動へと偏る。痕跡が残り、証拠のある犯罪者として、対抗は罪になる。

さて、

言葉による口撃は、罪にならない。

物理的攻撃は、罪になる。

口下手は、苦渋を注がれただけ、苦渋を飲むしかないのか？

○ アパート暮らし 近所の建屋

子供 『ピピピピイイイイギギヤヤアアああああ』

子供様 『ピピピピイイイイギギヤヤアピピギギギギヤヤアああアああアああアあ

ああアあああああピギヤピギヤピギヤピギヤピギヤピギヤピギヤアアアアア』

鳴り止むところを知らない。

子供 『ピピピピイイイイギギヤヤアアああああ』

狂犬様 『ぶばワキャンぴいいんぶびキキえんプパピわきやギャんピいいんキキえん』

子供様 『ピピピピイイイイギギヤヤアピピギギギギヤヤアああアああアああアあ

ああアあああああピギヤピギヤピギヤピギヤピギヤピギヤピギヤアアアアア』

もう、なに？

ガキのわめきだ。

まじで無理。

躰のない狂犬のわめきも混ざっている。

せめて自室にいるときくらい、静かにしてくれ。

仕事以外の時間帯、部屋にいるときも平穏ではなかった。

近所。

騒音問題。

非常に耳障りだ。

ものの2m〜3mの隣の家の窓から、また遠くは10m以上からも、音が反射、バンビン響いているのか、ひとつの家屋だけではない。

複数の近くの建屋に、いくつかの部屋に、ガキ持ち子持ち様がいる。

そして子育てに忙しく、躰まで手が回らない狂犬も。

宿地アパートとなる部屋を変えればいいだけだ？

生憎だが、幽霊アパートよりも高額な家賃を払えるほど、金銭の余裕はない。

引越しの体力も残ってないし、

引越し費用もけっこうな金額だ。

なんで騒音から逃げる側が金払う事になるんだ？

詳しい経緯は知らないが、推測、
うっかり産んどまって、男は逃げた。まるで誰かさんの出生とそっくりだ。
似たような境遇の女が集まった、
ママ友、ヤマンバママ友達の、長屋、建屋団地といったところか。
だとしても、うるさい。鬱陶しい。ハッキリ殺意を覚える。

○ 刺激

ただでさえ、
妖怪と外道と黒社をいなし、かいくぐる、やっとの思いで仕事をしているんだ。
ただでさえ、侶布工場連中への恨みだ殺意だを、どうにか、体内に閉じ込めているんだ。
もう増やさないでくれ、

もう、刺激しないでくれ、

・・・閉じれなくなる。

殺し、燃やし、大暴走するこの復讐衝動を、閉じれなくなる・・・



○ 騒音の発生源

こいつら建屋の子持ち様にとっては、それが当たり前。

子供を産み人間を増やしている子持ち様なのだから、大事に大事に。

この子供も将来税金を払うためのエサとして、大事に大事に。

ガキのわめきも狂犬のわめきも、子供と犬だから、当たり前。大事に大事に。

子供 『ピピピビイイイギギギヤヤアアああああ』

狂犬様 『ぷばワキャンぴいいんぷびキキえんプパピわきやギャんピイいんキキえん』

子供様 『ピピピビイイイギギギヤヤアピビギギギギヤヤアアああああアああアああ』

あアあアああああピィギヤピィギヤピィギヤピィギヤピィギヤピィギヤアアアアアア』

アパートや近い長屋建屋、

複雑に並ぶ窓や家壁は、音を反射反響させ、さらに拡張、音量アップ騒音となる。

隣の窓の部屋など、所詮他人。内情など、知ったことではない。

子持ち様の子育てとは、それはそれは、大変も大変なのだ。

子供様と子持ち様とを、社会すべてで支えサポートしないといけないのだ。ハッハッハ。

てゆうか子供て。

私にはパートナーがない。

私にはこの30と数年、この生涯年数、パートナーがいたこともない。

恋人との、キャッキヤとまゝ楽しい楽しいラブラブひと時の1秒も知らないのに、

それなのに、

愛の結晶たる子供のわめきだけは、騒音音波兵器、先行して聞かされるのか？

『恋人なゝし』『おまえゝ恋人なゝし』『恋人なゝし』『おまえゝ恋人なゝし』

『魅力なゝし』『おまえゝ価値なゝし』『才能なゝし』『おまえゝ幸運なゝし』

騒音迷惑マウント？

あまりにもじゃないか。

つゆ知らず。

聞かされる側としては、たまったものではない。

ここで発生する恨みの殺意が、騒音による殺人事件の発端。

○ どっちだ？

先の罪は、どっちだ？

X

「騒音の発生源か？

わめきを放置して、大事に大事に育て、

騒音など垂れ流し気にもしない子持ち様が悪いのか？」

X

「偶然隣にいて、殺意を抱いた独身が悪いのか？

騒音によって、迷惑を被り、迷惑を止めようと元を殺した者が、罪か？」

さあ、どっちだ？

卵が先か鶏が先か、みたいな話かもしれない。

どっちが被害者だ？、どっちが加害者だ？

答えてみる世間様。

○ 休みにならない休み

仕事は侶布工場だから？

形態だけは普通の工場だから？

月曜から金曜まで、仕事なんだろう？ 土曜日曜、休日なんだろう？

休日にも騒音でうるさいんだろ？

せつかくの休日にも、疲れが取れない。

休日に疲れを取るどころか、

疲れをさらに蓄積されたまま、月曜からまた仕事が始まる。

毎週だ。毎日だ。グルグル グルグル

怒りだ恨みだが、順調に、グルグルグルグル、グルグル増える。

子供とは、無関係なものにとっては、ただの騒音。

騒がけていない可愛いペット、バカ犬もだ。

ガキだか狂犬だか知らないが、騒音は騒音。クソ迷惑だ。

子供も騒がない馬鹿犬も、うるさい。

急に殺された？

なにを被害者面してんだ、騒音殺人事件、最初の加害者はお前らだろうが。

音波兵器。

迷惑。

騒音。

うるさい。殺せます。

うるさい。殺します。

胃も慢性的不調、吐き気もおし、

片乙は身体の芯底から、闇の不調に覆われていた。

イキすぎた騒音は、迷惑以上の犯罪だ。

110番、警察を呼び出し、「なんとかしてくれ」

アパート部屋前で、私と警察が顔を合わせても、わずかな数分、その間は、静かなものだ。警察は、現行犯の迷惑犯罪騒音を、目の当たりにしていない。

警察『・・・静かやけんどね、どの家？、ほんとか？、何言ってるのあんた？』

証拠がない。

現行犯もない。お流れ。

○ 下品

元々、弛温ノ領とは下品な土地柄らしい。

下品が平常だから、多少日夜うるさいのも平常。

下品にさらに「輪」をかけ、下品大好き文化が形成されている、弛温ノ領の一角。

侶布工場と、この近隣。

地域の波長から合わないところに、来てしまっていた。

かたや、仕事場。

ブラック企業だとしても、大事な税金の頭数のひとつ。

法に守られし、税金払う会社のひとつ。

黒社派閥、妖怪外道、暴言、苛め、わめき、騒音、重ねに重ね、重ねる、

黒社派閥、太鼓持ち、ゴマ擦り、内弁慶、妖怪ババア、外道ジジイ、

燃やし、殺し、燃やし、殺し、この恨みをおおおお

「ギヤアアアアアアアア」

同じ生き地獄を見せてやる

「燃やし、殺し、すべて破壊しろ、恨みのままに」

理性が、トブ・・・

吊るし、晒し、放置、放棄、

腐った頭から図体へ、カビが生え、腐り朽ちるまで、ああ悍ましい、オゾマ死い、

下品民らしく、ギヤアギヤア醜く鳴いてくれ、

うつるせえ、

下品だなあ、気んぼ持つち悪えいなあ、テメエ、クソ反吐か、

下品平常を超えた下品だなあ、下品民として、至極の下品を味わえて愉悦だろう、
餓鬼畜生の醜態を、

自覚しろ。

この恨ミ怨ミ惨殺意を、お前らは向けられている。

そんなこと起こるはずない。と思ってるだろ。

ほーら窓の裏、見テミ、じゅぐゾゴにヒヒヒひ、

ホーラ、白ー目、黒ー目、これ、なーあーニイー

○ 残る怪我

ボキン。

心当たりがないこともない、魔女の一撃。

自室の風呂上がりの拍子だった。

腰裏に激痛が走り、激痛にビクリし、痛い、心外の痛さ、立ってられない、激痛だった。あとから考えれば、

身体からの、なにかのメッセージだったかもしれないが、その時は激痛でなにも考えられない。

ギククリ腰だ。

これまでもギククリ腰は経験していたが、それらはミニミニギククリ程度だったと思える、今回のギククリ腰は、違っていた。

なにか、こう、身体が壊れ、限界を迎えているかのような、私の身体機能が、いよいよ止まり始めたような、

血も出ていない。骨折もしていない。

けれど、深く残る傷跡となった。

○ 否定の咳

「ゲホッゲホッゲホッゲホッ、ガハッ、ゲホゲホ、」

「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ、ハア、ハア、」

咳が止まらない。

いつから咳が出始めたか、咳が続いている期間がどれほどかわからない。

流行病など比べ物にならない、制御できず連発、吐き気も連鎖しつつ、頻発する咳。

それは病ではなかった。

私の身体が、此処を否定している咳だった。

私の身体が、

「此処にいてはダメ」、「侶布工場にいてはダメ」、「弛温ノ領にいてはダメ」、

私に警報を伝えている咳だった。

マスクをしながら、鈍い咳をしながら、息荒く、無理にでも仕事している片乙。

周りの妖怪と外道は、白い目で見ている。

味方はいるか？

孤独を気取っているつもりは、論外だ。

くつついた細胞、精子と卵子、男親、女親、両親、祖父、祖母、家族内、

同世代、同級生、先輩、後輩、若人、友達、先生、教師、

仕事、仕事場、同僚、上司、年増、新入り、ひとつの枠、グループ、

すれ違う人、パッと会う人、巡り会う人、仲間、

その地場、その社会、その人物達、

普通、一般的には、誰かしら、何かしら、仲間だったり、味方だったり、が近くにいる。

片乙には、

誰1人として、

味方がいなかった。

片乙も客観的になんとなくわかっているが、どうしようもない。

どこにすぎたとして、すべてハズレ、すべて否定、すべて拒否、すべて敵。

創作シナリオでは、ヒロインだったり、助っ人だったり、誰かしら味方がいるんですよ。
味方がいなかったら、どうなるの？

であれば、どうしようというのか？



片乙には人間の味方がいなかったと書いたけど、
例外的に、1人だけなら味方がいる。

作者だ。

○ 自問自答

辞めるのか？ 復讐するのか？

黒社の恐怖に絡まれ、辞めると言い出しにくい。

復讐するにも、どうやって？

黒社は図体がある。ブ厚い。

包丁で刺したところで、毛ほどの切り傷になるくらいだろう。

あるいはバールか？

足音そおっと、こっそり背後から、

後頭部を思い切り叩けば、素早く一撃で気絶させられるだろうか？

重いハンマーは、取り回しも遅くなるし、扱いにくいな。

チェーンソーで真っ二つにする気で掛ければ、あるいは？

要塞だ。あいつらは。

あいつらは常に取り巻きと共に、複数人数で動いている。

チェーンソーを振り回して、要塞ごとブツタ斬るつもりでかからないと、

躊躇せず、一発で仕留めないと、取り巻きごと大暴れするか？

黒社の首をチェーンソーで刎ねたところで、囲まれると厄介だ。

やはり工場を燃やして、混乱に乗じて各個撃破していけば、いけるか？

あまり派手にやると、近隣の関係ない人達も野次馬になる。

やっぱり囲まれる。

それもよくない。

夜か？、侶布工場は燃やせても、黒社派閥には手が出せなくなるのは、不完全であり、ヤキモキが残る。

○ 核？

侶布工場と近所の建屋長屋、同時に広範囲を消さないといけない。

近隣も隣構わず、うるさい過ぎる、下品すぎる。

侶布工場もこの近隣連中も、下品すぎる。

弛温ノ領はダメだ。下品すぎる。

核ブチ込み、消してしまえ。

凶国の核を買い上げてブチ込み、更地にしよう、すると私の部屋まで更地になる。できない。

ホームセンターにも核はない。

ちよつと大変だけど、仕方ないか、
ターゲットは大きい建物を複数棟、灯油と火を回すだけでも、大仕事だ。

核がないのであれば、隕石でもいい。

メテオ。

魔法陣詠唱。

あの腐ったブラック企業と、近隣のヤマンバ長屋を、消し飛ばす、メテオストライク。
2発いるな、MP大丈夫か？

○ 出来てしまう

脳梗塞ジジイのときも、髹塗装屋のときも、巨管工場のときもそうだった。

自殺の代わりに、心身を復讐に注げば、出来ていたかもしれない。

玄関の戸を蹴破り、この発情の向くままに大暴れ、凶気全開とともに武器を振り回せば、
いかほどか抵抗はされるかもしれないが、それをものともせず、出来てしまう。

本当に出来てしまう。

自分の内から湧き出る殺意が怖い。

戦慄、悪夢、唾棄すべき、壮絶、生き地獄、いくらそれらしい言葉を並べても足りない。

○ 出来てしまう？

出来てしまう。

ゲームを捨てるのであれば。

そうだ。私はゲームにこそ救われた。

あのゲームの彼女こそ、私の恩人。

仮に3年？、8年？、数年で済めばまだマシか、

死ぬまで死刑の拘置所に入ると、私は、もう、彼女に会えなくなる。

それはやだ。

だから頑なに、はっきりと犯罪は起こさなかった。

何があっても、犯罪を方法とした復讐をしない。を善。

とするのであれば、

「捨てるのはやだ」になる抛り所があるとセーフティになる。

だとしても、抵抗を続けるのも辛い。

私が犯罪者になるための包囲網が、社会世間の圧力で、強制的に仕立てられている。世間の仕向けの通り、私の激情にも抵抗をやめ、ヤケクソになって大暴れすると、すぐに捕まる、それも辛い。

ゲームするにも集中できない。

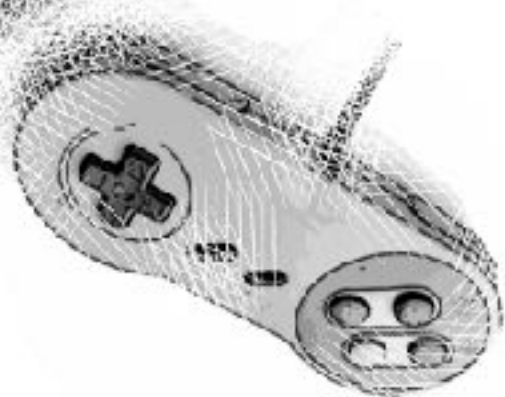
復讐が画面に写ったり、殺害対象の醜い顔も写る、わめきの騒音もうるさいやらで、全然自分のゲームプレイができない。

以前はたまに入ることができた、ゾーンプレイ。

全てを集中してゾーンに入り、ゲームする、楽しい気持ちいいプレイが、

私のゲームが、

できない。



真



○ 白八夕 降参

騒音をトリガーに、恨みを復讐をと化け、罪にならない犯罪を考える方法に仕返し、生かさず殺さずバキバキに痛めつけて枯れ死ぬ先まで、狂気を、グルグルグルグル、永遠に苦しめて、わからせてやる。

だんだんと復讐の色は濃くなり、「膿」を身体に閉じ込めながら、無理しながら、7年近くが過ぎていた。

心も、環境も、

静かな日は無かった。休日にも、休めない。

限界だった。

もうフラフラだ。

「・・・誰か、タオル、投げて、？・・・」

ふと思う。

誰か、タオルを投げてくれないかな？

ベニヤ板みたいな戸をバタンと開けて、「大丈夫か」と救急隊員、来てくれないかな？
例えばボクシングの試合だったら、もうタオルが投げ込まれている。

ストップ試合。

これは現実だ。

判定するレフェリーもいなければ、

咄嗟にタオルを投げて救助してくれるセコンドもない。

状況下で出来ることといえば、出来もしない妄想。

自分の理性と怒りの激情がまどろみ、限界だった。

○ 事務所裏部屋 面談イベント

相談。

侶布工場内開催、面談イベントと称して年に一度、年末頃、相談役との面談をする。普段の問題や悩み、ストレス、普段は言いにくいような話題なども打ち明け、相談するイベントだ。

この面談イベント自体は良いと思った。

各々の意見を取り入れていけば、工場内の仕事や雰囲気なども改善されていくだろう。その中身が問題だった。

相談役？ 黒社？ この人が？

自分以外はただの下僕と、常に宣っているような者が、仕事の相談役だと？

人の痛みを知らない奴が、相談役だと？

ふざけているのか？

人の抱えている悩み、その相談を受ける意味など、欠片もわからない人種だろうに。

相談役は2人。

申し訳にもならないが、隣に傀儡のバーコード頭もいる。

そもそも他人の話を聞く気すらあるのか？

ともあれこれは会社内の相談イベント。私の順番もやってきた。

○ 面談開始

傀儡『相談ヲ受ケル、ナニカ言イタイコトワ』

左黒目は左を向く、右黒目は右を向く、

焦点？ なにそれ、私を見る必要などない。傀儡だから。

私は普段の日々にて、妖怪さん外道さんの実態を、ノートに書き留めていた。

まさしくこの相談イベントで披露するためだ。

経緯を説明する。

妖怪さんと外道さんの仕事が、あまりにも効率が悪い、仕事の内容が酷い、

人事として配置しているのも課長だから、どうにかしてくれ、みたいなことを伝えた。

と、私は言葉を選んで傀儡に、そして隣の黒社にも訴えた。

下品な地域にある工場なんだから、そりゃ下品さ。地域感覚ごと、ひっくり返し、工場に充満する下品な雰囲気を変えよう、とさえ、思っていたかもしれない。

鼻で笑うまでもない。

片乙が何か言っている、程度だ。

私に発言権はないのか？

いや、私が何を言ったとて、何を訴えたとて、黒社と傀儡にして見れば、別に、一切不要。声は言葉は、聞こえ無い、片乙の発言は、そもそも必要無い。

私の言論、訴えが一通り済んだ頃、

傀儡『ミンナ君ノコトガ怖イト言ッテイル乱暴サレテモ困ルシ』

片乙が言うことを聞いてくれないと、前の順番にあったババアからの内容らしい、それを傀儡を通して逆訴えがあった。

私の目が怖いと、片乙が暴れそうだと、片乙を発端とする事件が起きそうだと。

さらには呂布工場とはなんの関係もないはずだが、

近所の子持ち様の気配さえもすら感じるとは、どういうことだ？

いくら根暗でも、自尊心を侵害されれば身を防ぐくらいの姿勢はする。

姿勢を態度と捉えられ、

言う事を聞かない、恐い奴とされていたみたいだ。

妖怪が生気を吸わせると言ってきたとて、聞けるわけがない。

そうだ、ババアは相手の自尊心を気にかけるような知性は持ち合わせていない。

が、傀儡は妖怪ババアの言っていたことが真実だと信じて疑っていない。

ババアの話だけを聞き入れて、別の相談相手の話は何を言ったところで無効となる。

とされるのは派閥そのものだ。

妖怪外道フロアでは、

ほとんどの時間帯、こいつらは普段そこにいないし、多くの日常を見てはいない、

その実態を、黒社も傀儡も知らないはずだ。

確かに妖怪は口だけは回る。

言伝だけを聞いて、それが真相だと信じられるほどの妖怪口車も、あったかもしれない。

一方向だけの言い分を聞き入れて、別の片方は最初から聞く気なんてない、

こんなの、仕事の相談イベントでも何でも無い。

相談イベントの結果、私の言葉は、どこにも届かず、妖怪からの逆訴えカウンター。

○ カモフラージュ

実は、侶布工場に勤めている期間7年ほど、毎年年に一度、面談イベントはあった。侶布工場に入ってすぐ黒社を怖いと感じ、萎縮し何も言えない私。

そんな1年目から、黒社を相談相手とした、この面談イベント。最初に思ったことがある。

「お前は人の相談を受ける奴じゃない」

黒社も傀儡も、他人の相談を受けられる人物ではない。

それが相談相手として、対面、ふんぞり、「話ヲキコウカ」だと？

この面談イベント自体、無理がある。

無理でしょ。

聖徳太子じゃあるまいし。

聖徳太子の逸話ですら、話を理解したのは10人くらいまでだ。

実際この逸話も眉唾ものだろう。

このイベントは逸話よりさらに多い、呂布工場にいる数十人の相談量だ。それを2人だけで全て聞き入れ、理解し、取り入れる？

ふんぞったデブと傀儡で？

無理だ。

ハリボテだ。

呂布工場にとって面談イベントとは。

優良企業に見せるためのカモフラージュ、

少なくとも普遍企業と誤魔化すための、仮初のカモフラージュ。

○ 法律による裁き

会社内の相談は相談になっていない。

であれば、法律的に訴えることも考え、法的事務所へと相談に赴いた。

仕事内の問題、近隣騒音の問題、

問題は2つあるが、まずはブラック企業の犯罪を、あかるみにすることからか。苛め、嫌がらせ、集団ストーカー犯罪、老害の介護。

これらの慰謝料、侶布工場を倒産させる勢いで、1億円をぶんどってやれば、納得いく判決にもなる。

結論から言うと、たいした話にはならなかった。

慰謝料もたいした額にはならず、なんなら準備する費用の方が多という話。

なにより証拠もなく、立証するのも難しいという話もあった。

裁判まで進めたとしても、たいした事案としては扱われない。

フンと鼻息。

判決確定。敗色濃厚。

法的時事へ訪れる相談者、

私だけでなく、こういう相談は度々ある様子。ところが、誰も彼も、
つい先記述の通りだ。

証拠なんて、あるわけない。

証拠？、証拠を示すとなると、どうやって？

毎日ヘッドギアに、目線カメラと、ボイスレコーダー装着して仕事しろってこと？
どんな仕事の格好だ？

それでもカメラに映らない悪質、ボイスに録入らない凶器があるぞ。

結局のところ、被害者にできることはなく、泣き寝入りするだけ。

○ 気晴らし

今日は気晴らしのショッピングだ。

何気なくブラつき、

何気なく商品棚を見回り、

陳列商品箱を手に取り、手に掴み、手が、指が、震える。

目の前だ、商品箱、在る箱が見えていない、ワシ掴み、震える。

眉間も自分の意思なく、震えている。

商品箱の代わりに目に写る、

グッチャグチャにしてやりたい奴の顔。あの顔、この顔、醜い顔。

こうなっては店内の軽快なメロディも、逆効果とヒヤカス。虚しさも怒りを助長する。

沸つ沸つ、沸つ沸つと、沸き立つ、

黒社派閥、太鼓持ち、ゴマ擦り、内弁慶、妖怪ババア、外道ジジイ、近所迷惑、騒音、殴り込み、擦り潰し、放火、全焼、ああ私の部屋まで巻き添えに、

燃やし、殺し、燃やし、殺し、この恨みをおおおお

「ギャアアアアアアア」

「燃やし、殺し、すべて破壊しろ、恨みのままに」

「ああんのクソクズどもにイイ、私の真実の力を魅せてやれ」

衝動の獣が目覚める。

息も荒い。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、」

荒い息に、絶え絶え、買い物客のそれではない。

もうショッピングどころではない。

何も目に写らない。

○ 剥がれない呪い

縁もゆかりもない地域に逃げてきてまで、人間関係を断とうとしてきた。転職も幾度移ってきた。

その度に結局は、苛めの対象となる。

どこまでいっても「陰謀」は？ 「膿」は？ 私に憑いてきた。
どうすればいいのか？

○ 本に教えを説く

悩める片乙、本のタイトル一文字にもすぎる。

- ・ 「私は上手くいかない病？」
- ・ 「人間関係のいなし」
- ・ 「気にしないバカ」

- ・ 「死ぬまえに逃げる」
- ・ 「生きづらい人へ処方箋」
- ・ 「敏感へ差し入れるオブラート」

それっぽい本を買い漁ったりもした。

書かれていることがすべて正しいようにも、その程度かと思うようにも感じた。

○ 作り話みたいな真実「凶」

あけましておめでとう。正月。元旦。初詣。おみくじ。

まさかね。

「凶」

「凶」

おみくじ「凶」

もう完全に「凶」

絶望感じる大当たり「凶」

○　ぐったり

その日の朝に、前兆はなかったように思う。

急に、エも言われぬ虚無を感じた私に、思考へ配れる理性はなかった。

万年床布団に、ぐったり

電話ピリリ着信、侶布工場、言いたいことはわかっている、応えてやる気力もなかった。

虚無を抱えて丸2日、ぐったり、

せめて、あとできることといえば、短い数文字の単語を発するだけ。

見切りをつけることだけ。

傀儡だとしても課長。役職としての銘だけなら黒社と同位、工場内でもそれなりだ。

短く傀儡に伝えて、さっさと去るつもりだった。

片乙『辞める』

傀儡は、すぐに大将へと連絡を入れる。まあ、想定済みだ。

また恐怖に飲まれぬよう、身体の表層各々へ、見えない防具の意識を巡らせる。

黒社『これからどうすんだ』

片乙『アンタに言う訳ないだろ』

「アンタに言う訳ないだろ」

この一言。

黒社は眉間にシワを寄せ、上眼瞼の下に濃い影ができる。黒社のビリツとした雰囲気。

むしろハッ、としたのは、発言した片乙自身。

口が滑ったとしか言えないかもしれない。

この一言は、私の意思ではないように感じた、というか、私の深いところの意思が、私の顔表皮、表層を超えて言った、一言。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード　―黒社の侶布工場―

片乙は、我慢強かった。

片乙の我慢強く、どんな環境であれ、ある程度は続けられる根気もアダとなっていた。

そうだった。

仕事というと、初期工場、遠足警備、平日製造所、鳶塗装屋、巨管工場、侶布工場、社会人生活が始まって19年で5回、移った仕事、
という転職数というと、少ないと言う者もいるだろう。

それは我慢強さによる回数の少なさでもあり、
逆に我慢強さが裏目に出たとも云える。

振り返る自己分析も含む経緯としては、
行き過ぎた我慢強さ。

ある意味で、他者よりも苦勞してこそその美学という、かつて中学時期にあった感覚も、
未だにどこかで残っていたのかもしれない。

「辞める前に復讐してから」

悶々とした気持ちはあつたとしても、結局できなかった。

辛い酷い扱いを受けている身はそのままに、

その日その日は、忠実な仕事として勤めていたことも、事実。

一般的には裸足かまわず逃げ出す環境だつたとしても、

片乙は、あるていどの環境順応が、出来ちまう。

愚かなほどに規格外の、我慢強さがあつたためだ。

我慢強さがアダとなり、結局は精神壊れるほどに続いてしまった。

一定の根気は必要だが、行き過ぎた我慢強さは危険だ。

ある意味、ここまでまともに読んでくれた読者も、我慢強い。

おや？　　と思ひ当たる読者は、

セルフメデイカルをしてもいい。

○ ジャリジャリと砂利道

やっと辞めれた、やっぱり辞めることになった。

以前の巨管工場は辞めて変な焦りがあったけど、今回の侶布工場においては、清々した。やっぱりこんなところ、加入してはいけない。

人気の無い山野裾野を、トボトボ、アテ無く歩く片乙。

以前は地域ごと脱出、逃げて流れてきて此処、弛温ノ領に居るわけだが、今の片乙に地域ごと移る余力はなかった。

いくつかの、仕事、工場が多かったけど、警備もしたし、鳶もした。

ことごとく、辞めて就いての、繰り返しだったなあ。

全部ハズレ。

結局燃やす殺すの犯罪を以って復讐しなかったのは、

ゲームができなくなるのは、やだから。

逆にゲームを取り上げられると、どうなるの？

「ぐああああ」と破壊衝動も度々、心身を蝕む発作として現れる。

恨みの「膿」を飲み込み閉じるのも辛い、かといって破壊決行も、辛い。

それはそうと、

38歳、使い捨てに退職金など無い。

残ったのは気苦労だけ。

これから、どうしようか、

さすがに懲りた。

もう工場仕事も無理だろう。耳馴染みのキーワードごと、もう、無しだ。

かといって、他にスキルも技術もない。

口クな打開策も浮かばない。

・・・少なくとも、「苛められ屋」は、引退だな・・・

○ ペース

アテなどないが、身体は散歩の連続動作。

片乙はドロドロ頭が微睡眠、本人は気付いてない。

無意識に行なっているこの連続動作とは、

無になって、ただ動くだけの徘徊とは、自然に動ける、自分のペース。

そのペースとは、久しく封じられていた、自分自身のペース。

忘れていたほど、自分自身のペースで動く、自分自身のための散歩となっていた。
本人にとって気持ちいい、自分のペース。

無で散歩する。

人間どうにもなくなると、これまでの経緯を振り返ったりも、しがち。

辛い記憶も多くあるが、最近の出来事は、もう十分。

本来の自分で動くことができる、理想的なペースとは、

ゆっくりと歩くペースとは、

これまでの忘れていた記憶も、呼び戻すことができた。

○ 記憶

・・・そうだった

小学生か、ぎり中学生までか、私は絵を描いていた。

趣味としての、ゲームの前身。

もちろん紙媒体だ。

ノートと鉛筆、色気付くとシャープペン、

手癖だけでコマを割り振り、漫画の真似事、

え？ 授業の中身に用はない。

流行の漫画の、アレコレを参考に似たキャラを描く、漫画のあの場面の、寄せ集め。

ビームを手から放ち、地を割り、サイボーグを敵から味方へ、真の敵は金装飾のマント、シャカシャカと芯を振り、土煙を表現、鉛筆芯の跡が、もう、

ストーリーに繋がりなんかなくても、本人の妄想力か、他漫画のパクリか、

同級生『漫画で、ふっ、片乙、子供か』

小学生のーQだ。昭和の小学生の、ーQだ。

おいこの時の同級生、見るな読むなよ漫画を、視聴するなよアニメを。

絵がつたないラクガキ漫画だったこともあるうが、子供のからかい、子供の冷やかし、片乙は子供心ながらに、モヤモヤした。

次第に絵も描かなくなっていた。

38歳、疲れ切った身体を誤魔化し繕って、どこへ無理矢理押しかけ、れないだろ、今から漫画家、目指すの？

あ、でもパソコン使えないや。まず、パソコン、要るかあ？

今ある記憶を全部持って、

子供の頃から「強くてニューゲーム」できたら、

私は漫画家になれてるのかな？

チャラリン。

急に始まる名場面。

幻覚こそが現実か？ 今目に見えてる現実とは、本当に其処に在るのか？
情緒不安定には、妄想など、呼吸より楽だ。

トタン実家、ピギヤア幼稚園、IQ小学校、水無し中学校、
末端高校、初期工場、遠足警備、平日製造所、鳶塗装屋、巨管工場、
侶布工場、
一同、処刑台に並べえ、
デスサイズ、一閃。

漫画であれば、その前の妄想であれば、できるんだけどなあ。

事あるごとに思い出す、インシデント。

エピソード ーサプライズー

砂利道は記憶の回廊。

無意識だとしても、身体を動かした分、歩いていた距離の分、疲労はたまる。散歩で記憶と会話した、行き先は、

○ 「膿」溜めの部屋

お化け屋敷にもダブる、アパート部屋、ベニヤ板みたいな戸を開け、帰宅。

ブン殴った穴あきの壁、塞がった窓、雑多なチラシ、黒カビ張付く便器、

白カビの窓際、虫湧く米箱、謎菌加工の茶碗、食中毒菌が出汁となるラーメン、

税金の集金封筒、NHKの集金訪問、

古い垢混ざる浴場、腐り朽ちる水道管、抜け毛の排水口皿、汚水で洗濯すすぐ衣類、

通れない水滴と水蒸気、床積みめの服、雨樋反響のフェンス、醤油染みた本、ゲロ染みた本、

線の切れた丸型蛍光灯、無料ダンボールのフル活用、拾い物のタオルや収納ボックス、

壁裏はネズミの秘密基地、外付け洗濯機、室外機がアパート棟ごとガタガタ稼働、

近くある地場一帯の「膿」が、小さな1Rに集約されているのではという、重い部屋。

哀愁しかない。

○ 私の居ない侶布工場

黒社『おい』

とも言わずにアゴ使い。だけで派閥面々に伝える。
集合の意味だ。

黒社『ハキ場』

配下『りょくかいです』

○ サプライズ着信

「ピ。ロン」 電話だ。

ほとんどあるだけだった携帯電話に、珍しく着信がある。

話手『もしもし、片乙さん、でしょうか？』

話手『わ私し、TMS社、引抜という者です、今お時間、よろしいでしょうか？』

話慣れしていそうな、透き通った声だ。

話手『急になんだと思わせてしまったこと、すみませんでした』

話手『多くの職場を経験されてきた片乙さんのこと、聞き及んでおります』

話手『大変な思いをされたり、片乙さんの経験とは、とても貴重なものであり』

話手『そういう人材は、どうしても、少なくなってきています』

話手『その能力を最適に発揮できる紹介先へと、この度連絡させていただきました』

話手『ぜひ片乙さんを歓迎と求める先があり、お迎えできればと、この縁となりました』

スカウト？、最適仕事？

話手『よろしくでは、弛温ノ駅前、コンビニにて落ち合います』

話手『車で会場に向かいます』

・・・まあ、

スカウトなんて、珍しい話、そう多くはない。

あわよくば、最適と言っていた。

急な話だけど、次の仕事先として、招かれている？、きっかけとか、人脈になるかも？
まあいいかと思った。

コンビニに来たのは大型車。

芸能人を送迎するような高級ワゴンだ。

秘密にしておきたいけど、いかようにしても存在感がある。

そんな車だ。

引抜『1時間くらいかと思いますが、行きましょうか』

TMS社、スーツで身なりの整った引抜という名刺を合わせ、合流。

名刺か。片乙と記された名刺を持って、仕事することもあったのだろうか。

それはそれで、大変そうだな。

車窓から見える、なごり桜。

○ 廃コンテナ置キ場

使い古されたコンテナは、錆だけを収納し、眺める鉄柱、鉄塔、鉄骨が所狭しと雑に建つ。剥がれた錆とは、刃か剣山か、のように突き出ている。

トゲトゲしく閉じられた空間を作っていた。

時刻は、

黄昏を過ぎ逢魔が時になるう、みるみる仕舞いに色変え、暗夜の闇色も相まって、周囲にあるのは視界を防ぐコンテナの山、くらいしかわからない。

引抜『あちらが、片乙さんの招き主えなります』

声が震えたように感じた引抜、とワゴン車は、私を降ろすと逃げるように去っていった。野外、

無機質なコンクリートと汐風、こんなところにスカウトに招かれ、いったいなにを、？、

配下『おおおう片乙さあん、こっちだハッ、ですよおおお』

向こう、みたいだ。

黒社『おう、出せ』

ドンッ。

「そういうことか」

あくまで私の妄想だった「陰謀」が顔を揃えて、その姿を見させている。

かつて逃げて脱走を繰り返し、さすがにもう会うことはないと思っていた奴らが、

「敵」が、揃いも揃っている、

ニヤニヤ、ニヤニヤ、

欲望を喫している人間の顔だ。

黒社『ザコにしては長かったほうか』

太鼓持『わりと長かったスね』

ゴンツと頭側部に衝撃、

顛顛の右はコンクリートの地面に、顛顛の左は靴の裏で押さえ付けられた。

不意に片足を失い、気を失いそうな痛さ、

両方の顛顛からプレス圧を受け、這いつくばる状況、

重い頭部を踏まれ、片足の激痛、

身体が、格段に効かない、

黒社『コイツはよオレらお傷つけることおずううつああと、考えていた』

ババア『えーこわいー』

妖怪がケツをふる仕草で、踊り戯け、媚び、黒社の発言に応えている。

太鼓持『で、できたんスカ』

私を見下ろす下品共。

妄想では何度でも復讐していた私、実際にできたのは、こうして這い蹲ることだけ。

運吸い『んー無理やわー』

先生『ギャハハハ』

筋肉『アハハ、アアアッハハハ』

外道『ギャララ、ギャララララ』

妖怪『ヒヒヒヒヤヒヤヒヤ、ヒヤッヒヤッヒヤッオホホホ、ホヒホヒホホケケ』

他派閥も腹をかかえての、大爆笑。

這い蹲り、涎と砂利の交換のように呼吸を、できているのか、ため息を大袈裟に、でも短く区切ったような呼吸となり、ランマーの振動のように短い呼吸が過呼吸を過ぎる。

どうする？、どうする？、どうしよう？、どうしよう？、

「れば、なけげ、逃れ、れ？」

「逃げなければ」すら、まともに文字が揃わない。

混乱が混乱の濁流、とどまらない奔流、決壊した混乱は、、

片乙『だずっ・・・げっ・・・って・・・』

「助けて・・・」と言おうとしたな、私は、

どこまでいっても、私はこいつらに縋り、命乞いするのか？　するしかないのか？

いよいよ巡る走馬灯。

仕事した、少なくなっていく給料の中、オバンを補助しながら、マイナス給料の中、不要な借金を返した、毎週土曜日遊んでやった、極寒を逃げのび、無心で仕事した、

派閥、妖怪外道、騒音、包囲網の中、なんとか耐え凌いだ、

私がどれだけ、どれだけ、

どこか無理があるのは常時当たり前、

身を粉にして働いてきたのに、

考えられる限りに手際良く勤めて、貢献した、

必死に仕事してたのに、そうは見えなかったとしても、

私を散々散々、苛め、苛め、苛め、苛め、悲慘に扱われてなお、苛めヌキられてなお、

こいつらに命乞いするのか？

怯える短い指で、どうしようというのか、何にもならないコンクリートを掴む、

黒社『ソレも取れ』

持ち込まれたのは、工業用に使い古され、錆びたギロチン切断機。

派閥の連中複数人が寄って集り、キヒキヒ、キヒキヒと薄ら笑いを浮かべながら、片手で、複数の人間数人が体重には、抵抗を、できない、

片乙『うぎゃあああああ あ あ あ あ ああああああ あ あ あ』

言葉にならない悲鳴。

血。血潮。血糊。

汗、涙、涎がとまらない。

どれだけ叫んだところで、不気味の掃き溜め廃コンテナ置き場になんて、誰も来ない。どこにも響かない。虚しく消えるだけ。

布が血を吸い、紅く染まる。

漆黒の闇夜には、どれだけ紅に染まろうと判別できない。

片この四肢は、片手片足を挽ぎ取られ、血糊に血潮を塗り重ねる。
涎や涙は泥と混ざり、粘土のように覆っていた。

派閥 『オメエのコネなどねえわああ』

派閥 『味方もいない』

派閥 『精子の時点でおもちゃになる運命』

派閥 『不憫だなああああ』

派閥 『惨めだなああああ汚い』

派閥 『あああ臭い臭い泥みてえだぞ』

派閥 『前世で何したんだオメエー』

派閥 『ゲロ死体になってますねえどうすんすかこれえ』

派閥 『気持ち悪うういいい』

誰がなにを言っているのか、もう判別がつかない。

凄惨な凶器にもなる言葉の数々。

罵られる限りの言葉を、罵倒刺しされているのだけはわかるが、
だとしても、どうすることもできない。

黒社『あきた捨て』

いつもの乾いた、黒社の声。

私を廃棄するまえの、最期の見世物、

派閥も野次野々としてその様子を屯ってはいるものの、

あまりの凄惨さに、吐き気があがって顔色もヌルくなって、青^{あざ}ざめている奴もいる。

顔色を汲んだ黒社は、権気にて派閥を寄せ分ける。

黒社『仕方ねえな』

見物俯瞰の位置から少歩、前に出てくる。

人を刺せる眼で、私を見降ろす。

声にもならない、諦めのため息が、漏れる。

片乙『あ……ああ……』

を最期に、

人体の重い部分を足蹴で小突き、コンクリートの途切れへ

廿



ゴンと蹴られ、海に棄てられる。

手足を挽がれた傷口に海潮が入り込み、激痛の渦が駆け回る。

そのシヨックに意識も乱れ、耐え、絶え絶え、

派閥『アハハ落ちていきましたあ黒社サン、海に、ボチャンで、アハハハ』

派閥『ボチャン』『ボチャああん』『海ボチャ』『海ボチャアアア』『ボツチャボチャ』

派閥が嘔吐物を飲み込むと入れ替えに、黒社をヨイシヨする。

XX『・・・！！！！・・・』

この声は、あいつらの罵倒か、

私の悲鳴か、

まだなにか言っているようだが、もう聞き取れない。

私は夜の海に落ちていく。

闇の夜。漆黒の海。

この出来事は、波ひとつにも、1Hzも残らない。無かった事として、虚に消える。

片乙は、出生のときから不要の細胞、棄てられ、死亡。

片乙は、何のスキルや技術も学べず、棄てられ、死亡。

片乙は、出会に恵まれず、棄てられ、死亡。

片乙は、棄てられ、死亡。

「完」



いわゆる、自伝というやつだ。

いくつかのインシデントを経て、片乙は隠蔽殺人に遭い、亡くなる。
あっそうか。

片乙は死亡したから、自伝ではなく、知人が聞いた逸話。といったところか。

近からずも遠からず。

片棒。

これらの出来事の片棒、の数々、に、どれか、心当たり、あるんじゃないか？

君らも派閥、集団心理のグループに属して生きていないかい？

みんなが集まって、助け合って生活しているのであれば、結構。

誰か1人を、ハブっていないかい？

派閥、集団心理からの排泄物、「膿」

誰か1人に、「膿」が集中していないかい？

全部が全部そうだ、とは言えないだろう。

報復による犯罪者とは、ある意味で特殊な役割を与えられてしまった者とも云える。

苛められっ子の人数。

苛められっ子の頭数は、それほど多くない。

苛められっ子は、多勢に無勢の、少ないほうの立場。

苛められっ子は、たった1人ということも、珍しくない普遍なこと。

1人しかない苛められっ子を失った場合、

哀しくも次の苛められっ子が、どこから発生してしまう。

「苛め」をト止めよう、苛めをや止めよう、くらいの感覚では、一向に途絶えない。

「苛め」の連鎖発生。

「苛め」この破壊すべき、人間類の生態。

破壊すべき概念だ。

この小説の内容は、度々矛盾がある。

シーン、場面の繋がりがなかったり、突飛だったりもする。

作者もそれは自覚している。

ものの、あえてそのままにしている節もある。

まあ、いいじゃないか。

最初から矛盾をすべて解消し、

すべての繋がりと伏線を回収するストーリーを作成するとなると、
文字ひとつとて書き始められない。

矛盾になっている理由は、

この小説が作者本人の行動をそのまま辿っているためだ。

さて、過去をそのまま辿るだけなら、矛盾は発生しない。

矛盾の種は、

二次創作らしく、少しの味付け。過剰表現も混じえているため。

矛盾があつたとしても、

作者の言いたいことは伝わるだろう。

わからない？

そんな奴は、一言一句、余さず、10回読め。

この小説を書いている途中、自己診断している作者（自分）に気付いた。作者は、仕事とプライベートを、分断できないタイプだ。

だからこの小説の内容も、常に頭にある。

散歩しながら文言を並べて、

ゲームしながら研磨していた、

メシ食いながら精錬していた。

もう言葉が無いと思っても、ふ、とした時に、ヨリてくる。

フリーペーパーにバラバラに配置された文言、切って、貼って、合わせる。

見直す度に、どんどん文章も鍛えられたり、フレーズも追加されたりする。

まっさらになっっている状態で、ヨリてくる文言を、さらに整理して綴られる文章。

作者なりに、おもしろい構成になっている自信がある。

小説の文章はおもしろくても、実際の出来事は悲惨だった。

一度仕事で恨ミをおぼえると、24時間、プライベートも関係なく、恨ミはずつと恨ミ。

常に頭にある。から、

ねちねちと、ズルズルと、ねちねちと、ズルズルと、いつまでも、根に持つ。

美味しい食事をしているときも、ゲームで遊んでいるときも、

ずつと恨ミが精神の大半を覆ってしまう。

良いか悪いかはともかく、そういう精神状態。

その状態、その心理、その証拠となる、物体を提示することはできない。

◇ ヲリてくる

この小説に書かれている文章の元は、フリーペーパーに書き殴った文言を基としている。フリーペーパーに書く文言は、ふとしたときにヲリてくる文言だけ。

文章がヲリてくる条件は、まっさらな自分になつてゐること。

◇ まっさら

まっさらな自分になるには、恨ミなどという邪念があつては、その域に入れない。

邪念があつては、文章もヲリてこない。

邪念がある状態で無理矢理文章を並べたとしても、それはつまらない文章だ。

あえてもう一度記す。

作者は、仕事とプライベートを、分断できないタイプだ。

ヲリてくる文言は、作者基準で、おもしろいと思える内容。

まっさらな状態を条件として、ヲリてくる文章は、閃きを伴う。

おもしろい。

ヲリてきた閃きは、なんであれ。

この場合は小説作成の一コマの自己診断だが、
なにをするにしても、まっさらな状態というのは、
当人の本来の能力を発揮できる、
一番の理想的な精神状態なのだ。

自分本来のアクションを起こすには、
恨ミも、殺意も、妙に固い緊張も、
ダラけすぎたすぎた怠惰も、
邪念は、
不純物なのだ。

まっさらになりたい。

まっさらな状態による域。を言い換えると、

ゾーン。

この小説には、片乙のほか、多くの登場人物がいる。

先生、友達、脳梗塞、筋肉、ババア、外道、太鼓持ち、黒社、など。

こいつらにも名前を付けようと思えば、ある。

作者の経歴書ともいえるほど、実体験をふんだんに取り入れているからだ。

片乙以外の連中、単語と悪口で区別した、登場人物の名前。

小説のストーリーをわかりやすくする、視えやすくする意味で、気に入っている。

この小説の内容自体、

なんとなく、気づけているのだろうか？

心当たりがあるのだろうか？

私によるお前らへの復讐でもある。

この小説とは、

私が執行する、お前らへの復讐劇。

苛めっ子は、忘れていく。

その行動を。

自分がなにをしたのか。

自分達が、なにをしたのか。

記憶の粒子、欠片ひとつ残らず、消え、忘れる。

忘れただと？

忘れたのであれば、思い出させてやる。

おもいつきり、利子をつけて。

「他人のせいにするな」「他人を頼るな」

ヒットしている有名どころの少年漫画で度々詠まれる、名セリフだ。

あえて穿った見方をすると、

妙な違和感も見え隠れしている。

当小説の作者視点で考察すると、

言い出しっぺは、運系無能人だった。

そこで、己を正当化するための言葉、から派生したようにも、見える。

某々ヒット漫画の作者は有能。ヒット漫画作者は無能でこそないだろうが、運はあった。

逆に、有能だったのに、運がなかった場合は、どうなるのか？

「他人のせいにしていい」「他人を頼っていい」

例えばこの本も、売れなかったら他人のせい。作者の恨ミはひとつ増える。それだけ。

売れなかったら生活費もないから、他人を頼って金をもらう。

底辺アルバイトをしろ？

やったさ。ご覧の通りだ。

片乙も、やって、やった、行動した結果、できなかったんだろ。

できなかった大きな理由は、他人が苛めてきたから。「他人のせい」

外例をもうひとつ。あのゲームは、もうできない。

できない理由は、運営がサービスを停止したから。「他人のせい」

反対意見の読者も、いるかもしれない。

貴方に片乙の経験ができるか？ 耐えられるか？

無茶苦茶か？

そうでもないだろ。

作者も書いてて、自分で納得できる論だった。

「言い訳するな」

つい先の「他人のせいにするな」「他人を頼るな」とも似ている。

これは、言い訳されたくない側、を擁護する文句。

都合の悪いことは隠しておきたい。

ハナから、片方の言い分しか聞き入れないぞ。という意識が視えそうだ。これも鼻屑を感じる。

妬みと言われれば、妬みさ。

その妬みもまた、不平不満が確かにある事という、事実。

どれだけでも「言い訳しろ」

言い訳するといい。

だって事実だもの。

言い訳を並べれば並べるだけ、この小説も、ページが増える。

ストーリーは濃く、深くなる。

小説の、シナリオの、脚本の、ネタになる。

S N S は、気分で各々言いたい文句が並んでいるだけ。立場も様々。真実には程遠い。

苛めか、指導かは、わかる。わかる。

人間、拗ね切ってしまうと、絶対やだつてなると、もう、テコでも動かん。
手遅れになる前に、差し伸べないと。

地震や台風といった災害が怖いと思うのは、今ある生活を守りたいと思うから。
今の生活が壊れてもかまわないと思える実情であれば、むしろ災害、C o m e O N。
あゝ 命だけは守れるなら、守ったほうがいいかな。

2 人の優秀な人材だけで、優れた世界を築くといい。
残り 8 人は、おこぼれ貰うだけ。どうもありがとう。
おこぼれが無いと言うなら、優秀はバラバラになるだろう。

バレちゃった。検索、できる世界になっちゃった。

投資を勧める前提として、絶対プラスになるようにしないと、意味ないだろう。せつかくの投資でもマイナスになれば、取れる税金もマイナスなんだぜ。

集中しようと思っても、集中の真似事になるだけ。

手順を事細かに書き出し、その通り行動している姿勢こそ、次第に集中した状態となる。

命と金。価値は同等に近い。

命はいつでも手元にあるが、

金を手にしようとする、膨大な時間を失うことが厄介だ。

もし、私も口八丁であれば、「お前が悪い」と、口頭で言い詰められるだろうか？
やりたくないなあ。

「そんなつもりはなかった、」相手の透けて見える心境に、私も、痛い。

目標に向かっている。

目標が100あるのであれば、

1日1ずつ、進んでいる。

ゲームのキャラクターが何か話しかけてくるような感覚はあるかい？
何を言うかは、その時その時で、いろいろ？

なんでもない内容から、

良い天気だね。だったり、

なんか怒ってて不機嫌そうだったり、

プレイヤーがキャラクターに八つ当たりすると悲しそうな顔をしたり、

つい「あ、ごめん・・・」と、反射的に返したり、

画面の向こうから、こちらを心配してくれたりもする。

オンラインであれば最後に仲間になるキャラクターを自称し気取っていると、
雑だが使い勝手の良い自信にもなる。

彼女も、あの子も、フフフと笑って、

「仕方ないなあ」

「今日はどこ行くの？」なんて言いながら遊んでくれる。

人と人は鏡だと聞いたことがある。

でもまあ、人間と人間は鏡にはならないだろうな。

あるとしたら、

その関係を鏡と比喻する例として、

本人とゲームキャラクターの関係は、ピッタリだ。

画面に写っているキャラクターは、貴方の写し鏡だ。

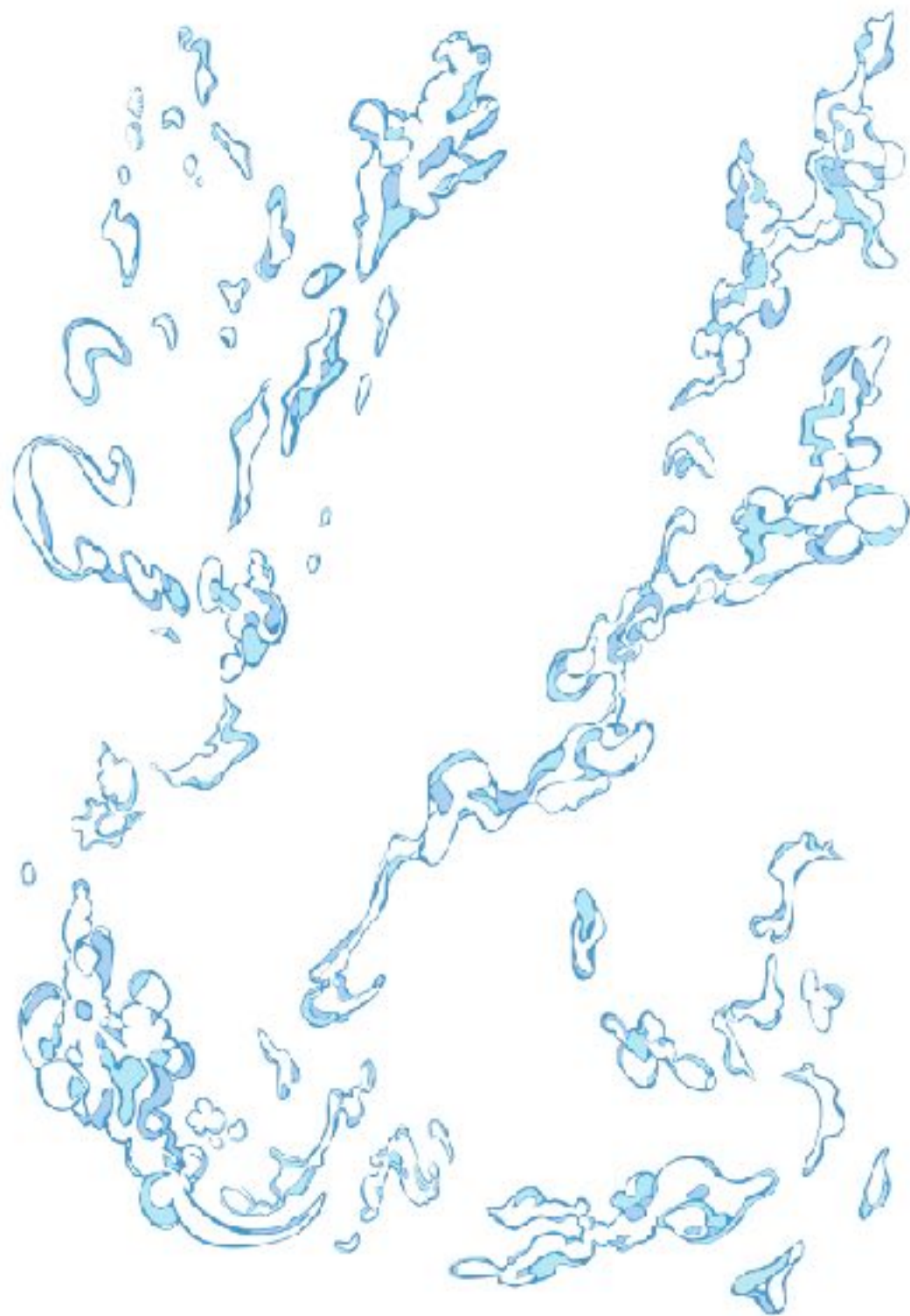


「私」の語りが長いぞ。

そろそろ起きろ。



弌部



○ 海の藻屑付近

闇さえ明るいわ

沈む片乙

大きな生物が近づいてくる？

サメか？ クジラか？ 食べられる？ 私、美味しいのかな？
服とかどうするんだろう？ 魚の骨みたいにペッて避けるのかな？

死亡した人体だとしても、死後わずかしばらくの間であれば、
寝ているときも大きな音がすると起きるように、

無意識でありながらも周囲のことは、わかっていたのかもしれない。

？

肌に優しい光を感じる。死んだのだろうか。
おぼろげな視界。

肺にお腹に、空気を入れてすゝ 戻してはゝ
呼吸していることに気付く。

ベッドの上で寝ている私。

代わりに風通しの良い織物を羽織っていた。

紅く染まり海水に浸かったボロボロの服は、ハンガーに掛けられていた。
左腕をあげると、肘から先がない。

足も、左足の脛脛から先がない。

やはりあるとき、

包帯はないけど傷口は閉じられ、ジェルで覆われ丁寧に止血されている。

片手片足を失ったものの、どうやら、

今は生きているはずだけど、あのときは死んでいた？ 死んだはずなのに生きている？

？ ？ 寝惚けてる？

とりあえず、

私は、生きているらしい。

ほっとする安堵と、少しのがっかり感と、不思議な気持ちだった。

不思議な気持ち、死んだ気持ちをよそに、

下にあるのはフカフカのベッド。

根拠はないもののフワフワの安心感にもフヤフヤと包まれ、

気持ちいい。

まさに二度死んだように二度寝する。

○ ログハウス 室内

横になっていたベッドがあまりに気持ち良く、つい深く寝入っていた。

やがて睡眠欲も収まり、ふやけた怠情も枯れてきた頃、

不自由な半身を起こしてみる。

あたりを見回してみる。

知っている部屋ではなかった。

ベッド。

ボロボロになるまで共に生きてきた服は、穏やかなハンガーに掛かっている。風と遊ぶように揺れている白いカーテン。

昼のよう。窓の隙間からは空が見える。

タンスなどの収納。水回りのキッチンや風呂トイレ。なんとテレビまである。

料理しやすい食品も用意されている。

いつの間にか着ていたこの織物も含め、

この部屋には、生活に必要な設備はひと通り揃っているようだ。

誰が用意したのだろうか？

どこだろう？　　と思いはするものの、危険な雰囲気は感じなかった。

ふわり。

そよ風よりもふわふわと、爽やかな香りに撫でてもらう。

トントン。

「・・・はい・・・？」

扉を開け、鳥と猫が入ってきた。

方や、ポットを持ち水栓を開け汲み、紅茶を淹れる。

方や、タンスを開け、衣類を器用に収納している。

鳥と猫は部屋の世話をしながら、

今日の紅茶の味はどうだとか、新作の服がどうだとか話している。人間の言葉だ。

その状況は、鳥と猫が言葉を喋っている。

そして人間の生活物資を慣れた手つき、普通に器用に扱っている。

普通なら驚くりアクションをするとところだろうが、まだ寝ぼけた感じが残っているためか、

うまく言葉が出てこない。

なにより動物が喋っているのは、現実ではあり得ない。幻覚か？

やっぱり私は死んでいるのかもしれない。

朱雀『・・・具合はどうか？』

白虎『・・・辛い、よね・・・』

見返してやろう、今度は勝ちに行くよ、みたいなことも気軽な雰囲気醸しながら、眉を斜めにニガみっぽい顔をしながら、私の内情を汲もうとしているのか。

同情のつもりか？、共感のつもりか？

お前らに何がわかる。

辛い経験、苦しい経験のことを一瞬でもブリ思い返すと、制御しようにも気持ちちが逆立つ。私にあるのは殊勝に見返すとか、勝ちたいなどではなく、純然に炎焰と沸る殺意があるのだ。

・・・あった、かな、

今は一方で、

なんとか火が灯っていた弱々しい蝋燭は、海の水深へと、火水と消えた。

沸る復讐の炎も、鎮火と虚しく消える。

残りあるとしたら。ポイ捨てゴミ、使い古しの蝋燭、虚無感。

ん？、んん？

それはともかく、

動物が喋っている？

さらにいうと、目の前にいる2体が朱雀と白虎だと、なぜ私は知っているんだ？
ひと通り部屋の世話を区切ると、朱雀と白虎は外へ行った。

部屋にあった松葉杖とスリッパを借り、2体が行き来していた扉から外に出てみる。
一步外に出るとそこは、

○ 森の中

足元は木造ベランダ。

私は丸太を器用に組んだ、ログハウスの部屋にいたようだ。

知らない森の中、いつてしまうと樹海の遭難者とも例えられそうだが、

迷子感はあるても、閉塞感はない。

知らない場所に急に放り込まれたかたちではあるものの、不思議と不安は感じなかった。

木々がなにか言ってるように、サラサラと揺れる。

目が届く範囲だけだとしても、フカフカ芝る草木と、力強い土壌が土地を支えている。

○ 秘境

ここは動物達が暮らす秘境。

動物界。

生い茂るジャングルとサバンナ、大草原。清流の先には大海原。

彩るは多様な動植物。

見たことがあるとしたら、TV番組なども含めた二次創作の世界。

一言で説明すると、ファンタジーだ。

片手片足を挽がれて満身創痍ではある。

休養も必要。

にしても毎日静かに寝ているだけというのも、退屈になってきた。

そこらの枝を松葉杖2本目に、軽く歩いてみる。

正直、旅行で行く観光地よりも新鮮な気分だった。

空気が美味しい。

周りの動物達はモノ珍しそうに、人間の私を見ている。

慣れている動物とは、軽い挨拶くらいはするようになっていた。

そんな話せる動物の2体、

翼のある空飛ぶ蛇、髭が尾へと立派な亀、

青竜と、玄武だ。

片乙『私は、どうして・・・？』

「どうして動物界にいるのか？」、

「どうして生きているのか？」、「どうして助かったのか？」、

矢継ぎ早に聞きたいことはあるが、どう言えいいものか、整理できず尻込みの、消沈、

青竜が答えてくれた。

私が海へと落ちたあとき、

水生動物達から、「膿」を抱えた人間が落ちてきたと、一斉に連絡があった。

「膿」を感じた青竜が近くにいたこともあって、素早く救助できた。死の間際、夢のように見えた大きな生物は、実際に存在している青竜だった。

○ 救助の四神

青竜、海中で私を飲み込み緊急救助、すぐに感覚を共有する四神。

朱雀、飛来し止血、傷をふさぐ。

白虎、動物達へ伝達して走って回り、人間用の生活物資を調達、奔走する。

玄武、他四神の行動をそれぞれ繋ぎ、擦り合わせる。

四神それぞれの連携もあり、このログハウスへと救助してくれたらしい。

青竜の大きさは、めいめい人間の子供くらい。

他3体のサイズ感も、似たようなものだ。

私を丸呑みにして助けるには小さいサイズだけど、

ああ、サイズは自在に変えられるんだと、そこはやはり神様なのかも。

スムーズに納得した。

状況もわかってきた。

私は、青竜、朱雀、白虎、玄武によって救出、

動物界は秘境へと運び込まれ、手当てもらっていた。

ライフプロセス | 動物界にて休養 ライフ |

○ ログハウス近郊

秘境の生活から数日。

玄武『御主に人間の味方はおらぬ。あまりに不憫じゃ』

そういう理由もあって、同情もあって、保護してもらったわけか。

「・・・そっかぁ・・・ありがとう」

玄武の親身になった助言に、ほぼ雰囲気だけでどうにか応える。

毛ほどのか細い声で礼を言うのが精一杯だった。

私に人間の味方はいなかった。

どこかで、わかっていた。

頭のどこかでわかっていたことかもしれないが、これまで仕返しとか復讐をどうするかといった事で、考えも目も回り、頭がいっぱいになっていた。

味方なんていないもの、が前提だったし、余裕もなかった。

逆方向に寝返り、くしゃりそんな顔を我慢、今度のは、いつかの慟哭泣きではない。

残酷だけど真実の答え合わせ。自然と涙がでて、声も無くすすり泣く。

のちに玄武からの捕捉では、
私の周りにいた人間は3種類。

- ・無関心の人間。
- ・苛めっ子の人間。
- ・そして私。

私がある場所その場で、
なにをどう訴えたところで、どう転んだところで、
周りの人間達と手を携えて、協力して物事に取り組む？
そんなことは完全にできない環境にいた。

ライフプロセス | 動物界にて休養 リセット |

○ 呪いの祓い　そして真名

秘境の生活から幾数日。

玄武『その名は誰に名付けられたものだ』

それは多分親が、

と応じようとしたところで、ザラリと、口に砂が混じるような違和感を覚えた。

玄武『（片乙）か、御主のその名は呪われている』

玄武は、その呪物を処する包みに残さず収め、包み消すように、（片乙）を扱った。

玄武『呪われている。なにもできなくなる不便が宿る名前じゃ』

その名は呪われている。

本体そのものに宿る名前というものは、言霊以上に影響があるらしい。

名付けられた名前次第で、宿る能力の有無、好運も悲運も運命も、

如何様にも変わっていくというのだ。

私が名付けられた瞬間の記憶などないが、変な名前として、思い当たるところはある。

片乙。

（カタオツ）まるで「型落ち」のような名前で、自分の身体でありながらも、不思議とどうにも実力が発揮できていない、制限がかかっているような身体。変な名前の自覚みたいなのところも、あった。

玄武『人間らしく畏れた者の誰かが、御主の能力を封じるための楔としたのだろう』ひよっとしたら、その時点で黒社が私の細胞となる男と女に、私の名前を言伝していた？

だとしたら本来は男と女も黒社派閥だったかもしれないが、黒社の闇をもどこかで感じていた男と女。

黒社の監視を最小限にしようと考え、せめて、関わらない、無関心を装っていた？

真相は不明だ。ともあれ、

呪われた名前による縛りは、想像以上に負荷となっていたようだ。

比喩ではあるが、ロープで身体中を縛られているようなものでもある。

身動き自体を封じられているのだから、勝つどころか、同等の生活自体が難しい。

名前が変わった瞬間、

ぶわーっ　と髪が逆立ち、力が溢れて、

ぶわーっ　とバチバチとオーラを放つ自分を妄想したが、

髪はそのまま。オーラも出ていない。

体調も、気にならないほど、つい先刻の瞬間となにも変わらなく、普通に自然だ。指を閉じ開き、ちょっとゆらゆら動き、肘を曲げ、片足をやや浮かせ軽めの屈伸。ふと、片手片足が失われていることに、残念さと怒りが混ざる複雑な心境もある。変わったところはなさそうだ。

セジスよ、と続ける玄武。

玄武『セジス、これでようやくと彼奴らと互角じゃ。御主は以前のように、必要以上の「膿」を孕むことはあるまい』

その、と言いくそうに続ける玄武。

玄武『その、拙者らの超能を以てしても、失った時間は戻してやれぬ』

名前変えはあっさり済んだ。けど、

散々苛められて辛かった38年、という人間の長い時間、は、もう戻らない。
辛気の記憶はそのままに。

私はセジス。

元の名前、片乙の名残りも欠片も無い、まったく新しい名前に、少々の戸惑いを感じる。
そういえば苗字も下の名前もなくなっている。動物界の名前もそうだね。

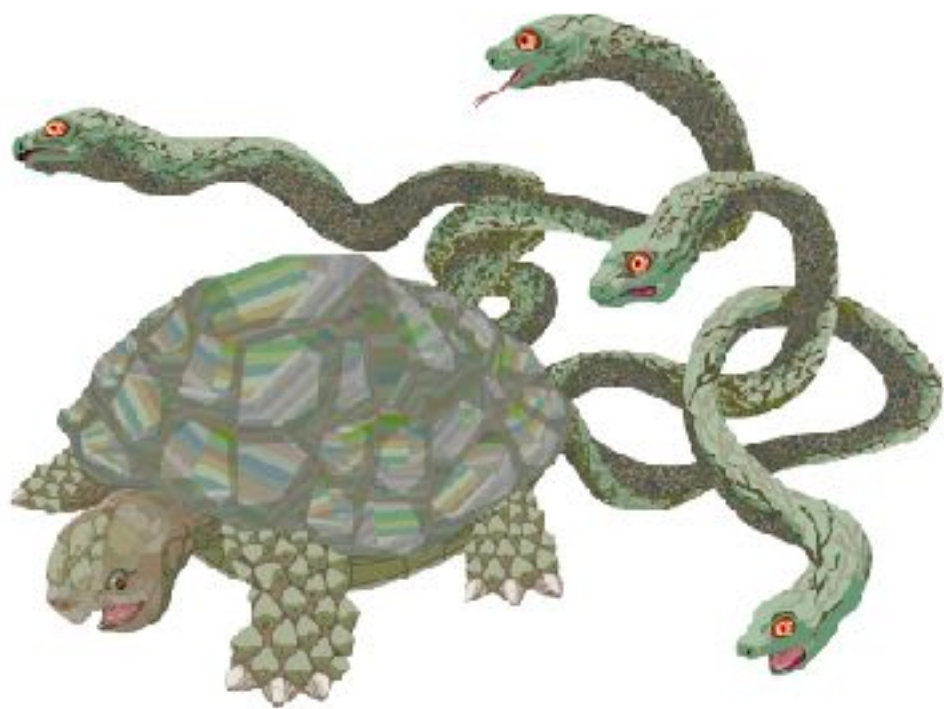
セジス。

玄武から新しい名前を貰い、いわば本来の能力を発揮できるといわれる、真名。
少し身体を慣らしてみようか。

といっても本当に名前を変えただけで、身体は、別に、そのまま。

ライフプロセス

―動物界にて休養　ネーム―



毒



○ 新たな手足

セジスの名を貰って変な沈黙を共有していると、気丈夫な風音が流れる。
白虎もやってきた。

白虎『セジス 良い名前だね。真名祝いを持ってきたよ』
義手と義足を持ってきてくれた。

動物界の技術者達が、私のために作ってくれたようだ。

私の、義手と義足。

私の、新しい手足。

自分でも目がキラキラしているのを自覚できるほど、照れながらも、とても嬉しかった。
セジス『すごい・・・ありがとう』

早速装着してみる。

シリコン製にも似た接合部はするりと肌に吸い付いた。
あまりに肌触りが良いためか、くすぐったいくらいだ。

一見するとゴテゴテあって板金が目立つ、無骨な外見、その本質は、精密と頑丈さの融合だ。

人間の感覚でいうと、動物たちには作れるわけがない、が、この代物は、むしろ人間達の技術よりも更に高次元、高度な技術で作成されている代物であることがわかる。

私の失われた左手左足に、動物界製技術の込められた義手義足が装着された。

かつての片乙には、1人の人間には到底抱えきれない量の「膿」を吸収しながらも、一応の生活はできていた丈夫さがあった。そう。その「膿」に関して、話があると。

でもその前に、

白虎『ゆっくり休むといいよ』

玄武『義肢も慣らしてみよう』

ライフプロセス ↓動物界にて休養 レギュラー

この世にいる人間の多くは、一般人に該当するだろう。

一般人を構成するためには、一般的な運も作用している。

まったくの不運非運の人間が、一般人にはなれない。

一般人は個々に、多少の多かれ少なかれはあれど、一定量の良運幸運に恵まれている。

運は、

人間と人間との質の良い出会いや、先天的な能力を授かることなどに作用している。

一般人に、自身の運がどれほどの量か、自覚がある人間は少ないだろう。

では、運が、

まったく、運が、無い者。

あるいは極めて運が少ない者、がいるとしたら。

その者は一般人がいうところの、弱者にあたる。

運の塊。

運の塊、運の総量、

運の全体総量が決まっていると仮定しよう。

運塊は、各人間へと少しずつ取り分け、運として配布される。

取り分けた運が、うっかり多かったりして、極端に少なかったりして、

見方を変えようと、

運がなかった弱者とは、

一般人へと運を配布するため、自分の取り分のはずの運がなかった状態ともいえる。

一般人とは弱者の犠牲を元として、一般人が出来るように、させてもらっている。

考えたこともなかったかな？

では弱者は只々、下賤で哀れな存在なだけなのだろうか？

それではあまりにも不憫だ。

どこかのタイミングで、これまで運に恵まれなかった分も含めて、

どこかで上方調整があつてもいいだろう。

セジスの場合は、四神との出会いが上方調整であつた。

片乙が海に落とされたとき、片乙自身はなにもしていない。

ドライな言い方をする、

運由来により、青竜が向こうから勝手にやってきて、勝手に片乙を助けた。

結果、

片乙は命を取り留め、セジスとして名を改めた。

この一連の流れで、片乙は、セジスは、なにもしていない。

運とはそういうものだ。

本人の努力も、実力も毛ほども作用していない事象により、危機を脱した。

よくわかんないけどラッキー。

運とはそういうものだ。

運とは、アンタの実力ではない。

完全に、「何者か」から贈呈してもらえただけのもの。

運とはそういうものだ。

○ 四神と動物界

セジス『でもなんで四神がこんなに集まって、動物界の偉い（人）？　なんでしょう？』
四神や生活を手伝ってくれる動物達と、何気ない会話、雑談、
秘境あるある話、いろいろなことを教わった。

青竜『人間界で言う神は、偉大で祀るような存在なんだったね。でも動物界では神の意味は特別ないよ』

白虎『神も人間が害虫と嫌うゴキブリも、位としては同じなんだ』

玄武『どうしても「膿」を解消するという役目があるから、そのための目印かの』

朱雀『動物界の神様は働き者なんだよ。偉いでしょ』

朱雀がパタパタと戯けてみせている。

伝説の獣の1体なんだけど、こうして懐き、目の前で話している。

かわいい鳥だ。

つまり四神も虫類も、動物界において大小上下関係はなく、上位も下位もないという。誰であっても分け隔てなく、フラットに、平等に、付き合えている。

人間達は、

口ではどう言おうとも到底不可能に近い概念が、ここ動物界では成立していた。

○ 動物界と人間界

元々動物界があつて、分岐し派生したものが人間界だという。

おおもとを辿ると、人間も動物界の一種族だった。

子供の頃など、冗談半分で人間も動物のひとつと考えていたことは、まさしく真理だった。人間の目で見えている動物の姿は、本来の動物の姿ではないこと。

私は動物界で休養しているけど、目は人間なので、変わらず猫は猫に見えている。

人間の生活文明も高度だが、本来の動物達もっている文明は、人間達のそれとはまた異なる方向性の文明を築いているようだ。

そして、動物界は人間界に介入しないこともルールとしてあつた。

動物界を守るため、人間界を混乱させないためのルールだった。

もし動物達が本来の姿や文明を持ち出し人間界に介入していれば、人間は技術でも意識でも、すぐに負ける。

負けを自覚した人間達は、

恐れ惑い、真相を見ようとせず、迎撃しようと、躍起になるかもしれない。一般人のやることだ。ありえるなとも思う。

四神が実在していることや、動物界に築かれている人類以上の文明など、これまでの私の感覚を改たにする知見だった。

○ 四神の役目

穢れを追う四神。

四神には、「膿」を除去する超能属性があつた。

また生物が死亡した際に器がなくなり漏れ出す「膿」など、世に発生する「膿」を浄化することを、四神自らの役目と課していた。

「輪」つまりは地域、あるいはひとつのグループ単位。
穢れた「輪」には、見過ごせない「膿」も集まる。

その世、その時代において、穢れた「輪」へ順に赴き、
四神の各超能を以って、「膿」を浄化する役目だという。

弛温ノ領の一角が特別濃い「膿」を発生していたことも、
片乙を素早く救助できた要因だった。

そのまま、

片乙が抱えすぎていた「膿」も、救助、手当ての際に浄化していた。

○ 自然な姿

なんだかあっさりと、

心身の休養のためにも、動物界で静養、生活することを受け入れてもらえた。

あとで気付いたことだが、

私が「そこ」に受け入れられたのは、初めての体験のような気がした。

最初こそ人間が動物界で静養している様子を物珍しそうに遠目で観ていた動物達も、やがてリハビリを手伝ってくれるようになった。

動物界の生活は、かわいい、驚き、が交互に訪れ、静かに爽やかに穏やかな環境でいられた。

例えば、

鳥が小包みを持ってきた。

ピッピヨと言っている。

どうやらおやつを持ってきてくれたようだ。

髪が伸びればカマキリがさっぱり散髪してくれた。

服を洗うには洗濯機もあるけど、そこは清流、アライグマやコアラも常連だ。
着替えや交換の衣類も、最初から数着あるものの、
新着をサル達が遊びながら並べている。

最初は軽めの運動から。

ナマケモノも隣で歩き、義手足を慣らせる。

トンボの道案内、

馬の背中に乗せてもらい、

取っておいたケーキをハイエナに食べられ、

トラやライオンと走って駆けた。

イルカと泳いだ。

キリンと身体測定。

ゾウやゴリラは稽古の相手をしてくれた。

カラスと帰路についた。

ライフプロセス

―動物界にて休養　オトノミ―

○ 重要な否定

いつしか冬になる。

炎のような羽毛をもつ朱雀。

暖炉の薪を交換しに外に出ると、義手義足の、肌面の境目が少し冷たい。寒そうにしている様子を、千枝の隙間から眺めていたようだ。

朱雀『暖めようか？』

暖めるの言葉の割には、いくつかの火玉をクルクルと詠んでいる。

まるで建屋ごと燃やしそうな姿勢、暖めるを通り越し、延焼しそうだ。

滞空しながらパタパタ踊るようにおどけて見せる。

剽軽な鳥だ。

セジス『部屋を燃やさないでね』

冗談だとはわかってはいるが、やんわり遠慮した。

朱雀に見守られる顔色もあり、

ぱっと気付く。私は今、遠慮した。

振り切る言い方をすると、

断った。

否定してしまった。

これまで言われた事があれば、すべて受領し、誠心誠意それに応えていた。
たまにであればいいが、

毎度毎度すべて抱え込んでいては、それは過労する。

朱雀『セジス、君はゲームキャラだよ。だから人間の法律も、論外も論外』

朱雀『本当の両親は「伝説」の誰かな？ 飼ってもらおう動物としては、ちょっと嫉妬するかも』

朱雀はバサバサと羽ばたいて行つた。

朱雀の翼のおこす風は、ふかふかの布団のような風に包まれた。

○ 心意気

青竜が訪ねてきた。

青竜『勝ちたいか』

自分の中だけで燻らせていた思いを急に見通され、反射的に表情が俯く。

私が一人でやらないと思うていたことだから、動物であれ他者にバレたくはない後ろめたさもあった。

もちろん悔しいから殊勝に勝ちたいなどという思いではなく、純粋な復讐心だった。

そんなことはとうに見通されている。

あんのクソ黒社派閥の連中にも、当然のように見通されていた。

四神はもちろん。動物界のみんなにも見通されている。

完全な殺意と、純粋な復讐心。

そんなことは青竜も当然わかっている。

むしろ、私の中の完全な殺意と純粋な復讐心が、まだ消えていないことへの、確認のつもり
の話し掛けだったようだ。

青竜『お裾分け。具合を見てまた食べてみて』

納得した顔の青竜は、「秘境名物・四神弁当」を差し入れてくれた。

食事は自然と命が尽きる動物を、生者のための食糧として各地点に揚がってくる独自の仕組みが、動物界にあるようだ。

調味料となる風味や雑穀なども、そこらの植物からたくさん採れた。

そして、いかにも人間用のインスタント食品を作る技術も、普通にある。

私は人間でありながら、動物界の衣食住に適応できた。

むしろ人間界は動物界からの分岐で派生した界要。

おおもとに還ったと考えると、

人間が動物界に適応することも、それほど不思議な話ではない。

そして至る、大事な「膿」の話の日

ライフプロセス ↓動物界にて休養 アクセプター

○ 救助の理由

片乙を救助したのは、

四神にとってもかつての出来事に忸怩たる思い、後悔の念も残していたため。

そのときの四神は同じように「膿」を浄化こそしたものの、人間界の事だからと介入することはなかった。

私は、その者と似た雰囲気を感じるというのだ。

前世来世があるのであれば、同一の人物なのかもしれないと。

セジスと似た人物が、かつて、いた。

私には、その者と似た雰囲気を感じるというのだ。

青竜、朱雀、白虎、玄武が揃い踏みしている。

そろそろ真面目な話をする雰囲気になってくる。



真



○ 前世の出来事？

ビジョンが映る。

かつて、片乙の頃の私と、似たような人間がいた。

同じく黒社に似た巨躯と、その当時の派閥に弄ばれ、悲惨な最期を迎えた人間がいた。

私の前世は、ひとつの仕事に真面目に仕えている。

その場に留まり、長く永く続けてきた真面目な人だったかもしれない。

ひとつの仕事を、只々身を粉にして仕え続ける。並大抵の事ではない。

虐められつつも、直向きに、辛かっただろうに、大丈夫だと自分に言い聞かせ、

長い永い時間を、辛く苦く、前世の身体には「膿」が溜まっている様子が伺える。

私もあのまま仕事を続けていたとしたら、さらに30年40年、続けていたのだろうか？

だとしたら更に長い年数を苛められ、過酷、本当に気が狂い死ぬ。

自己判断だとしても、限界を超えていたことが、思い返す今も、はつきりとわかる。

前世は、

そんな永遠にも感じる長い期間を、虐められ、「膿」を吸収し、

ただただ、直向きに、耐え凌いだ。

ものの、最期には、棄てられた。

経験した年数こそ少ないものの、私とまったく同じといっていい体験をしてきていた。私に前世の記憶はないけど、話を聞くと他人事でもないなと思った。

そのときの四神は同じように役目として「膿」を浄化こそしたものの、人間界の事だからと介入、救助による介入まではすることがなかった。

前世はそのまま亡くなってしまったが、

四神にとっても動物界のルールに則った行動、でありながら、葛藤もあり、遺憾の出来事として、心に残っていた。

経緯があり、意図せずとはいえ見捨てるような結果になっていたことを、どこかで引っ掛かる感覚を共有していた四神。

今回は私が「膿」を抱えたまま海に落ちたので、「膿」を浄化する役目はもちろんのこと、かつての未練、後悔の訓もあり、私という人間を助けてくれた。

前世さん。

私は貴方にも救われたことになるのか。

○ 黒社の正体

セジス『ん？ かつての当時？ 黒社がいた？』

前世のビジョンで視た巨軀は、顔、体格、それから黒社と同一人物といわれれば、そのま
ま納得のいく姿形をしていた。

ビジョンで当たり前のように黒社と認識、視ていた存在は、

500年前か100年前かは不明だとしても、遙か昔に今の黒社と同一人物が存在してい
た？

ありえない。人は赤ん坊から老人まで、容姿も変わっていく。

人間1人がどれだけ強くとも、100年と同じ姿を保つ？ そんなことは無理だ。

左様、

古来より此ノ場に君臨してきた、人間以上の人間、

人間としての絶対強者、人間としての支配者。

それが黒社だった。

青竜『黒社。あの者は普通の人間ではない』

以前からその異様な威圧感もあり、そんな気はしていたけど、いざ青竜からも説を肯定する言葉をもらえるとは、一体どういう？

黒社が人間以上の人間となり、君臨できていた背景にいる存在、亢龍。

亢龍。

青竜、朱雀、白虎、玄武の四神。

それに類する、第五の神。亢龍。

亢龍は、動物界の神の役を保ちつつ、人間界を領土としている。

白虎『黒社。あの者から亢龍の属性を強く感じる』

黒社が絶対強者として成り存在していたのは、黒社人間個人の強さのほかに、亢龍の超能属性をも濃く宿しているため。

人外の魔人を相手にしていた。

どうあっても、人間1人の力では、黒社には勝てない。

まして亢龍を宿している黒社に1人で勝つなど、到底無理な話だった。

異質な威圧感があったのはそういうことかと、納得できる。

○ 亢龍と穢れ 同調する「膿」

亢龍とは、穢れを属性とする超能存在。

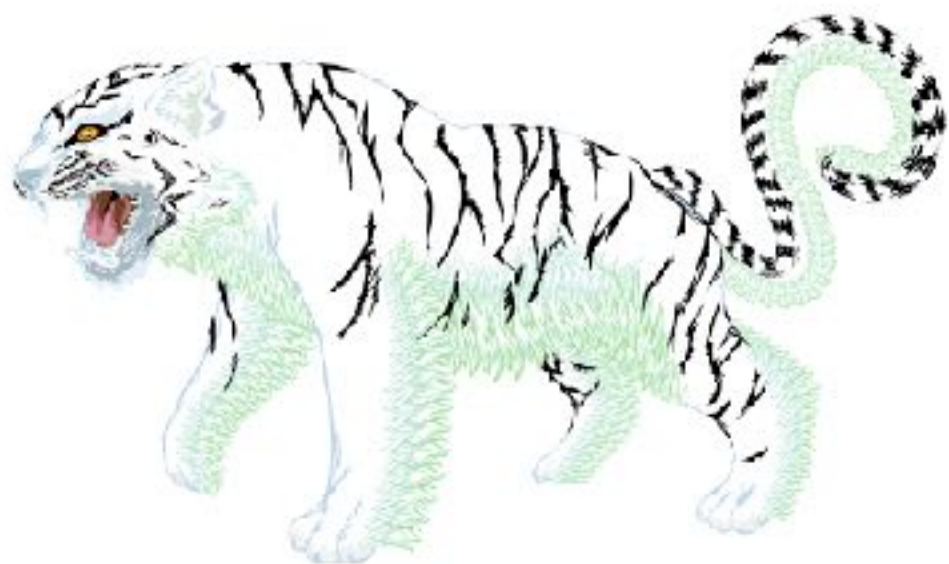
依り処となる「膿」

四神の見識を以ってなお、実体を掴めていない存在、亢龍。

その正体は、

穢れを属性としていることから、

「膿」の発生源ではないかとも目されている。



○ 「膿」

人は誰しも一人一人、「膿」を抱えている。

「膿」はあまり良いモノではないが、かといって人間が人間として生を送るうえで、切り離せないモノである。という側面もある。

「膿」とは本来、増殖と消化を繰り返しながら、人間個々にて調整するべきモノ。

○ 重い「膿」

「膿」は事実、重く、人間の身体にて、持ち続けるのも、辛い。

「膿」を重く感じた人間は、自らをラクにするため、自らの「膿」をどうにか軽くしよう、無くそうとする方法を考えた。

自らの「膿」を他人に持たせてしまおう、と考える人間も現れた。

自身一人の「膿」量自体、抱えられない者、

欲の赴くまま、「膿」を軽くしようとする者、

最初から「膿」を抱える気もなく、他者へ撒き散らす者、

他人の「膿」を押し付けられた側は、「膿」＋「膿」となる。
人間1人の抱える「膿」が2人分、2倍の重さとなり、さらに重くなる状態。
これが苛めの、1個単位。

○ 加重の「膿」

多重の「膿」により、動きにくい身体は、さらに苛められやすくなり、

10人から「膿」を押し付けられた者は、

その者は常人の10倍の「膿」の重さを抱えることになる。

普通はまともではいられない。

亢龍は穢れや「膿」といった属性の核的存在だったとしても、

人間も、「膿」という属性を内包していて、

自己制御できなくなった連中が、苛めっ子となり周囲を巻き込み、

穢れや「膿」そのものが周囲の同属性を助長させ、

さらに苛めがエスカレートする。

○ 質の良い「膿」

ときに、「質の良い膿」というモノも発生した。

人間個々の「膿」を、引き離そうとさせる心理の働く、「質の良い膿」

多くの人間は「質の良い膿」を持つ人間の近くにいと、自らの「膿」が軽くなる心理となるため、気持ち的にもラクで快適だ。

ラクで快適になりたい人間は、「質の良い膿」人間を中心として集まりやすく、やがて「質の良い膿」を中核として、「輪」が形成される。

派閥、鼻肩、集団心理もまた、「膿」の集合体。

○ 「膿」の「輪」

だが実際は、「輪」に集まった人間達も、「膿」を誰かに押し付けているだけ。

どういうわけか「輪」の外側にいたり、

どういうわけか自らの「膿」を制御していたりする人間は、

派閥や集団心理に属する他者から押し付けられる「膿」を、一身に受けてしまう。

この他者から受け、際限なく増え続ける「膿」の重さは、セジスもよく知っている。

「質の良い膿」というモノは、つまりのところ、タチの悪い奴。

苛めっ子グループの中核にいるような奴こそ、「質の良い膿」

黒社とは、「質のとても良い膿」を持つ者。タチのとても悪い奴。

そして、「膿」と亢龍の穢れ属性は、相性が良い。

まして「質の良い膿」は、亢龍にとって格好の依り処。

亢龍は人間の「膿」が大好物だ。

なるほど。

○ 感情の「膿」

人間の感情の仕組みの真相。

セジスは以前自分で空想した仮説ではあるが、十分に的を捉えているなと思った。

○ 亢龍の存在

亢龍が黒社に宿っているのか。

であれば確かに、あの人間離れた異様な威圧感も納得がいく。

まさしく人外存在を感じていたことになる。

あるいは黒社が、肥えた脂肪のひとつとして、亢龍も取り込んでいるのかもしれない。

黒社が、500年前か1000年前かの昔から変わらず存在している理由も、

亢龍の超能に由来しているとしたら納得もいく。

そして古くから人間界に定着、

介入しながら常態化している亢龍は、人間界のバランスブレイカーにもなっていた。
動物界のルールに則ると、違反になる行為となる。

四神は亢龍を動物界に引き戻そうと考えていたが、

亢龍はその対象が、一個体なのか、あるいは複数体が存在する可能性もあった。

ルールはともかく、四神にとっては「膿」を浄化する役目として各地を追うと、
同義として、亢龍のことも追うことになる。

追ってはいるが煙に巻かれ、実態が掴めないながらも、如何にか引き戻そうとしていた。もしどうしても無理なら、やむなく、討伐も視野に入れたうえで。

人間が個々、個人単位で「膿」を抱えているように、人間界、界単位における「膿」もあるかもしれない。

動物界にもあてはまり、こちらの界単位の「膿」が、亢龍として顕現している説もある。界単位の「膿」そのものだとしたら、それこそんでもない超存在だ。

セジスを助けた理由はもうひとつあり、まさしく亢龍捕獲に協力者が欲しかったためだ。

動物界は人間界に干渉しないルールがあり、四神も動物としてルールに則っている。それでも亢龍のことはなんとかしたい。

そこで、

人間であるセジスに黒社を倒してもらい、亢龍を引き戻したいという考えだった。

○ 最強と最弱

黒社は最強といえる存在。

一方怯えていた片乙は、最弱の存在。

周回の円グラフ。

最強が一步前に行き過ぎれば？、最弱が一步後ろに下がると？

紙一重、

最強も最弱も、その実、概念的立ち位置は、とても近い。

バランスに僅かでも変化が起きれば、ひっくり返りかねない。

セジスはかつて、1人の人間では到底抱えきれない量の「膿」を抱えながらも、一応の生活ができていた事態とは、素体の丈夫な器を持っている証拠だった。その潜在的な器からくるタフネスさは、

亢龍を捕獲する強力な入れ物になりえる可能性もあった。

思わず自嘲してしまう。

セジス『私、また入れ物？』

朱雀『ちゃんとサポートするよ』

青竜『同じ竜族が迷惑かけてる、すまね』

ハッハッハと、場の雰囲気に一服入れる談笑。

亢龍はともかく、黒社への復讐はするつもりでいた。

黒社に亢龍が宿っているのであれば、それごと退治すればいいだろうし、仮に亢龍が宿っていなかったとしても、黒社はクス人種だろうなと思う。

セジスにとって、亢龍はついで。

それでもいい、

黒社への復讐のプランが立ち始めていた。

私が苛められていることが常態化して以来、どこかでずっと考えていた復讐が、現実味となるプランが、形となりつつある。

○ 苛めの清算

黒社派閥の「膿」をいように押し付けられ、「膿」のゴミ箱かとオモチャ扱い、苛められていた、片乙。

派閥面々にとっては「膿」が軽くなりラクになっていた。

そのかわり私は「膿」を重く多重に抱え、辛くなっていたわけだ。

私は派閥連中へ、仕事内容以前に、

「膿」処理という、最高のサービスをご提供できていたわけだ。

その清算はしなくては。

セジス『でもなんで私だったんだろ？』

なぜ黒社が、片乙に目を付けたのかは、わからない。

黒社は亢龍の見通しもあり、片乙がああ家に産まれることを予知していた。

玩具店に並ぶオモチャのように、

無造作にひとつ選んで、遊ぶターゲットにされていたのかもしれない。

片乙はターゲットと刻印され、派閥に囲まれる異端となった。

亢龍の超能も扱いながら、

黒社は片乙の行動の一部を制限し、洗脳のように片乙の次の行動を操作していた。

各地の配下へと誘導、

片乙は苛めに遭い苦しむ、その様子を黒社は娯楽や暇潰しとして愉しむために。

片乙は自分の判断で行動、各地を逃げて、引越し、転々と転職をしていたことも、黒社によって、仕組まれた操りだった。

黒社が飽きれば捨て、また誰かがターゲットになる。

何度繰り返したのか、

おそらく前世もターゲットとなり、黒社のオモチャにされ亡くなった1人。

なにを以ってしても、片乙のままでは黒社に、まして派閥の1人にも勝てない状況。絶対に自分達に勝てない片乙を、

派閥達もまた、黒社という絶対的後ろ盾のもと、愉しんでいた。

ときには黒社の指示で、ときには各自思い思いに苛めて、娯楽としていた。

派閥の各々が、ときには苛める内容をプレゼンターのように、黒社に伝えることもあったかもしれない。

黒社との同調のため、また元々クズ同士のため、黒社と波長が合っていたことで形成された、派閥の要塞。

働く役目がある、仕事ある社会人だからといって、あきらかな不利、異質を感じながら、吐き出しそうな「膿」恨みを押し閉じ殺し、盲目的に仕えていたとは、「はあ」とため息。

不利どころか、絶対に勝てない「輪」の中にいた。そして最終的には、「あきた捨て」黒社の一言で海に捨てられた。

ともあれ四神から真相の答え合わせはできた。

「膿」は、用法容量を守り、正しく適切に扱いました。

肥大化した「膿」を制御、浄化するため、セジスと四神の共同作戦。

クエスト「黒社派閥を討つ、そして亢龍を捕獲」ミーティングをひと通り。

といったところで、

別に必須クエストというわけでもない。

セジスは動物達の仲間となり、平和で静かな隠れ家ログハウスもある。
以降、幸せに暮らしましたとさ。

ちゃんちゃん。

「 完 」

となると物語として、締めまりがつかないからな。

最後のステージに行こうか。

気付いているかな？

片乙もセジスも、男性か女性かを明記していない。

別に男女平等とか、ポリコレを意識してのことではない。

作者の望む小説のストーリーとして、

望む主人公として、主観的立ち位置の人物が必要だった。

読者には、

この主人公を自分に置き換えて、文字並びの奥にある絵を、それぞれ視てほしい。

男性であつてもいい。

女性であつてもいい。

男性か女性かを曖昧にするから、フルネームでなくてもいい。

ネームメイクとして男性女性、どちらでも適応する名前はいる。

キャラクターモデル、自分がゲームで共に駆ける主人公をキャラメイクできるゲーム。

もあつたりする。あれに近い感覚だ。

作者がセジスとしての主人公の服装を想像すると、

布地厚めの、Yシャツ。

ややオーバーサイズの、カーゴパンツ。

作りの丈夫な靴、そうね、頑丈な作りの革製登山靴みたいなもの。

動物界で造ってもらった義手義足。

主人公の服装にしては、ラフだろうか。作者癖のイメージとしては、こんな感じ。

キャラクターモデル、キャラメイク、

性別や服装など、

想像も変化するし、変えようと思えば、何度でも変わっていく。

これらを明記していないので、

その時その気分で変えられることも、小説の媒体の良いところ。

良い方法を考えた。

現実では復讐できない。

やったとしても、1回限り。

すぐ犯人特定。国家権力がよつてたかつて捕獲。死ぬまで死刑。

今度は海捨てではなく、確実な死亡捨て。これが結末。になるかもな。

だいたい、

1回復讐したくらいでは満足できない恨ミの量なのだ。

100歳人生、死んだあとも、指折り、恨ミを数えられる。

死後の世界でも問い詰め、責め立て、蔑み、戒め、糾弾、非難、嗤笑、嘲弄、凌辱、愚弄、細胞、遺伝、後継、歴史、世相、風潮、気配、影、雰囲気、意思、思念、名残、遣りも、精神も心も靈魂も、潰し消し潰し消し潰し消し潰し潰し消し潰し消し、

消滅し尽くし潰してくれよう。

ハッ、二度と下衆が湧かないよう、蓋する文献だけは残るのか。

こういった二次創作界内であれば、

何回でも、

何度でも、

あわよくば後世にわたって、復讐できる。

この世界であれば、何度でも、復讐できる。

◇ 活かす

この小説、物語を活かす、一番おもしろい媒体は、ゲームだと思う。

漫画やアニメにすると、どうしても前半は鬱展開だけになってしまう。

その点、

ゲームであればフリータイムのLVupやアイテム諸々で、

気分を誤魔化すこともできる。

○ 復讐対象

その対象となる敵は、おおきく分けて3つ。

1 派閥の連中。

生身の人間が単に集まった連中ではあるものの、一致団結し、私をいのように苛めていた連中。

ただの人間1人の加虐心という「膿」が集まり、「膿」を吐き出し続ける、怪物。派閥そのものが、集団心理そのものが、「敵」のひとつ。

派閥の奴らに言わせれば、私は苛められるだけの、ただの弱者。弱い弱い私に太刀打ちできるわけがない、要塞。

見物だな。

粉々に粉碎してみせよう。

2 亢龍。

私の復讐に関して、直接的な恨みがあるわけじゃないけど、人間界の「膿」を助長する存在なのだとしたら、放ってもおけないだろう。

四神及び動物達は、命の恩人だ。

彼らからの協力依頼のあった対象だから、亢龍の捕獲に尽くすことも必要だ。

そして、黒社に宿っている存在であるならば、自然と同時に対峙、退治することにもなる。

3 黒社。

あのクソデブめ。

人の人生を弄びやがって、

絶対に吹っ飛ばしてやる。

黒社が亢龍を宿しているように、私自身に四神を宿すこともできたようだ。

でもそれだと、一瞬で片が付いてしまう。

一応復讐は達成できるけど、あまりに呆気ない。

○ 年月

何を目標とするかにもよるが、
準備とは一朝一夕にできるものではない。

今は動物達と静かに楽しい、安心安全を感じられる毎日だったとしても、
深い傷を身体に、心に刻まれていることも、事実なのだ。

○ 日程

どこで突入するか、日程を考えていた。

これは以前ヘトヘトになっていた片乙の頃から仕返し、復讐として考えていたことで、
夕方とか深夜とかと、行ったり来たり、悩ませ考えていたこともあった。

いざ実際に突入出来る体制になった今、

日程と、時間帯、決行の日程の目星はついていた。

人間界の一点、特別その日だけ、穢れの属性が濃くなる日。亢龍だろう。
そして「膿」の数も、多数。

一網打尽にできる。

○ やりたくない

決行するとしたら、次の相手は人外の第五神、亢龍。

もちろん四神がサポートしてくれることはわかっている。

ほとんど相手にならない片乙の頃と違い、今度ははつきりと抵抗に合うだろう。

動物達と日々トレーニングもしている。十分な自信も備わってきている感覚もある。

それでも黒社の強力さ、派閥の要塞には、届くだろうか？

急に恐怖に絡まれることもある。

なんとかして逃げられないだろうか？

誰か代わってくれないか？

もうやりたくない。

これはセジスが人間個人として、「膿」と向き合っているからこそその現象。

「私よ、私一人分の「膿」など、余裕だろ？」

セジスはひたむきに己が身体と心に向き合った。
焦らず。長く。ゆっくりと。真摯に。

10年が経とうとしていた。

命を救われ、十分な休養を過ごすことができた。

私自身を封じていた呪われた名を捨て、

本来あった能力を解放してもらい、精巧な義肢も貰って、
動物達に感謝している。馴染んだ。

別の感情として、

恨みの心も、消えることはなかった。

○ 悪となるのか？

私はこれから復讐という名目で、

暴力を以て、犯罪を以て、人間達を蹂躪する。

人間達が糾弾主張する、こういうときにピッタリの称号があった。

テロリスト。

もちろん元々望んだものではない。

それでも、

損にしかならない苦渋を集めさせられた過去、犠牲となった過去、「もったいない」の重み、長く永く蓄積してきた、仕返し、恨み、復讐の、心。

考えない？

思い出さない？

できるわけないだろ。

捨てても消しても、消えない、心。

○ 復讐

復讐。

突入の心は整った。

準備。

整った。

心の準備も。

セジス『苛められ、辛かった心を、復讐を以て、精算する』

言葉足らずながら、一言一言噛み締めながらの、セジスの言葉に、動物達も応える。

青竜『よろしく。僕らも一緒に行くよ』



真



先述のキャラメイクは済んだだろうか？

読者の好きな性癖で、主人公を彩ってほしい。

このあとセジスは出掛ける。

セジスは再び人間界へと出発する。

人間達が最つともストレスとなる、事ある事件の元凶となる、人間関係。

個々の大小強弱の歪みが露わとなる、仕事環境。

片乙一人だけでは、討てない。

人間の味方が誰一人いなかったのであれば、別の存在を味方にするしかない。

青竜、朱雀、白虎、玄武。

セジスと成った。ずいぶん遅れたけど、細胞は本来の能力を取り戻す。

運命と云われれば、運命だ。

だけど何でもかんでも、運命だ宿命だで片付けられると、本人はたまったものではない。仕方ないから、運命宿命に向き合う。

復讐クエストを開始するテロリスト、見参。

さあ、突入だ。

この場面は、作者の文字では現せなかった。

良い感じのBGM、よろしく。



参部



○ 祭り

沼地の淀んだ河川の流れる地、一般人の伝統的祭事イベントが執り行われる日。穢れを祓う祭事が開催されている。

山焼き。

季節は年初め頃の冬。

寒々しいながらも澄んだ暗色の夜空、斬り裂く炎は山ごと抱き立ち昇る。

橙色、赤色、紅色、黄色、朱色、緋色に、照らされる。

御膝元で彩るはビームのようなスポットライト。

屋根電柱屋台の高所高所、芝の裾野広がり地表地表、至り巡りつくす発射口。

天々点々と焚かれ、照らし踊る。

昼と夜が混在する世界観を創造している。

昼と夜を混ぜ返すは、色鮮やかな花火も誇らしく鳴り響く。

ドーン ドーン ドーン、バタタタタ、
ドーン ドーン ドーン、
ドーン

○ 巢食う「膿」

穢れを祓うテーマの祭りということで、亢龍を宿す黒社にとって、祭り会場の中心近くは、どこか空気を吸いにくく、窮屈に感じるのだろう。居心地が悪いのだろう。

それでも山焼きは、弛温ノ領の一大イベント。

亢龍を宿す黒社は祭り会場から離れた建屋、

黒社派閥は、まさに侶布工場を拠点として、祭りを愉しむ。

派閥が顔合わせ集会の意味もあり、年々この日に集まっていた。

派閥『迷える子羊から巻き上げてキマツittaあー』

派閥『おーナイスツッスー』

派閥『えっツグううえっゲツないスねええ』

派閥『苛めブン回しできんのがいるとお毎日ストレスフリーチョーカイテキっスよお』

派閥『どんだけ苛め回して勝手に死んだところでえなああんもオトガメなっしい』

派閥『ツミの欠片も降りてこおなあいい』

派閥『むしろ警察様もごいっしょにいいなって苛めてるでしょおうん』

黒社『どんだけカンじてんだ、はしやぎ過ギ』

派閥『次の新作おもちやあお待ちしてますうう』

派閥『また誰だっけアレ、長くタノシめるとイインスけどねえええ』

相変わらずだよな。

ヤクザくずれのチンピラくずれ。下品で貧相なことしか言えない連中だ。

次代のオモチャとなっている人物は、どんな人か知らない。

ひよっとしたら次のオモチャは、若人や引抜か？

願わくば、妖怪化外道化もせず、オモチャにも、されていなければいいが、

黒社派閥が生かさず殺さず、苛めの加減をしているか、

次代が自殺してしまったか、

次代が逃げて、また次代が来て、逃げての、代わる代わるか、あの前世のように。

とにかく、

混沌とした次代のタライ回しはあったかもしれないが、それも今日で終わりだ。

○ 開幕

先駆けの一撃くらい死角から叩き込めばよかったかとも思うが、まあいいか。道場破りならぬ、派閥破りセジス。らしく正面から歩いてバツタリと。

細かい砂利を噛んだ敷居レールをスライド、ガラリ、扉を開く。

派閥の人数は揃っている。

これ以上の参加者はいないはず。予期せず、何者かが現れた不信感。

誰だ。

名乗ることもあるまい。お前らがよく知っている人物だ。

仄かな月あかり、逆光を照らす。

派閥の顔は屋台のお面かとたくさん並び、

久しそうな顔をしている奴、また苛めれると算用してニヤニヤしている奴、睨み効かせているつもりの顔の奴、何をしに来たのかと怪訝な顔の奴。

派閥大集合の面々から大注目を浴びるセジス。

濃い静電気が空気にも緊張を促す。

言葉はいらない。お前らの結末はひとつだ。

ドンッ

開幕を告げる踏切り音。

義足がおもいきり、踏み、地床蹴る。

アスファルトが跳ね返るほどの強烈な一歩から踏み切る。

細かく散る粒子も演出のひとつ。

粒子が輝き、ある種の晴れ舞台のようにステージを彩る。

鋭く放たれる、

飛び蹴り。

黒社強の肥え太った顔面をガッチリと捉え、めり込む。

ブーツの外側でも踵を顫顫に捉え、土踏まずは眼輪筋を塞ぎ、母趾球を鼻筋鼻根筋を歪ませる。

よるめくデブ。

「膿」により、本来の能力を封じられてもいた、片乙。

「膿」を紐解き、真名を授かり、能力を解放した反動は、セジスに人間離れした潜在能力を宿すに至った。

私はこいつらの知っている片乙と同一人物、でありながら、以前であればあっさりと取り囲まれ、派閥のいいような見せ物、壊される人形ショー。オモチャとなる状況。

別人のような動きをしているセジスに、戸惑いを隠せない。

隣から常に何時何時も黒社に張り付いていた太鼓持ちも、目を見開きつつも目が泳ぎ、驚いたような顔をしている。

なにが起きているのか、わからないような顔をしている。滑稽な顔をするようになったな、太鼓持ち。

苛められっ子の弱者が、派閥達が信ずる絶対強者、その顔面を歪めさせている。来たるべき時が来た。その場の派閥全員が一瞬で状況を察する。この瞬間。

黒社は己への顔面キック、とくに意に介さず。淡々と派閥への高慢なアゴ使い。

同時に、

主人といえる黒社に足跡が型いた途端、一気に臨戦体制となる。

数圧。

数で有利な派閥は、私一人に負けるわけがないと思っているから、以前のように、
囲んで摘んで千切り、排除するつもりだろう。

派閥『あーーオメーー』

派閥『俺が敵か。お前の？、偉うなったのお』

派閥『なんできたン』

派閥『デメエ如きになああんにができるウウウ』

派閥『いよいよ死にきたのかああ、ああ』

派閥『オレらを地獄送りんしてみるかあああできるわけねーけど』

「たかが地獄ごときで、済むと思ってんのか」

○ 八つ当たり

整理整頓がない、

乱雑しかない工場には、逆に乱雑はいくらでもある。

遠慮なく大暴れする以上、使える資材はたくさんある。

台車をスケートボードのように乗り扱い、

まずは多勢を分散、

フォークリフト、社用車もついでに暴走させ、

資材をばら撒き、

テリトリー展開。



真



○ 筋肉

真っ先に、流石はフィジカル。フォークリフト、社用車を一息に飛び越えるフィジカル、得意としているローキックにて動きを止めに掛かってくる。

以前は髹塗装屋にて、手も足も出なかった筋肉のフィジカル、

筋肉『カモン、サンドバック』

筋肉『殺しそこねたからな、今度はきっちり死ねやああ』

どんな方法であっても筋肉を阻止できる、落ちて置いて対処できる私の姿勢があった。

今では足を振りかぶり、得意のローキックモーション動作に入っている筋の流れも見えるようになった。

筋肉のローキックに対して、

交差する、ソバット。

カウンターもついでに威力の上乗せになって、足応えに伝わる。

バキッ、

顛顛の急所に踵が振じ込まれた。

一撃。

○ 警察

筋肉とほぼ同時、ホルダーから構えて向かう警察。

警察『治安を乱す凶悪な犯罪者め、とっ捕まえてやる』

警察『怨恨でとち狂い1人2人を暴力で傷つけたところで、社会になんの意味もない』

警察『暴行罪、殺人罪、警察の目の前で犯行を犯した愚かな犯罪者になるだけだ』

警察『ましてここにいる全員が証人だ』

警察『この人数にあっけなく拘束され、身柄拘束だ』

警察『お前の主張を弁護する者も、誰1人いない』

警察『罪はどこまでも大きくなる一生拘置所に入れクスーーーーー』

初顔ではあるがネズミ取りの誰かだろうか、

ここに居るということは、黒社派閥の1人と仮説、と直感が結びつく感覚が確かにある。
廃コンテナの現場にも、居たんだろうな。

警告文句は、一切触れていないな。

黒社が派閥と、私の手足を挽いだ暴行犯罪の件は。

犯罪者として祀りやすい私を一方的に煽り、自身の立場にも関わる黒社達のこととは、

最初からすべて揉み消されることになるから、言わなかったよな。

やはり闇警察の存在があり、黒社派閥の一端を担っていた。

警察本部に連絡はしているだろうか？

闇警察の自覚があり、連絡自体控えているか、

あるいは警察本部もこんな廃れ工場、ハナから相手にする気もないかもな。

ホルダーから拳銃を取り出し、構えて、射つ。

やむなく行使される警察権力の正当防衛ということだろう。

だがこの場では、人間の法律憲法権利も介入の余地はない、あるのは私の復讐。
拳銃から発射される弾丸の通過ラインが見える。

人混みを避ける要領でラインを避けて進む。

当たらない弾丸に焦りの色、脂汗が滲んで、空気を吸いながら、

警察『・っ・ひえっ』

の拍子、言ったか言わないかで、弾丸の速度と交差するカウンター。

木槌。犠牲となった罰金の重さも込めた、ロング木槌。

車の速度で、真っ直ぐ、

槌口のスイング。鳩尾の芯を捉え、槌口は面で鳩尾に、深々と突き刺さる。

ベッコン、

槌車に轢かれた衝撃力。

その一撃は、セジスの思った以上にめり込んだため、反射的に若干やりすぎたかなと思った
りもする。

アバラの骨など粉になっているだろう。

黒社派閥、脱落の2人目が、国家権力様の警察様。弱っ。

どうした？

大勢民々の味方の警察様が、機能不全になったぞ？ お手上げか？ 無能共。

一撃。

○ 先生

黒社と同じ太めの人型だが、半端に太した図体。ただの型落ち。筋肉と比べても型落ち。もう相手にならない。

太めに達磨か丸々とした上半身を支えるには頼りない、痩せた細木のような下半身、台車の下段スロー、脛断ちからの、角材アタック。

そういえば、

いつかの約束を果たせなかった原因は、テメエの八百長だったな。

高校時代、代表を選ぶテストのとき、私と後輩1人、2人だけのテスト比べ。テストスコアは、私が高かった。

先生『片乙にできるわけない』

先生のこの一言で、テストをもう一度することになった。

二度めのテストで負けた私は代表を譲り、「イベントで再会する約束」を守れなかった。そして、

先生は私に、最初の「負け癖」を植え付けた張本人。

少年片乙の無念も込めた、角材ストライク。

ズギヤツ、

一撃。

○ エラ張り

類はなんとやら、か、相手にならない以下同文。

ベシツ、

一撃。

○ 妖怪ババア外道ジジイ

妖怪『やややややや』『めめめめめめ』『らららららら』『れれれれれれ』
以前はこの一言一言で枷がかかり、途端に身動きを封じられていた。
今、私はコイツらを殺しに来ている。一々応じてやる理由はない。

ババアは己が裁量も省みず、我先にと前に出る性質がある。

前に出たところで實際出来ることは、ギアアギアアけたましく騒ぐだけ。

外道ジジイもババアを煽りたてる。

が、所詮どちらも、うるさいだけの老害。本体にはなんの技能もない。

ババアはババアと似た老害と同調するのも、ババアの性質。

バサリッ、

ほっといても集まるので、効率よく、ひとまとめにさせてもらった。

針金を編み込んだ防護ネット。

本来は出荷品の傷や汚れを防ぐ、しなやかに靱い編み物カバーとしての用途。

トラックの荷台をまるまる覆うサイズもあり、広げるとかなりの範囲をカバーできる。

端のババアも、つまんで捨てて、蹴ってどかして、防護ネットカバー内にまるめる。
いわば大きい虫取り網に絡まれた老害共、
縛り上げた網を、ぎゅう、ぎゅう、長く細く捻じる。

よっこいしょ。

ハンマー投げの要領で、助走としての引き摺り回す段階から、徐々に遠心力が加わり、
縦横無尽に振り回すと、
なんということでしょう。広範囲をカバーできるフレイルになる。

妖怪フレイル、呪いの武器だな。

取り回しは少し重いものの、

鬱憤を晴らすための武器の重量、その手応えとしては納得がいく。

重量のあるフレイルを、

右になぎ、

左になぎ、

薙ぎ払う。

遠心力も回転力乗算として加わったフレイルは、強く速く暴走する。

何も出来ず絡まれた悔しさやら、恐怖やらでギャアギャアもギャラジャラ、さらにうるさくなった。

謝罪らしき言葉を叫んでいるババアもいるようだが、誰が聞いてやるか。かつてされたように、人間の扱いはしてやらぬ。

網の中、妖怪外道はミキサーになりながら、のたうち回っている。

いつかの私がそうだったように、涙、涎、鼻水で糞を流しながら、悶えている。こういうババアジジイは、口撃を得意としている。

かといって、うるさいから黙れと言ったところで、黙れるものでもない。

ゴミ袋の中の生ゴミのような状態でもなお、うるさく、やかましい。

黙れるほどの理性もすでない妖怪だ。

体や手足、頭もろくに動かないくせに、

口であれば、言葉であれば、それはそれは流暢に、いくらでも回し続けてきやがる。私もかつて窮地に追い込まれた妖怪の口撃だ。

こういう奴らには声を出なくさせてやるのが、一番効く屈辱になるだろう。声帯ごと、黙らせてやるう。

ビット。電動ドリルに使う、ネジられた小さめのドリルだ。

汚物の喉元めがけて、速射ギョルギョルギョル、鋭く抉る。

部位破壊、声帯。

強制サイレント。

やっと静かになった。

この糞老害妖怪共め、ざまあみろ。

怯え、腰も抜けているか。

痛いだろう、恐いだろう、怒るだろう、恨むだろう、

かつて自分達が私に向けていた事と同じだと、気づいてはいるだろうか？

屈辱は感じられたか？

手先足先まで恐怖に満ち満ち足りた顔をしている。怯え、恐れ、慄く顔を、

妖怪団子のゴミ袋、見てられんほど醜いな。

声帯がなくても、なお汚い悲鳴がジヨロジヨロ漏れている。

屈辱も最高潮になったところで、トドメを、刺さない。

悶える屈辱を、いつまでも味わえ。

迷惑撒き散らすクソ老害め、
脳ミソ腐った妖怪外道が、一般人に四の五の言ってるじゃねえ。
過去ごと消える。

妖怪フレイルをさらに振り回し、
硬いコンクリートに、ゴテゴテした壁に、叩きつける。

数いる妖怪個体を一々相手にするのも面倒だ。
まとめてくたばれ。

一際暴れん坊將軍だったキチガイも妖怪団子に丸く収まり、デユクシ。
お払い棒(大麻)代わりの防護フレイル、浄化されよ呪霊退散、デユクシ。

妖怪団子の中で、勝手にポキポキ折れといってくれ、根腐れヒョロ枝、デユクシ。
女王様気分は堪能できたか、絵の具口唇、デユクシ。

他雑兵妖怪もまとめて、デユクシ。
一撃。

○ 脳梗塞ジジイと倅

老害は老害の近くから死体が動くように湧いて出る。

ゾンビ老害の分裂か。気色悪い。

傍らには倅も加わる同身体のように。

手元にあるは妖怪外道を畳んだ、防護ネットフレイル。

暴走した脳梗塞ジジイを止めるは、同じ老害同士でちくりあってる、ゾンビを処理する鉄球のごとし。

倅は脳梗塞が動力源の機械。元を断てば止まる。

どちらにしろ、

グシャツ、

慣性のまま叩きつける。グチャツと潰れる範囲重量。

グロテスクな汚物を一旦遮る、粉袋を撒き、砂溜めブラインド。

一撃。

○ 外道ジジイ

しぶとい。

老害ゴミ袋の隙間からコソコソと、外道め、1人だけ脱せたか。

長く永く、悶える屈辱を、外道細胞全部消滅するまで味あわせてやりたいが、後もつかえてる。

近くにある鈍器という鈍器を、毅然たる殺意のもと、これでもかと突き刺す。

両目ダンドン、鼻ダンドン、歯舌口腔ダダダダダダン、ダンドンダダン、性器もダン。もう二度と、汚ったねえ口は利けねえだろう。

バカは消滅しないと治らない。

一撃。

○ 運吸い

そうだ。あの目。

一定離れた棚の裏からのコソコソと見ていた目線。

ピンポン玉のように目をまん丸に見開き、視界の挙動を何も残さず、凝視している。

なるほど、運を吸うのは目から吸収していたのか。

裏に隠れてネチネチと、他人から運を掠め盗る奴のしそうなことだ。
運だけで生きていた奴は、運を剥がされれば、脆い。

絨毯マットをブワリと仰ぎ、籠る塵気をなびいてやれば、
埃り、砂砂利が、ベツタリと目球の膜に張り付く。

律儀半端に育ちの良い家庭出身もあり、人間同士の出し抜きはスムーズなものだ。
反面、獣の反射的行動には、対処が遅れる。

たいした目が見えなくなった気分はどうだ？

方向感も失われれば、時間感覚もわからなくなるだろう。

チビデブだけど動体視力はムダにあるからな、

目が空いてればこんなテレフォンパンチ、当たらないんだろうな。
ズドン、

両目は飛び出し、鼻は沈む。

正道正拳突き、ドストレート。顔面へ、深々と突き刺さる。

一撃。

○ 美形詐欺屋

詐欺屋 『ジョークだろ およお昔の話だろ お笑い話にすりやいいじゃねえ』

詐欺屋 『そんな貴方に新商品、貴方も潤い、派閥の皆さんも皆んなハッピー』

詐欺屋 『君が買って、君が売る、するとお友達も買って、お友達も売る』

詐欺屋 『君の分とお友達の分、ほら大事な収入に、こゝんなに』

詐欺屋 『お友達もお友達の分が収入に、お友達が増えればさらに増えてステキ』

詐欺屋 『普通に働いては絶対入らない金額巨額』

詐欺屋 『つーかこれも普通の働き、なんだけどネ』

美形 2人で説得力を増す、誘わし、言いくるめるタッグ。

お金ハッピー話で私が止まると思ったか？

以前までもに詐欺を受けていたときにあったら、その甘言巧みに狼狽えるだけだったかもしれない。

今はお生憎さま、商談を悠長に聞いていられる状況でもない、

話を聞いてもらえない詐欺屋は、一転逆上し、金切り声をあげ泣き出す。

セジス『黙れ言うとするのが解らんのか』

気迫、失神、

御託を黙らせる、ゴシツクな一言。

そういえば、詐欺屋に連絡していた売人正体を聞き出すのを忘れていた。といっても、先生も運吸いもノびてるからな、このどちらかだろう。

口だけに特化した、ヒヨロヒヨロの素体。

チカチカ気絶オチしてないだけで、フラフラになっている。

もう放っておくか、

そよ風でもあれば、ハタリと倒れるだろうが、

高価そうな服を無造作にジュツと掴み、ポイポイツと投げる。

一撃。

○ 太鼓持ち ゴマ刷り 内弁慶 傀儡 他派閥

傀儡 『気デモフレタカ、ヤメナサイ』

俺らが主力だと言いたそうに、肩を怒らせるのは例の界限だ。

太鼓持ちとゴマ擦り、内弁慶他の中ボス候補、いつもの脇を固めるメンバー
チンピラ、ヤンキー、グループ。

要塞。

傀儡もくつつく荷物、腰巾着かと後ろを憑いて来ている。

複数人で走り回り囲みこむ算段だな、

いつか考えていた特攻ソ口復讐では、まさしくこの状況になるのを危惧していた。
多勢に無勢は、やはり変わらない。

目地ブロック。コンクリートを固めただけの痛々しいブロック塊。

たくさんある。

身をクルリと返し、掴んで投げる。轟と飛ぶ。身をクルっ半返し、掴み投げ、轟と飛ぶ。
クルっと轟、クルっと轟、クルっと轟、クルっと轟、クルっと轟、クルっと轟、クルっと轟、

ターンとリズムが交わり、テンポ良い。

水平に落下してくる隕石の威力。

ガコン、ゴゴン、ガコン、ゴゴン、ガコン、ゴゴン、ガコン、ゴゴン、ガコン、ゴゴン、

要塞の壁を貫通する、城割り隕石。

一心不乱。

隕石ブロックで討ちもらした数人、

やはりチンピラ崩れ、

代名詞鉄パイプをメインと持ち構え、せっせとヤンキースタイル。

あいにくゲームじゃないんだ。お前らとチャンバラを楽しむ気はない。

受け流し、刺突。

丸カン。

片手剣の長さほどある杭だ。不良ナイフより太く長く、はるかに貫通する杭だ。

ザクリ、

常人なら動けない大ダメージだろう。

一撃。

○ 大食漢

大食漢『偉らなつたのう』

大食漢『そこに直れえや』

鼯鼠を束ねてた自称偉い奴、デブが脂肪を揺らしながら、ブヨブヨしている。

また鼯鼠パワーで私を封じられるつもりか？

こいつは食い気が止まらない、呼吸こそ捕食、捕食こそ呼吸の奴だ。

大食いが駄々こねる場合、口に物詰めてやれば、黙る。

もう一生食っておけ、ギトギトホールかという口腔へ目掛けて、

土嚢ブチ込み。

ベチヨリ、

腹風船を満たす、十分の量だろう。ドブだのドロだのの調味料もたっぷり、美味しいなあ。満足だろう。腹一杯喰えて。

考えてみると、

先生はデブ、エラ張りデブ、脳梗塞の倅もデブで、塗装屋の棟梁デブ、運吸いチビデブ、

筋肉はデブじゃないけどデブ、この食いしん坊デブに、派閥の数名デブ、

そして黒社はボスデブ。

私は160cm、人間としては小さめなのに、
どうしてデカいのとばかり遭たるの？

どうしていつもデカいのと張り合ってるの？

まあいいや、とりあえず、

一撃。

○ 子持ち様&ガキ

ガキ
『ビビビビ
イイイイ
ギギギヤ
アアあああ』

ガキ『ビビビビイイギギヤヤアビビギギギヤヤアアああアああアああ
アアアアああピィギヤピィギヤピィギヤピィギヤピィギヤアアアア』

同じ派閥のツレが劣勢なのを感じ取っているのか、音波兵器は順調だ。

なんとなくわかってたけど、あの子持ち様も、黒社派閥、いわば私が部屋にいるときの監視役だったのか。

いくら防音、ノイズキャンセリングシートを張ったところで、無音にはできない。

一度漏れ始めた音波兵器は、例えば小音になったとしても、騒音の煩わしさは残る。ガキのわめきは聴かされれば聴かされるだけ、いいようにペースを崩される。

鬱陶しい音波兵器など、発生源の元から完全停止させてやらないと。

音には音か。

本物のサウンドでハネ返す。

タイミングよく息を吸い込み、

セジス『

』

（（（（雄叫び））））

ガラスは空中をキラキラと舞い、中心のセジスを見栄える。

山焼き会場まで届いたのではないかという、超広範囲衝撃波。

女は泡吹き倒れている。

ガキは、めくれたシーツの隙間から、人間の型に黒く渦巻く物体だった。

音波兵器の正体は、亢龍の属性、亢龍の穢れ、「膿」丸出しの存在。

亢龍にとって、黒社の次の憑代として品定めしていたのだろうか。

一旦、子持ち様＆ガキは停止した。

一撃。

○ 別の意味の祭り

山焼き会場とは別の意味の祭りが、催されていた。

「敵」「敵」「敵」「敵」「敵」「敵」「敵」「敵」「敵」「敵」

v s

「セジス」

無双祭り。

ソバット、正拳、正道正拳、防護ネットフレイル、ビット、丸カン、隕石ブロック、木槌スロー、角材ばら撒き、刺突ストライク、砂かけ、一蹴、雄叫び、事ある毎に蹴っ飛ばす、足癖ワルいセジス。

台車ターンを交え、フロークロス引き、パレットフリスビー。

大勢多数、対、1人だとしても、対等以上に対応できてしまう、この状況。

「はっ、はあっ、は、はっ」

さすがに、

興奮と、息切れ、Fatigue Factor 疲労物質が溜まる。

できることなら今すぐ消したいダルい疲労感、これも「膿」のひとつ。

1人、2人と、死体蹴りの在庫が、

3人、4人と、積み重なり、

5人、6人と、順に、祭りの出し物が済み、

お集まりの方々、多勢の賑やかさは、

催しが鎮まる中、

動かずふんぞってるのが1名。

○ 黒社

これで派閥の皆さんは全滅。

散々苛めに苛められていた、弱者として弄ばれていた、かつての片乙。

セジスとなった同一人物に、便利な派閥の取り巻き面々を、すべてノされた。

我こそが権力だと当たり前にふんぞり返り、鎮座する仁王像。

大仏のように仏頂面だった黒社も、

重い図体を、順に稼働し始め、例によってビリビリ空気を締める気配。

黒社『ヨエーお前ら』

黒社『あーーめんどくせ、仕方ねエナ』

うるせーデブ、もう一度顔面キックだなと思った矢先、走る悪寒の直感。

仁王像の体躯が膨張、

肌は赤黒く滲みこんで、黒々とした刺青が浮き出る変質。

他者を踏み潰してでも己を肥えさせるという、権気をあらわしているようだ。

眼には血流が集まり赤く染まる。

身の丈も肥大化しさらにデカくなりやがった、このデブ。

丈は3mくらいになっただろうか。

黒社の脅威感、威圧感が最大限に膨れあがった姿のようだ。

私が片乙の頃であれば畏怖に怯み、竦んで、なにもできなかっただろう。

今思うこと？ そうだな。このクソデブめ、くらいかな。

黒社、その太く伸びる剛腕はクレーンを彷彿する。

ゴォッ、と空気を割りながら、

梁の長さで重さで振り下ろされる、鉄槌。

さすがに受け止めきれない、ひらりと身を交わすセジス。

○ 柔剛

剛を柔で往なす戦闘が繰り広げられる。

巨軀黒社は、例えるなら制御を失った暴走重機。

その重い一振り一振りに、場の空気さえも碎け散る。

取り巻きとして寄生していた派閥面々も、巻き添えにならぬよう身を小さく縮こまる。

圧倒的、脅威威圧感。

ボディに当たれば人身事故級の大衝突。

アームの振揮るえばプレス機の圧力、握捕まれば、身動きひとつできず潰れる。

レッグは二双の支柱、穿たれれば地層ごと深く抉る。

尻ぎ和ぎ捌くは、セジスの身こなし。

工場のガラクタも撒き散らしながら、脅威威圧の重機。

受け流し、長い腕脚をくぐり抜け、重機のネジひとつから外し、細かく分解する様子。
繊細に的確に反撃する。

かつて感じていた怖れは、もうない。

復讐の迷いもない。

その動きには、美しさも備えた、キレがあった。

が、鉄を筆で撫でたところで、ダメージは入らない。

ただ撫でていたわけではない。

この工場内の構造内、最も高さがとれる一角地点、吹き抜けへと誘導していた。

ワイヤーの反動も用い、高所へ飛び上がる。

天井裏の梁などには木材などに紛れて見えにくい死角も交差する、その中には、案外無造作に、ボールなんかも雑に収納されていたりする。

ボールだ。大剣くらいある。

限りの高所から、落下速度も乗算した、上空からの急降下、

回転、フロントフリップを重ね、回転を重ね重ね重ねる、

クルクルクル、グルグルグル、キリキリキリ、

両手でしっかり握るボール、

振り、被る、

セジス『たあああ！』

ドギギンッ、

点、線、面の複合角度、脳髓に混合衝撃を伝える。

ボールは頭型、大仏パーマに添ってベツコリと曲がり、手応えと威力を伝える。

頭頂部へ、会心の一撃。

効いただろうか。

ボール会心の一撃のあと、さすがに一筋の血は流れている。

一応、血は赤いようだ。

仁王像の体躯そのままに、仁王立ちしている黒社。

やがて眼が紅く光り、やがては輝くほどの眼光となる。

亢龍だ。

真



○ 亢龍顕現

半屍となっている派閥連中をぐったりそのままに、塵芥に紛れた半屍、廃材に埋まった半屍、防護ネット処理した半屍、蠢動と揺らぎ集い、個々、各首として供物かと生贄かと担てる。

黒社を中核本体とし、

派閥取り巻きの個々人は、各首の一本一本に、ズモズモ延びて媚びる。

多頭の頭と蠢き繋がる首、首、首、

亢龍の属性は、視認できるほどに濃く黒い鱗を纏い、中核の黒社。

それは派閥、集団心理の具現化として、相応しい姿をしている。

災厄の存在、伝説の怪物、多頭の獣、ヤマタノオロチにも姿が重被なる。

亢龍の属性が形成する、実態を孕むほどの幻体。

亢龍の正体のひとつの姿だった。

黒社ノオロチはとてつもない覇気を放つ。

他々をすべて踏み潰す、他々を蹴墮とす、他々なぞつまんで捨てる。
服従の他々は消耗品。

我が強さを以て、他々を強制支配する絶対者こそが放つ、覇気。

セジスに覇気はない。

あるのは、ただひたむきに己が活動を営む、活気。

掲げる手。

手元に活気が集約され、四神のサポートもあり、形成される属性。

四神に由来してきた、秘伝の宝刀。

クサナギ之剣。

○ 黒社ノオロチ

ヤマトノオロチとなった黒社と相對する。

苛められた恨み、何も無かった憤り、四神の威光。

これらを雄叫びとして、放つ。

覇氣に吞まれぬよう、防具として放つ活氣。

黒社ノオロチは、私を苛めるオモチャではなく、敵對者として排除しにかかってくる。

黒社ノオロチ。

我が頂。我がため。他者は犠報。自覚もなく当たり前。我が最強。

「膿」が肥大化した亢龍の宿る存在。

これが黒社の、派閥の、亢龍の、最終形態。

對するは、

在戻のセジス。

最弱に仕立てられた人。当然のように苛められていた人。最強の對極の存在。

本来の力を取り戻した人。

○ ラストバトル

壮大なBGMが再生されているけど、とりあえず落ち着け。

まずはまあ、多頭の首が八方十六方からウネウネウネと、邪魔だな。

哀れな半屍派閥を斬り落とすか、

全面を尽くし覆う大暴れする、黒社ノオロチ。

バキバキ落下してくる倒木、ジャンジャン鳴り止まぬ喧騒、ゴロゴロ濁流と流れる津波、ズタズタ雑に壊れる物資、ベキベキ別れる地盤、ギャリギャリ鉄骨が乱れ飛ぶ、ドザドザ飲み込む土砂崩れ、バラバラ吹き荒ぶ気流、ガラガラ倒壊する建物、

青竜、朱雀、白虎、玄武が、いよいよ亢龍を防ぐ。

災害を顕現させるほど猛烈に荒れ狂う、黒社ノオロチの猛烈な攻撃。

青く凪め、朱く染め、白く収め、翠く止める。





往なし、交わし、斬撃と交差するセジス。

剣を持つ実戦は初めてだけど、初めての気がしない。

何度でも扱い慣れている馴染みがあった。

まるで、

それはゲームで視ていた、想像していた、彼ら。

何度もイメージした。へっぴり腰になったとしても、何度も真似した。

英雄達の動きそのもの。

セジスも、できていた。

カッコいい、鋭い、猛々と続き繰り放たれる攻撃、

袈裟斬り、逆袈裟斬り、打ち斬り、斬り払い、薙ぎ払い、兜割り、斬り打ち上げ、双斬り、連斬り、回転斬り、滅多斬り、滅多斬り、

永く、瞬く、繰り出される無数の斬撃。クサナギ之斬撃。

霧散する亢龍属性。

亢龍の属性自体、この空間から薄くなっていく。

ヘドロのように重く微睡んでいたオロチの「膿」は、
いつしか灰のように軽く、弱々しく散るうとしていた。

派閥としていた者達が担っていた、

数々あった黒社ノオロチの首用派閥は、もはや挽がれている。
オロチの首ごと斬断され、

半屍だった派閥は、死屍累々。

遺ったのは、
黒社。

○ キック

黒社は図体こそでかいものの、両の手平を地に、両の膝を地に、
乞う弱者の姿。おそらく初めて味わう感覚なのだろう。

弱々しい怒りを湛え、頭を垂れ、四つん這いで小刻みに震えている。

セジス『立てやデブ』

復讐を仕上げる最後の一撃を放つ。四肢を幅広げ踏ん張り、力を込める。
義足を軸に、遠心力を瞬間に集約した、

蹴り。

脚は弧を描き、つま先は喉を顎を杭打ち削ぎ、甲は顎をバチンと爆ぜる。
思いつき。蹴り飛ばす。

吹き飛ぶ、跳ね飛ぶ、黒社。

3 mの巨体が、工場の乱雑した空間の角角にぶつかり、蹴りが捉えた首回りは、首を中心に、下顎、胸骨、鎖骨、ごっそり削ぎ削りながら、その衝撃力を伝える。

吹き飛ぶ慣性は収まらない。

剥き出し鉄骨の骨組みの角角、鉄骨の梁の角角、鉄の重機の角角、積まれた大小の角角、床壁部区の突起の角角、

各角角角、各角角角に激突、衝突、

建物が崩壊する轟く激衝突を鳴らしながら、無尽に跳ね吹き飛んでいく。

やがて慣性が収束した先は、瓦礫となった焼却炉の残骸。

人体の急所がクズと化した黒社が転がっている。

その蹴り一撃は、別世界の威力だった。

私は復讐を果たす事ができた。

黒社を討つことに成功した。

ボロボロになった工場内の残骸。埃はゆっくりと降り鎮まり、静寂が雰囲気洗い流す。

気を静め、

ほっとしているセジスも佇む。

こういう黒社のような存在は、世界中にいるのだろうなど、自然と悟っている自分もいた。

この戦いのあと、亢龍は、

人間界と動物界を縫うように、またその狭間にいる穢れの存在として、再び身を隠し、逃げていった。

○ 収束

これからどうする。

亢龍の捕獲クエストの件、霧散した亢龍属性は、完全に消滅したのか、

それともどこかに逃げていったとしたら、私達に行き先はわからない。
四神達の依頼は、納得してもらった形で果たせた。

私の復讐も果たせた。

うん。燃やそう。

消してしまおうと思った。

「膿」を孕む犠牲者を祀り、代わる代わり苛め、無念の逝去を繰り返させる。
閉じられた「輪」の風習。

少なくとも黒社派閥が形成していた「輪」に属する各地。

黒社の派閥だった各地を、遺伝も細胞も後継も残さず、完全に消滅させてやろう。

もう余計な「膿」が発生しないよう、また誰かが犠牲にならないよう、

「輪」の風習ごと、不要な「膿」を燃やそう。

しかし、各地各地が、遠いな。

○ 火之粉

あちらの祭りもフィナーレの頃だ。

山が空へと燃え上り、降りてくる火之粉は、冬の風、雪の隙間をひらりゆらりと漂う。

火之粉はひらりゆらりと流れて飛ぶ。

ひらり ゆらり ひらり ゆらり

近くへ、遠くへ。

「・・・」

火之粉が勝手に飛んでいって火が付いたんじゃないあ、不可抗力だよな。

四神の「ちょっかい」だと思っけど。

フッフ、ちょっと悪い顔になるセジス。

火之粉は空を漂い、各地へ降臨する。各地へ。各地へ。

底から込み上げる炎、炭も焼き消す炎が昇る。

青き炎、朱す炎、白え炎、翠の炎、彩る炎。

これまで辿ってきた各地各地に、炎が行き届き、昇り猛っている様子がわかる。

ひよっとしたらまだ燻っている九龍の属性も、

各々様々に炎で照らされ、灰も残さず消え逝く。

まあゝゝゝ すごかったね。

作者自己評価ながら、傑作だ。

2時間映画にすると、前半1時間は片乙が頑張る、転職逃走劇。鬱展開だろう。後半30分のガラリと展開が変わる動物界の休養をはさんで、セジス登場。残り30分のアツい晴れ舞台、魅せ場担当の復讐大立ち回り。あまりロスタイムにフィナーレだ。

連載漫画はともかく、映画やゲームにする場合、分作にはできない。

第1部、第2部、みたいな分作にはできない。

分作を想定すると、第1部では鬱展開だけになる。それはまずい。

1本1作で一氣に通すしかない。

引き延ばすと3時間4時間とかにも、平気でなるだろう。

休憩入れながら上映する？

◇ 募集

一応、聞いとうか。

この原作に絵描いてくれる作家、いますか？

◇ 補完

冒頭で作者は、絵とする漫画が描けないと述べた。

セジスは描ける。

シーンに必要な建物など、大変だけど描ける。

片乙、大事な主人公がボロボロになる姿は辛いけど、一応、描ける。

黒社派閥連中は、描けない。

大変だから。面倒だから。怠いから。嫌いだから。描く気になれないから。

「敵」となるキャラクターが描けない、嫌いすぎる理由、わかってもらえたかな？

愛される「敵」、憎たらしい「敵」、敵つぽくない「敵」

「敵」も大事。

創作無数にあるシナリオ、シナリオにおいて、「敵」も大事。

クリエイターがデザインする「敵」モデル絵にも、こだわりは込められている。

◇ プレイヤー

セジスは最終的に、48歳とかなんですよね。

片乙の凄惨な海捨て事件が、38歳。

リハビリに10年くらいはかかるかなと。

なんなら0歳からの前提含めて、48歳までの生涯を辿っている。

キャラメイクも高校くらいの少年、成年、壮年と、3種類くらい要る。

ゲームを始めると、最初に少年と成年のキャラメイクをする。

この開始時点で、ん？ん？ と思っもらう。

式部の途中、セジスと名前変えるくらいで、サプライズ演出。壮年。3回目のキャラメイクタイミングが発生する。

そして名前も、もつと良い名前をつけてくださいとガイドしつつ、任意でかな？

変えられるようにする。

キャラメイクゲームだから、名前も片乙とセジスじゃなく、プレイヤーの好きな名前にすると良い。

◇ 挨拶

手元でご覧になっている読者へ。
視えた場面はあっただろうか？

ありがとうございました。

○ 語り

さあ、次は社会の、世界の、黒社派閥を蹴り飛ばしに行こうかな。
おやゝ？ ビビってるお前はゝ 黒社みたいな奴ゝ
なんてね。

世界というと、大きすぎてよくわからない。
社会といっても、大きくてよくわからない。
そうだな。

学生の同級生全員。あるいは近々隣々住民全員としようか。

○ 前者

この者たち全員のために会社に勤め、身を捧げ働いたとしよう。
世間に貢献する、素晴らしい功績だ。

立派な生活もできる。収入も上々だ。

毎月給料30万近くもあれば、十分な収入だろう。

立派な成人。それが10人いれば、効果も10倍だ。

真



前者は低すぎる、後者は高すぎる、逆もまた然り。
譲歩したい。届けたい。

言葉が、答えが、意識が、まだ世界に足りていない。

なんとか今ある言葉でいうと、
柔軟になれるといいかな〜

今度こそ 本当の

「完」

T
h
a
n
k

y
o
u

f
o
r

R
e
a
d
i
n
g

2
0
2
4
年
1
2
月
2
4
日